

---

# 滅びた大地、芽生える希望(旧題：学園最強ファンタジー)

takaya

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

滅びた大地、芽生える希望（旧題：学園最強ファンタジー）

### 【Nコード】

N6883I

### 【作者名】

takaya

### 【あらすじ】

荒廃し、人の住めなくなった死の大地。その上で自由に生きる汚染獣。おおよそ人が住むに相応しくない環境でも、人々は逞しく生きていた。それを可能にする移動型都市の名前を自律型移動都市<sup>ス</sup>レキオ市<sup>レキオ</sup>といった。

当作品は、鋼殻のレギオスの二次創作です。シリアス全開な原作を完全無視。

レイフォンとリーリンの幼馴染のオリ主が二人と共にツエル二へ

!

## プロローグ 『天剣』（前書き）

この小説は、原作を完全無視した形で突っ走ろうとしています。一応原作を知らない人でも読めるように努力をしますが、多々わからないところがあると思いますので、後書きにて用語解説を入れたと思っています。

本作品は私の初投稿する作品です。誤字、脱字が無いよう推敲して投稿しておりますが、もし見かけられれば一声かけてくださるとうれしいです。

以後、注意事項とします（原作をご存知の方はなるべく読むようにしてください）

本作品は、原作を完全無視した方向で進めようと思っています。

私自身、原作ファンで何度か読み返すんですが、シリーズが苦手なので後半のシリーズには少し尻込みしてしまいます。

さて、ここまで言えばお分かりかと思いますが、この作品は後半のシリーズを一切除去しております。

まず、リーリンが王族ではない。

それに従ってレイフォンは薔薇の茨を打ち込まれていません。天然ものの最強です。

後、この作品の主人公はオリジナル設定の、原作では出てこなか

った人物にしようと思います（以後オリ主）。

リーリンとレイフォンは、オリ主の仲立ちによって原作開始前にはすでに付き合い始めています。

それに従って、原作ヒロイン達はオリ主のほうへと流れていくこととなります。

いろいろと原作を無視した形にはなっておりますが、ご了承ください。

## プロローグ 『天剣』

割れそうなほどの歓声が鼓膜を叩く。視界いっぱい広がる観衆は、そのまま重圧となって体にのしかかっていた。

今日はここ、槍殻都市グレンダンにおける、女王を除く最高地位であると同時に武芸者として最高の称号である『天剣』。その最後の一席であるヴォルフシュティンを選別する大会の最後の試合だった。

幾人もの屈強な武芸者が集い、しのぎを削ったこの大会の最後に立っている二人はまだ年端も行かぬ二人の少年であった。

大会が開催される前は誰も予想しなかったこの組み合わせ。しかし、圧倒的な力を見せ付けてきたこの両者が此処に立つことを疑問に思うものはこの場にいなかった。

大会中盤から言われ続けた今大会最高の対決が、今此処で実際に見れるとなれば、観客の歓声が大きくなるのは無理もないことだった。

「レイフォン」

「トウヤ」

少年二人はそんな観衆の声など気にも留めずお互いの名前を呼ぶ。

「この試合、どっちが」

「勝つても」

「「恨みっこなしだ!!」」

すでに試合開始の鐘は鳴っている。二人は同時に剣帯に手を伸ばすと「レストレーション」と復元鍵語を唱えた。

レイフォンは左手に鞘に納められた刀を、トウヤは身長を遙かに超える、無骨な鉄でできた棒を、その手に納めた。

「本気で行くよ!」

「来い!」

まずはレイフォンが動いた。目にも映らぬ(・・・)超スピードでその場から移動すると、トウヤの後ろに回ると、その手にある刀を抜刀し、鞘から刀を抜くときに空いた手で生み出した衝剄を刀身にぶつけた。その摩擦によって刀身は燃えるように発炎した。

サイハーデン刀争術 『水鏡渡り』から続く『焰切り』。

内力系活剄の旋剄を超えた瞬間的な超移動の水鏡渡りに加え、並みの幼生態を焼き尽くす焰切り。レイフォンがよく好む戦法であり、今まで無敗を誇る一連の流れは、トウヤによってはじめて防がれた。

「甘いな」

手はおろか刀身すら常人には目に映させない抜刀術をトウヤは完全に見切り、流して見せた。思わず目を見張るレイフォンに向かっ

て棒を連続で突き出す。

ソウシン流棒術 『流水棍』

その名の通り、繰り出される棒の刺突は流れる流水の如く。棒は分裂し、幾本にも見える。レイフォンからすれば壁がぶつかってきているようなものだろう。

レイフォンは急所を庇う事しかできずに吹き飛ばされる。

「どうしたレイフォン！」

「まだまだあ！！！」

音を立てずに二人の姿が消える。会場にソニックブームが巻き起こり、時たま二人の姿が見えては消え、を繰り返す。

二人は強力な気配を発散し、即座に気配を殺す殺剄を行い移動することで相手の知覚に残像現象を起こさせる。それは観客にも効果が及び、あまりのスピードに二人の姿が分裂したかのように見える。

内力系活剄の変化 『疾影』の効果だった。

「はあっ！」

「そこっ！」

ぎいん、ぎいん、という耳障りな鉄同士がぶつかり合う音が大きく響く。観客には何が起きているのか分からないが、一番高いVIP席に座る一団にはその姿が捉えられるようだ。忙しなく目を動か

している。

ふと中央にある豪華な椅子に座る妙齡の女性が傍らの初老の男性に尋ねる。

「ティグ爺、あの子達どう思う？」

「ふむ、二人とも天剣を持つのに十分な力量は有しておるとは思いますが」

「カナリス」

「あ、はい。剋の量は刀の男の子の方が多いですけど、そんなに大して違いがあるようには思いません。ただ、純粋な技量で棒を持っている男の子の方が圧倒していますね」

「ふうん……決めた。どっちが勝ってもヴォルフシュティンはあの子達のものにするわ。いいわね、リントンス」

「ふん、俺には関係のない話だろう、この話はおおよそ三十六万三千四百二十秒前に話がついたはずだ」

たずねた女性にむつつりと、正確なのかどうか怪しい秒数で返した男はちら、と会場で異様な速さでぶつかり合う少年二人を見ると、興味なさそうに壁に下がって腕を組んで目を閉じた。

「そ」

尋ねた女性もリントンスのこんな態度には予想がついていたのだろう、軽く一言で返すとまた場内の少年たちに視線を移した。

「はあ、あんなちまちまとした試合のどこが面白いのか俺にはさっぱり理解ができねえな」

そう言いつつも忙しく目を動かすのは見上げるような巨漢であるルイメイだった。

「そんなことを言わないでくださいよ。みんながみんなあなたのような戦いをすればグレンダンが無くなってしまおう」

名門ルッケンス出身の天剣サヴァリスはルイメイの愚痴にそう返しながらも目は片時も二人から離れない。口元は緩く弧を描き、体はリズムを取るようにゆらゆらと揺れている。

「しっかしまあ、よくもこんなに暇人が集まったものね」

確かに基本的に天剣は老性体が来るか、都市警察からの救援が無い限りすることもなく、暇なのである。

試合を真面目に見ているものや、暇つぶしに見ているもの、賭けをするものまで出始めた。

と、そこで試合に動きが見えた。

レイフォンの腹にトウヤの棒の先端が突き刺さったかと思うと、振り上げられた棒でレイフォンの顎が打ちぬかれた。

「あーあ」

「ま、実際よく持ったほうだと思いますがな」

気の籠らないため息を漏らす女性にティグリスが律儀に返す。しかし、確かに二人の力量は少し離れていた。武器を扱う技量でいえば、トウヤという少年はティグリスにも驚きを覚えさせるほどだった。

「これが都市の外延部だと分からなかったかもしれませんか」

見る限り、剽の扱いでならばレイフォンが一步先手を取る。この勝敗を決めたのは場所の悪さだろう。

「そうでもないみたいよ？」

女性の声にこたえるかのように、審判の手を振り切って立ち上がったレイフォンが刀を高く上に掲げ、トウヤに向かって行った。

その全身から迸る剽の量は、中央の女性を除けば誰よりも多かった。

「……………二桁によくやく届くような年でこれとは、いやはや末恐ろしい少年ですな」

「……………あれ？」

感心した声を上げるティグリスの声に被せるようにサヴァリスが声を上げた。

それに釣られるように会場に目を移すと、少年が大技を放とうとしているところだった。

「これで、最後だあつー!!」

トウヤの猛攻で窮地に追い詰められたレイフォンは、それを巻き返すべく一度だけ戦場で見かけた天剣授受者の使用していた技を自分なりにアレンジした剽技を放った。

衝剽活剽混合変化 『千斬閃』

振り下ろした刀がぶうんつ、と揺れたかと思うと、千に届こうかという数の斬激に変わる。恐ろしいまでの剽が込められた一撃に耐え切れず、手元の鋼鉄錬金鋼製の刀が砕け散る。

「う、おおおおおおおおお!!」

逃げようにもフィールドいっぱい広がった斬激を避ける隙間はなく、トウヤは迎え撃つことを余儀なくされ、とつさに封印していた奥の手の一つを使った。

ソウシン流棒術、奥義の壱 『流星錘』

レイフォンと同じく莫大な量の剽がトウヤの棒に収束していく。  
エメラルドダイト  
碧石錬金鋼製の棒ですら限界を超えるほどの密度で形成された剽の塊は穂先の大きな槍の形をかたどっていく。

みしみしと耐え切れずに音を立てる相棒を脇に抱え込むと、斬激の壁の向こうにいるだろうレイフォンに向かって、空気の壁を突き破りながら突進していく。

頭上で見ている天剣授受者たちですら目を見張る速度。一直線に、影すら置き去りにして走るその姿はさながら流星の如く。

一点集中突破。壁に穴を開けるドリルのようにレイフォンの放った千斬閃に流星錘を押し込んでいく。

千対一。当然、抑えきれないところはたくさん出てきて脚や腕が切り裂かれていく。が、ほぼ同じ量の剄を込めた流星錘はいとも容易くレイフォンの千斬閃の一角を打ち破った。

破った瞬間に穂先に集まった莫大な剄を衝剄として解き放つ。前方百八十度を巨大な力の奔流が駆け抜けていく。

殺った！

とトウヤが思った瞬間、千斬閃を隠れ蓑に高く跳躍していたレイフォンがトウヤの前に降り立った。

「しまっ……!?!」

「僕の　勝ちだっつー!!」

とっさに自らの剄でぼろぼろになった棒で防ぐが、十分に剄の乗ったレイフォンの拳は容易くそれを粉々にして、トウヤの鳩尾に拳が突き刺さった。

トウヤは何も言えずに吹き飛ばされ、壁に勢いよく叩きつけられる。ぴくりとも動かずに倒れ伏すトウヤを見て、はじめは唾然としていた観客だったが、じわじわと試合が終わったことを実感したの

か、今までに無い大声援を小さな勝利者に送った。

「うおおおおおおおっ！！！！」

「すっげえ！ よくやったな坊主！！！」

「おい！ だれかこいつを医務室に連れてってやれよ！」

「すごい！ すごい！ すごい！ 僕こんなの初めて見た！！！」

レイフオンはその歓声に答えるように天に向かって拳を突き上げた。

一際大きな歓声上がり、最後の天剣の座はこの小さな武者に送られることとなった。

## プロローグ 『天剣』（後書き）

では、前書きで言ったように用語解説を入れます。尚、これはwikiを参考にしておりますので、興味を抱いた方はそちらを見ていただいたほうが楽かもしれません。

### 『天剣授受者』

通称天剣。王家に実力を認められ「天剣」を受けられた武芸者。

天剣授受者となった武芸者には、天剣とその称号を示すミドルネーム、様々な特権が与えられる。同時にグレンダンを汚染獣から守る義務を課され、他の武芸者では対処が難しい状況（主に老性体の襲撃）において出動し汚染獣を撃退する。

天剣授受者は基本的に己の力を高めることに終始し、他者を教導する者はほとんどおらず、武芸者として品行方正な者は少ない。

### 『錬金鋼』

「錬金鋼タイト」と呼ばれる特殊合金を基にした武器で、錬金鋼には特定の大きさや形状、性質などを記憶し、同じく記憶した声と剋に反応して一瞬で記憶した通りの状態へと変化する「記憶復元」の特性が備わっており、これにより元の数倍以上の体積や様々な形状、性質に変化することができ、それに伴って重量も変化する。

すなわち、掌に収まる程度の錬金鋼を、一瞬にして然るべき形と

大きさ、重量を備えた武器に変化させることができる。

声は勿論、剄も個々人で質が異なるため、錬金鋼は記憶させた声と剄の持ち主しか復元できず、錬金鋼を復元する際の音声信号には専ら「レストレーション」と言う語句が用いられる。

さまざまな種類があるが、今作主人公と原作主人公が使ったのは剄の収束率という点で優れている「碧石錬金鋼エメラルドタイト」と、剄の収束率という点で優れている「碧石錬金鋼エメラルドタイト」、剣術を得意とする武芸者が好んで使う、刃物を復元するのに適した「鋼鉄錬金鋼アイアンタイト」である。

## 『剄』

武芸者は通常の人間と身体構造が異なり、腰の辺りに剄を大量に発生させる「剄脈」（けいみやく）と呼ばれる内臓を持ち、そこから剄の通り道になる「剄路」（けいろ）と言う管が神経と並行するように全身に伸びている。

剄は全ての人間が生きているだけで発するエネルギーだが、普通の人間が発する剄は非常に微弱で、生まれつき剄脈を持つ者のみが武芸者として戦うことができる。

剄脈で発生した剄は剄路を通ることで肉体のあらゆる能力を強化する力へと変化し、体外へ放出されると破壊力を持った衝撃波へと転ずる。前者は「内力系活剄ないりきけいかつけい」、後者は「外力系衝剄がいにりきけいしゅうけい」と言う技術として体系化されており、様々な派生技術がある。このほか、気配を消す「殺剄さつげい」や、剄に特殊な変化を加える高等技術「化錬剄かれんげい」などの技術があり、武芸者はこれらの技術を駆使して戦う。

さて、拙作に目を通してくださった皆様、ありがとうございます。注意事項をお読みななればわかると思いますが、この作品はいわゆる原作乖離、というやつです。

## 第一話 『学園都市ツエルニ』

「……いって……」

「ほら、じつとして二人とも」

情けない声を上げて逃げようとするレイフォンとトウヤを二人の幼馴染である少女 リーリンはびしゃり、と二人の怪我をしているところを叩いて黙らせる。

「……」

痛みで悶絶している二人を見て、リーリンは満足げにならずとてきばきと手当てを済ませていく。

今日はあの試合があった次の日。天剣になったレイフォンを一目見たい、というミーハーや、入門希望の人たちを何とか裁ききった後、いつものように二人で模擬戦をして怪我をした二人がリーリンに手当てを済ませてもらったところだった。

「……」

そんな、一般人の少女にやり込められている天剣授受者と、それと同等の力を持った武芸者を唾然と見つめている気配に二人は気づいた。

二人の視線に気づいたリーリンが後ろを振り返ると、銀色の長髪と銀眼に白い肌をして眼鏡をかけた、いかにも賢そうな少年が立っていた。

「あ、ごめんなさい。みつともないところを見せて」

おほほ、ときこちなく笑うリーリンに少年二人がくすくすと笑う。

「なによ」

ぎらん、と睨み付けられ、ふるぶると首を振る二人を見ながら、少年　カリアン・ロスは昨日見たあの二人と同一人物なのか、と首を傾げたくなった。

「すみません、突然お邪魔して。僕はカリアン・ロスといいます。学園都市に向かう途中に立ち寄ったんですが、昨日のお二人の試合を見て、居ても立ってもいられずに会いに来てしまいました」

「あ、これはどうもご丁寧に。私はリーリン・マーフェス。こっちが幼馴染の……」

「トウヤ・カネモリだ。よろしく」

「レイフォン・ヴお、ヴォルフシュティン？　アルセイフです。よろしく」

「あっはははは、似合わねー！」

天剣してもらった名前がまだ言い慣れないのか、しっかりと言えずにトウヤに爆笑されてレイフォンが顔を真っ赤にする。

そんな普通の少年らしいやり取りに、あんな戦いをするんだから、と何かこうすごい人物像を思い描いていたカリアンは少し申し訳な

く思った。

「仲が良いんだね。三人とも」

「ん？ ああ、俺は二人とは違う孤児院だけど、何故かいつも一緒に遊んでたんだよな」

トウヤがカリアンに向かっていつもと変わらない口調で話すが、不思議とそれが腹が立たない。彼の明るい笑顔や人懐っこい雰囲気、がそうさせるのだろうか。

「へえ…あ、そうだ。遅れたけど昨日の試合はすごかったよ」

「ははは、サンキユ。負けちまったけどな」

「いや、一進一退の試合は見ていて手に汗握るものだったよ。少なくとも僕はあんなにすごい試合は見たことが無い」

「そうか？ カリアンは武者…：…じゃないみたいだな。学園に行くって言うていたけど、何をしに？」

「司法…法律の事を勉強したくてね。司法研究科になるつもりだよ」

「ふーん。俺は武芸ばかりしてたから勉強はさっぱりなんだよな。そういうことができるカリアンはすごいと思うぜ」

「そうかい？ 君のほうがすごいと思うけど」

会って数分で一気に仲良くなってしまった二人をレイフォンとリーリンはぼかんと眺めていた。

その視線に気づいた二人が、はっとしたように二人に意識を向けた。

「悪い悪い。なんか、カリアンとは話し易くてな」

「そうだね。今までに無く話が弾むんだ。こんな相手は初めてだよ」

そう言うと、また二人で笑い会う様子をリーリンとレイフォンは不思議そうに見つめていた。

「いや、予想以上に長居をしてしまったようだ。僕はそろそろお暇するよ」

初めは聞いているだけだった二人も加わり、いつの間にか道場が上がってまで話し込んでいた四人だったが、レイフォンが今日王宮に呼ばれていたことを思い出したリーリンがその事を言うと、外を見たカリアンが名残惜しそうに腰を上げた。

「ああ、短い間だったけど、楽しかったぜ」

「またお話ししましょうね」

「さようなら……ってリーリンその服は何!？」

「え？ 今日着ていく服だけど？」

「なんでシャツにひらひらが付いてるの？」

「だって可愛いじゃない」

「お養父さん！！」

「はははは、相変わらずだな二人とも」

カリアンは後ろから聞こえてくる仲の良いやり取りに頬を緩めると、いつになく充実した時間をかみ締めながら宿に帰った。

この出会いが、彼のツエルニでの学園生活にどんな影響を与えるのかは分からない。

「……別に付いてこなくても良かったのに」

「何言ってるんだ。水臭い」

「そーよ、レイフォン」

放浪バスが出るバス停で、いつもの三人が固まって話しをしていた。少年少女、という域から脱しようとしている三人は大荷物を抱えている。リーリンは女性というだけあって二人よりも若干大きいかもしれない。それは彼氏であるレイフォンが無理やり持たせられていた。彼女曰く、「男の甲斐性」らしい。

そのレイフォンは、懐にある鍊金鋼に手を当てて複雑な表情を  
する。

養父に出立のときに渡されたものだった。これを渡した養父はレ  
イフォンを励ましてくれたが、孤児院の子供たちの白い目は厳しか  
った。ますます落ち込みそうになるレイフォンを救ったのは幼馴染  
二人の言葉だった。

「ま、いつまでもこんな暗い話題は止めようぜ。確かにレイフォン  
は俺たちに黙って馬鹿な事をやったが、レイフォンは俺にとって幼  
馴染の親友で」

「私の大好きな人なんだから。ついていくのは当たり前」

女王からの新たなヴォルフシュテインの座への勧誘を蹴ってまで  
自分に付いてきてくれたトウヤと、上級学校に行きたかったである  
うりーリン。二人がどこか少しでも無理をしていればレイフォンは  
気にしただろうが、二人にそんな様子は微塵も無く、ただレイフォ  
ンに付いて行きたいから、という理由だけだった。

二人の笑顔にだいぶ心を救われたレイフォンは、少し弱いしいな  
がらも笑顔を見せた。

「そうそう、笑ってればいいの！」

「わっ!?!」

りーリンはレイフォンの笑顔を見てうれしそうに笑うと、わしゃ  
わしゃとレイフォンの頭を掻き混ぜた。

だんだんじゃれつきからいちゃつきに変わっていく初々しいカッブルを見てトウヤは苦笑すると、そつとその場から離れてバスが来る方角をじつと眺めた。

「……お、バスが着たみたいだ。そこのいちゃついている二人。さつさと乗るぞー！」

「あつ、待ってよトウヤ」

「遅いぞバカップル」

トウヤは慌てて走って追いついて来た二人の額をつん、と小突いた。

とたん真つ赤に顔を染め上げる二人を見て、ひとしきり笑うと足を屈めた放浪バスに足を掛けた。

<sup>レギオス</sup>自律型移動都市。この荒廃した世界ならばどこでも見ることのできる、当たり前前の都市。テーブル状の胴体の上に無数の建物が、中央が高く、外側に行くに従って低くなるように立ち並んでいる。その下には太い金属製の足が無数に生えていて、それらが秩序だった歩調でこの死の世界を渡り歩いている。

世界を彷徨<sup>ウロウロ</sup>う自律型移動都市にはさまざまな形態がある。単純に自給自足ができる環境を整えた標準型から、それぞれ何かに特化した機能を持ったものまで。

その中に学生が学ぶためだけにある都市がある。学園都市。その

中の一つ、ツエル二にトウヤたちは足を踏み入れていた。

「ここが、学園都市か……」

「やっぱグレンダンとは違うね」

まず、月に何度も汚染獣が襲ってこない。当たり前的事だろうが、トウヤたちにとっては常識が覆されるような出来事だった。入る前に手渡されたパンフレットを見て

道中のバスでは、一応念のために、とトウヤがどこからともなく貴重な都市外装備を持ち出したおかげで、雄生体4期の襲撃を凌ぐ事が出来た。

一応入学式の三日前に着くことは出来た。止まる宿舎も安いところを二つ（レイフォンとリーリンのために）近いところを見つけてある。

自分たちと同じように入學するのだろう、大きな荷物を持った生徒が立ち尽くしている三人を次々に追い抜いて行く。どの人物の荷物も、三人の荷物の二、三倍はあり自分たちの貧乏さを思い知らされているようだった。

「さ、行くか」

その貧富の差に軽くショックを受けている二人に軽く声を掛ける  
と、ひよい、と片手で荷物を持ち上げた。

後ろに二人が付いて来ている事を確認しながらこれから住む事になる寮に心を躍らせながら足を伸ばした。

幸いな事に、部屋はレイフォンと相部屋だった。今は二人してリーリンが向かった寮の前でリーリンを待っていた。

こちらも入寮の挨拶やら自己紹介やらで忙しかったが、女子寮であるからもつと時間がかかるだろう、と思い二人で鍛錬に使っているボールでキャッチボールをしていると、意外とすぐにリーリンは中から出てきた。

「ごめんね、寮長さんと話し込んだじゃって」

「いや、気にして無いよ」

ぱたぱたと駆け寄ってきたリーリンを迎えると、そのまま三人で談笑しながら町を進んで行った。

今は、奨励金額がAランクのリーリンのバイト先を探しに着ているのだった。Aクラスなら学費は全額免除。生活費を稼ぐだけでいいので就労するところもたくさんあり、好きな事をすればいいのだが、残念ながらDとCランクだったレイフォンとトウヤにはそんなに選ぶ余裕は無かった。

結局、普通科で入学して体力は有り余っているので機関部清掃に

した。危険で体力のいる仕事だが、報酬の良さで決めた。

「うーん、ここがいいかな。あ、ここの制服可愛いな」

基本的に学生が経営するのでどこも人手が足りていないので申し込めば大抵のところは受けてくれるだろう。なら現場を見たい、と言ったリーリンの付き添いで二人は来ていた。

ぱたぱたと元気良く駆け回る彼女を見ながらにやけるレイフォン。また頭の中で惚気てるんだろうな、と思いながらレイフォンを呼び戻すことに。

ぺしぺしとレイフォンの頭を叩きつつ先に行きすぎているリーリンを呼び戻す。しつかり者のリーリンも新しい都市、ということでは浮かれているんだろうか。

「まったく、なんで俺がバカカップルの世話をしなくちゃならないんだ」

そう言いつつも二人の世話をするのは嫌いではなかった。くっつきそうでくっつかない二人を一年前にくっつけたのもトウヤだった。

いつもいちゃいちゃしている二人を見ているとトウヤも恋人が欲しくなってくる。が、肝心の相手がいないことに気づいて苦笑する。

「ほら、あそこなんてどうだ？」

さりげなく二人を誘導してやりながらトウヤはツエル二を渡り歩いた。



## 第一話 『学園都市ツェルニ』（後書き）

解説入れます

レギオス  
自律型移動都市

自律型移動都市は円形の都市の土台に生活空間が築かれ、その外周に移動のための巨大な脚が多数備わっている。また、脚の上端部からはエアフィルター（空気の膜）が出力され、これが汚染物質が都市内に流入するのを防いでいる。

このほかにも有機的な建材による自然修復機能など様々な機能が備わっている。都市を作ったのは過去の錬金術師達アルケミストと言われ、その建造技術は既に失われており、都市の中核部分は都市民にとってブラックボックスである。

## 第二話 『入学式』

ツエル二にはさまざまな施設が有る。中央に位置する校舎群の周囲には、それぞれ各学科ごとに用意された施設が立ち並び、それを取り囲むように上級学年の生徒が運営する食堂やレストラン、服屋などがある。そして、外延部を沿うようにして鬱蒼と茂る森の中は農業科の生徒の実験の場であると同時に、この都市の生命線だった。

今日はそのツエル二の入学式。真新しい糊のきいた制服に身を包み、広い校舎に戸惑う新入生を、在校生が微笑ましい表情で追い抜いていく。

その中に、多分に漏れずさっそく入学式が執り行われる大講堂までの道確かめるためにしおりを引っ張り出すトウヤの姿があった。

「いよいよ、かぁ」

「そうだな。……ん？」

「どうしたの？ トウヤ」

「ほら、ここ見てみるよ」

入学式に若干緊張している二人と並んでペラペラと適当に入学のしおりを捲っていたトウヤが、一人の名前のところで目を留めた。トウヤに促された二人が覗き込んでみると、そこには生徒会長『カリアン・ロス』の名前が。

「カリアン・ロス……？ どこかで……」

「あぁっ！ あの時のハンサムなお兄さん！」

思い出せそうなレイフォンに重なるようにしてリーリンが声を上げた。

「あの時……？」

「ほら、レイフォンとトウヤが天剣授受者をかけて戦ったあの次の日の……」

「ああ、あの時の。……へえ、ツエルニに来てたんだ」

「みたいだな。後で顔出しに行こうぜ」

「えー？ 生徒会長だよ？ 忙しいんじゃない？」

「気にしない気にしない」

にかつとトウヤが笑みを見せると二人は諦めたようにため息を吐いた。

「ん？ 何の騒ぎだ？」

「喧嘩……かなあ？」

入学式がある講堂の前に大きな人だかりが出来ていた。その中央からはなにやら罵り合う罵声が聞こえてくる。

十中八九喧嘩だろうな。と三人は思ったが、触らぬ神に祟りなし、

という考えの下大きく迂回しながら講堂の入り口を目指した。

リーリンとレイフォンが中に入り、トウヤも入ろうとドアに手をかけたとき、は？ と三人が思わず振り向いてしまうようなことが起きた。

「っの、野郎……レストレーション!!」

「もう我慢ならねえ！ レストレーション!!」

なんと、中央の馬鹿二人が街中で錬金鋼を復元し始めた。盛り上げていた野次馬もこれには思わずたじろいだ。武器を振り回し始めた二人を見て、野次馬は蜘蛛の子を蹴散らすように逃げ惑った。

一気にその場はパニックとなり、一気に人がトウヤ達のいる講堂に向かって駆け寄ってきた。

カリアンに会う前に何か借りを作っておくのもいいかな、とトウヤが動こうとしたそのとき、逃げ惑う生徒に押されて、小柄な女子生徒が倒れた。

そこに、片方の馬鹿が弾いた鞭が襲い掛かる。微弱で頼りないとはいえ、刃が籠っている。制服から見て一般生徒の彼女がそれを受ければあつという間に肉片に変わるだろう。

ちっ、と舌打ちをする時間も惜しい。逃げ惑う生徒の間を風のように駆けけると、間一髪のところまで鞭を弾いた。

女子生徒の無事を確認すると、トウヤはとりあえずようやくこちららの存在に気が付いた馬鹿二人の顔面に拳を深くめり込ませておい

た。

「まったく、生徒の管理ぐらいしておけて、だらしないぞ生徒会長」

入ってくるなり無礼にもそう言った新入生のトウヤに対し、生徒会長のカリアンの見せた反応といえば、懐かしそうに目を細める事だけだった。

「いや、耳が痛い。久しぶりだね、トウヤ」

「ああ、五、六年ぶりってところか。よく覚えていたな」

「忘れるわけは無いさ。君とあのヴォルフシュティン卿の試合は今でも良く覚えているよ」

古い思い出を楽しむように目を細めるカリアンにトウヤは気まずそうに頭を掻いた。

「あー、悪い。レイフォンはもう天剣じゃなくなっただわ」

「ああ、それは察しがついているよ。でなければ学園都市になど来ないだろうからね」

「お見通し、ってわけか」

「もちろん」

にこやかに対応する二人は初対面のはずなのに十年來の親友のように仲が良かった。

基本的に出身都市が違えば接点など一つも無い。生徒会の会計や書記の生徒はやけに仲が良い二人を不思議そうな目で見つめていた。

「ああ、彼については気にしなくても良い。昔ここに来るときに立ち寄った都市で知り合ってたね。久しぶりの旧交を温めているところだ」

「あ、そうだったんですか」

それで納得したらしい。書類を置いた二人は仕事があるのか、忙しそうに出て行った。

「そういえば、レイフォン君とリーリンちゃんはどうしてるんだい？」

「ああ、一緒に来るか、って誘ったんだけど生徒会長のところにそんなに気軽に行けない、って断られちゃった」

「そうか。二人らしいね」

「まっただ」

「ああ、そうそう。君とレイフォン君に頼みたいことがあるんだ。明日の放課後に来てくれないか？」

「わかった。引き摺ってでもつれてきてやるよ」

「はは、ありがとう」

と、二人が談笑しているところにドアをノックする音が響いた。

「入りたまえ」

「失礼します」

抑揚の無い、透明感のある声が聞こえてくる。

ドアが開く気配にトウヤが振り返ると、そこには人形のように無表情の少女がいた。カリアンと同じ白銀の髪、銀の瞳、色素の抜けたような白い肌を持つ、どこか幻想的な小柄の少女だった。

少女はちら、とトウヤのほうを見るとすぐに逸らし、カリアンを睨み付けた。

先ほど人形のような、と感じたが当たり前のようにそれは間違っていたらしい。瞳には確かに怒りの炎を灯して静かにカリアンを睨んでいる。

「何か用かい？ フェリ」

「何か用か、ではありません。なんですかこれは」

ばん、と華奢な少女が重厚なデスクに叩きつけたのは銀色の丸いバッチだった。それにはXVIIII（17）と彫つてある。

「気に入らなかったかい？」

「ええ、とても」

凄く怒っている雰囲気か漂ってくるのに顔と声には一切揺らぎが無い。気安そうな感じから妹か何かとあたりをつける。

フェリは右手に持っていた武芸科の制服をデスクに投げつけると静かな口調で断言した。

「私は武芸科に入りません」

「入るんだ。フェリ」

「却下します。私はここに普通科の生徒として入学しました。念威以外にやる事を探しに入学したのに何故武芸科に入らなくてはいけないのですか？」

なるほど、とトウヤは納得した。彼女の完璧なまでな無表情は念威嬢者だからか。それにしても強引すぎやしないか？ とトウヤは思った。

と、そこでトウヤを放つたらかしにしていることに気づいたカリアンがフェリを紹介して来た。

「ああ、済まなかった。彼女は僕の妹でフェリ・ロスというんだ。仲良くしてやってくれ」

「トウヤ・カネモリだ。武芸者だが訳あって普通科に居る。よろしく」

「……彼は？　あなたが僕なんていう一人称を使う人は今ではほとんどいないと思っただんですけど」

差し出した手は自然とスルーされてしまった。引っ込みがつかない手をどうしようか、とぶらぶら遊ばせているとカリアンが話を続けた。

「ふふ、彼とは古い知り合いだね。それと、武芸者としての腕は超一流で、錬金鋼を持たなくてもこの都市にいる武芸者全員を叩きのめせる実力者だよ」

「あなたがそんな冗談を言うなんて、ますます怪しいですね。……まあ、いいです。とにかく、私は武芸科には入りません。転科を要求します」

「うーん、そうはいつでも今ツエルニは苦しいんだよ。ツエルニが無くなればフェリも実家に帰らなければならぬ。それはフェリも分かっていると思うが？」

「……………」

と、ここで初めてフェリの表情が動いた。唇を噛んで悔しそうに俯くフェリの物憂げな様子は、ぞくぞくするほど綺麗だった。

「と、済まないね。見苦しいところを見せた」

「いや……でもな、カリアン。学生のうちぐらい好きな事やらせてやればいいじゃないか」

「それがそも……」「同情はいりません」……フェリ」

嗜めるような声を上げるカリアンを無視してフェリが感情の希薄な目をこちらに向ける。

「いいですねあなたは、道を選んで。私は道を選ぶことすら出来ない。ただひたすらに親の敷いたレールの上を走る事だけを要求され続けてきました。そんなのはもううんざりなんです」

淡々と語るフェリの目には強い意志が灯っていたが、それと同時に若干の諦めの色が出始めていた。

普段こんな事を見知らぬ人に言ったりはしないのだろう、キャリアが軽く目を見張っている。それほどにストレスが溜まっている、ということか。

「そうだな。道を選ぶってというのは確かに幸福なことだ。今言われて初めて気がついたよ」

「……………」  
自分がこの少女に何を言えるかは分からない。たいした事を言える自身なんて無い。だから正直な自分の気持ちを話す。あの時、リリンと共に感じた無力感と共に。

「でもな、俺の親友にこういうやつがいたんだ。そいつは馬鹿でな、一つの事で満足すればいいのに、一つをクリアしたら、次へ、次へ、とどんどん際限なく求めて行ったんだ。なまじそれを可能にしてみよう力があつただけにたちが悪い」

「……………」

すう、と深呼吸を一つ。柄にも無く緊張している自分と、出会ったばかりの少女と真剣にこんな話を話している自分に思わず笑いが漏れそうになる。

「道はやりかたたくさんあった。でもそいつは安易で手っ取り早い所にしか目を向けなかったんだ。本当に馬鹿なやつだったよ」

「まったくですね。それで、その間違えた方向に進んでいこうとしている親友にあなたは何をしたんですか？ 何が出来たんですか？」

「……それを言われると痛いな。言い訳にしかないけど俺も、もう一人の幼馴染も気がつかなかった。気がつけなかった。今ではそれを後悔してる」

「それで？」

「今思えばあいつはもがいていた。助けて、と声を大にして叫びながら。だけど不甲斐無い俺たちはそれを聞き取る事が出来なかった。フェリ先輩が、その頃のあいつと重なるんですよ、何故か。全然境遇とかも違うんですけどね」

「……………」

長い沈黙が流れた。

その後にはぽつん、ともう一度それで？と抑揚の無い声で問いかけてきた。

「声を返せば何とかなったのかもしれない。引っ叩いてでも連れ戻

せばまだ間に合ったかもしれない。でも、それは今となつては理想論でしかない。でも、これはあいつにも問題があつたと思うんです。あいつが歩み寄ってくれば声を聞いてやれた。あいつが手を伸ばしてくれば気づけたかもしれない。闇の中で閉じこもっているあいつの声は、俺たちの所まで届かなかつた。

フェリ先輩、あなたは両親にその気持ちを正直に話した事がありますか？」

「そ、それは……」

びっくり、とフェリの肩が小さく揺れた。小柄な少女にこうして問い詰めるような真似をするのは正直気が重いのだが気を取り直して口を開く。

「あなたにもまだ道やじかたがあると思います。今のあなたはあの時のあいつのように何かに取り付かれていて、もがいているように見える。何も知らない馬鹿の言葉だと思われるでしょうが、一度大きく周りを見渡してみてください。少しでもいいから自分の気持ちを近くの人に言ってみてください。苦しい、とか辛い、とか。それだけじゃまだ境遇は変わらないでしょうが、少しは気が楽になると思いますよ」

と、そこまで言ってから自分の言った言葉を思い出して猛烈に恥ずかしくなった。数分前の上級生に向かって説教まがいの事をした自分を殴り飛ばしてやりたい。

「そうか、そうだったな……」

と、そこで今まで静かに聴いていたカリアンがなにやら想いのたつぷりと詰まったため息を吐いた。

物憂げな表情を見せる二人の前でトウヤは冷や汗をたらたらとかいていた。この場にいるのがどうしようもなく恥ずかしい。が、自分がまいた種なんだ。最後までしっかりと責任を取らないと、と気合をいれる。

「と、まあこれは俺の体験談から見たフェリ先輩の印象とかです。あくまで他人の一人の意見なんで参考にしてもらえれば、と思います。」

特にカリアン、妹を大切に思うならもっと分かりやすくやらなきゃ、いつか本当に嫌われるぞ？」

何を言ってるんだ？ という目で見つめてくるフェリと驚きで目を見開くカリアンを尻目に、トウヤはいそいそと生徒会室から退出した。

## 第二話 『入学式』（後書き）

とりあえず第二話です。

私は小説を書くのはこれが初めてなのですが、やはり難しいですね。

感想やご指摘など、ありましたらどうぞご遠慮なく。待ってます。

### 第三話 『揺れる心』

「……武芸科に？」

「そうだ。もちろん、待遇は保障する。奨励金はAランクになり、生活補助に娯楽金も出そう」

放課後、文字通りレイフォンを引き摺って来たトウヤはカリアン  
の話を聞いて眉に皺を寄せた。

「そうだな。とりあえずはなぜそんな話になったか聞いてもいいか  
？」

「あ、ああ。そうだったね。僕としたことが」

こほん、とカリアンにしては珍しく誤魔化す様な咳払いをす  
一から話をし直した。

「都市の動力となる『セルニウム』は知っているね？」

自律型移動都市が動くために必要な原動力であるセルニウムは、  
レギオス  
世界に人が住めなくなつてから採掘されるようになった未知の物質  
の一つである。

セルニウムは鉱山から採れる。各都市はそれぞれ自分の鉱山をい  
くつか所持している。

この世界に住むものならば常識ともいえる問いかけに当然トウヤ  
たちは頷いた。

「実は、この都市が今現在保有している鉱山は一つしかない。ちなみに、私が入学したときは3つあった」

都市の保有する鉱山が減る。その理由はよっぽどの例外がない限り一つしかない。

その理由を瞬時に理解したトウヤは思わず口を挟んだ。

「戦争か……」

「そう、ツエルニは学園都市だから戦争ではなく「学生らしい健全な戦い」をテーマに武芸大会と銘打っているが、これまでの二期でツエルニは三勝五敗している。しかも五連敗だ」

戦争 武芸大会は、似たような都市同士の二年毎の縄張り争いである。似たような環境の都市同士が自然と寄り合ってぶつかり合う。当然、ツエルニは学園都市なので学園都市同士でぶつかり合うことになる。

「非殺傷を目指して刀剣は刃引きがしてあるし、銃は麻痺弾のみ。確かに人の命が失われない分戦争よりはいいが、失うものにも変わりはしない。……都市の命が削られていくのだよ」

それまでは冷静に言葉を紡いでいたカリアンの口調が崩れた。唇を噛んで心底悔しそうにしている。

「私は六年生だからこの年でここを卒業する。だから今回負けようが勝とうが関係ない話だ。……本来ならば。そういう考えの人間もいるだろう。しかし、私はこの都市を愛している。たとえ二度とこ

の地を踏むことがなくなろうとも、失われるのはわが身のように悲しく、辛いことだ」

カリアンは何か言おうとするリーリンを目で遮り、沈んでいた気持ちを振り払うように軽く頭を振るとしっかりとした、意志の籠った強い口調で断言した。

「愛しいものを守ろうとする気持ちは、ごく普通の感情だよ。そして、私はそのためならば妹を犠牲にすることも厭わない」

そう言い切ったカリアンの目には揺らぐものはなく、嘘偽りの無い言葉だと分かる。

その発言にはさすがに黙っていられなかったのか、リーリンが口を開く。

「そんなんっ！ 血の繋がった妹さんなんですよ？ なんでそんなに酷い事を……」

「じゃあリーリン君に聞くが、レイフォン君の命と自分の大切にしている者の命、どちらが大切だい？」

その答えられるはずの無い問いかけにリーリンは口を噤んだ。

カリアンの強い意志の籠った目を見て、トウヤは似たもの兄妹め、と心の中で毒ついた。

「誰に恨まれても良い。後ろ指を差されようとも私はこの悪役を演じきり、ツエルニを守る。それが前回の大敗を喫した時、心に誓った私の信念だ」

その静かだが空気が燃え上がりそうな気迫に押され、レイフォンとリーリンが息を呑んだ。

カリアンに圧倒されている二人と違い、トウヤは冷静なままだった。というよりはフェリよりもカリアンの方が重症だったようだ。

「なるほどな。俺とレイフォンに転科の話を持ちかけてきたのはそういう事だったのか」

「そうだ。先ほど言ったように待遇は保障する。正直君たち二人が防衛と攻撃を勤めてくれれば、それこそグレンダン以外とやりあつて負けるビジョンが思い浮かばないからね」

確かに戦争のときに架かる橋は一本だけだから、どちらかがそこに立ってどちらかが敵を蹴散らしながら攻めれば……確かに学園都市レベルの都市では万が一にも負ける要素が無かった。

「だけど、僕はもう武芸を止めてるんです。だから……」「いや、レイフォン。良い機会かもしれないぞ」……「うえっ!!!??」

援護してくれると思っていた親友のあんまりな言葉に驚き、思わず恋人の方を見たレイフォンは「それもそうね」と、なにやら頷いているリーリンの姿を見た。いや、見てしまった。

「なんで嫌がるんだ？ 何だかんだ言つて武芸好きなくせに」

「そうそう。トウヤと模擬戦してるときのレイフォンってすっごい生き生きしてるんだから。自分じゃ気づいて無いだらうけど」

え？ え？と幼馴染と恋人の思わぬ離反に戸惑うレイフォンを二人は良い笑顔で追い詰めていく。

「最近レイフォンとやりあわなくなったからつまらないんだよな。そうだ、レイフォンが天剣握ってからは数えるほどしか勝ちを拾ったこと無かったな。またもう一度同じ条件でやりあってみようぜ。な？」

「私、武芸に真剣に打ち込んでいるレイフォンの姿ってかっこよくて好きだな。天剣授受者のレイフォンは嫌いだけど、確かにトウヤと一緒に武芸をやっている姿が一番かっこよかったかも」

ずんつ、と二人が一步踏み出せばレイフォンが怯えたように一步下がる。そのやり取りをカリアンがニコニコと笑みをたたえながら見守っていた。

藁にも縋る気持ちでそちらを向いたレイフォンはカリアンにこつと微笑まれ、完全に逃げ場を失ったことに気がついた。

「いや、確かに嫌じゃないんだけど……」

「ホント？」

「う、うん……」

ねだる様に上目遣いで聞いてくる恋人に思わず頷き返してから「しまった！」と愕然とした。

わーい、と諸手をあげて喜ぶ二人とがっくりとうな垂れるレイフォン。そういえばこんな感じだったなあ、とカリアンは懐かしさを

胸にかみ締めながらそのやり取りを見守っていた。

「と、いうわけで俺とレイフォンは武芸科に入ってやる。だから、フェリはもういいだろう?」

最後に付け加えられた言葉を聞いて、自分にも裏切られ、オーバーに落ち込むレイフォンを機嫌良さそうに介抱していたリーリンがはっとしたようにトウヤを振り向いた。

一方カリアンは、やられた、と雄弁に語る沈黙でトウヤの言葉を聞き入れた。

「さっき言っていた通り、都市戦は俺とレイフォンで十分だ。何だかんだ言って武芸がやりたいやつと、自分の道を探しているフェリのどちらかを取るなら、カリアンはどうする?」

「……参ったね。初めからこれを狙っていたのか」

「まーな。レイフォンも口ではどう言おうと武芸がやりたがっていたし、踏ん切りをつけさせるのにはちょうどいいと思ってな。利用させてもらった」

悪いな、と謝るトウヤにレイフォンとリーリンは気にして無い、と首を振った。ちなみにレイフォンはリーリンに膝枕されている状態である。

「……一つだけ、聞いていいかな？ ついでとはいえ、何故フェリのためにここまで？」

「んー、ついでと自己満足と、あとはありきたりだけど放っておけなかった、ってやつかな。っていうかあれだけ言いたい放題に言っちゃったんだから、少しは責任取らないと。これで少しはフェリの道が開ければ良いな、と思って……っつと、今の内緒な？ さすがに本人に聞かれるのは恥ずかしすぎる」

言ってから気づいたように慌てて恥ずかしがるトウヤを三人は優しい目で見守っていた。

人の機敏に敏く、自然と他人を思いやれるトウヤは昔から孤児院でも人気者だった。レイフォンとリーリンも、そんなトウヤを密かに兄のように思っていたりもしていた。踏ん切りのつかないリーリンを押し出したのも、リーリンの声が届かないところまで沈み込みそうになったレイフォンを引っ張り上げたのもトウヤだった。

そんなトウヤの良い所をたくさん見てきた二人は何でトウヤがもてないんだろう？ と今更ながらに首を傾げた。顔立ちも悪くないというよりは弾ける様な金髪と明るいブルーマリン色の瞳をしたトウヤは人の目を惹きつける。ちなみにリーリンの初恋はトウヤだった。

その視線をどう勘違いしたのか、顔を赤くして恥ずかしがるトウヤに視線に籠る優しさがさらに深まった。

それを振り切るようにうがっつ、とトウヤは声を上げると、まだ頬を若干赤くしながら話をまとめた。

「と、とにかく！ フェリには自由にさせてあげるよ、カリアン。……あと、いくら大切にしていたって、言葉にしなきゃ伝わらないんだぞ？」

「何を言ってる……」

「さっきリーリンに言った愛してる人と大切な人っていう比較の仕方。どう考えても大切な人はフェリだろう？」

「…………… 本当に、トウヤには敵わないな」

ふう、とため息をついたカリアンの見せた笑顔は、昔グレンダンで見た明るい少年のような笑顔だった。それを満足そうに見るトウヤの視界からぎりぎりはなれたところで、桜の形をした念威端子がひらひらと舞っていた。

『一度、ちゃんと話してみるよ』

そう言った。あの兄が。自分を大切だと。本当に？

いつからだろうか、入ってきた情報に動揺しなくなったのは。確かあの時だったと思うが、今はそんなことを考えている余裕が無かった。いつか振りの激しい感情にフェリは大声で何かを叫びたくなりそうな自分を必死に抑えていた。

興味本位だった。昨日自分にあれだけ偉そうに啖呵を切った少年が、あの兄とどんな会話をするのか、なんとなく気になって、見つ

からないように念威端子を飛ばしたのが事のきっかけだった。

思えば、初対面で自分の目をすっかりと見返してきたのは彼が始めてだったような気がする。とくん、と若干高鳴る心臓を無視して思考を深めていく。

あの平気な顔で自分を都市のために生贄に奉げたあの兄が、自分を大切に思っている？ 何をばかばかしい。そんな訳があるはずが無い。おかしい。間違いだ。

いつも冷静なはずのフェリは、いつもの理路整然とした思考とはかけ離れた、支離破滅な思考をしている事にすら気づいていない。それほどあの兄の言葉が胸の中で渦巻いていた。

自分の冷静な部分はそれを認めていて、自分の中の感情的な部分は頭ごなしに否定していた。

しかし、その端正な顔を歪める様子すらどこか愛嬌があって彼女の美しさを損ねる事は無かった。街中のテラスに座っている絶世の美少女の物憂げな表情に通る行く人々は何事か、と振り向くが彼女はまったく気づかない。

一京歩譲ってあの兄が自分を大切に思っているとしよう。とにかく、決戦は今日。あの兄が家に帰ってきてからの勝負だ。兄妹である二人は同じ家にすんでいる。自然と帰る場所は同じになる。そう遠くない時間に兄と対峙する事を考え、気合を入れる。

ふと、自分の中の感情に気づく。自分は兄に大切にされたいのか？ 自分は間違ってもブラコンではない。だが、兄が学園都市に行く前は確かに優しく、自分もそこそこに懐いていた記憶がある。

会いたい、けど会いたくない。相反する自らの感情に振り回され、フェリは頭の中がグチャグチャになりそうだった。

.....

どれだけ悩んでいただろうか。いくら考えても答えは出そうに無かったので、直接対決の時までこの問題は取っておくことに。

あれだけ頭を悩ませていた問題が片付き、ほう、と一息つくと目の前にある冷えかけた紅茶を飲み干すと、夜までの時間お気に入りあの場所で時間を潰す事にした。

.....

パライトタイト  
重晶鍊金綱製の杖に付いた花卉のような形状の念威端子を操り都市外に飛ばす。誰もいない世界を知覚することは彼女の密かな趣味でもあった。

彼女の膨大な念威によって、腰よりも長いその銀髪が桃色に発光する。彼女の容姿と相まって、幻想的にも見える風景は、誰にも見られる事は無い。自らの才能を嫌う彼女は、誰かが来た事を察知するとすぐに止めてしまうからだった。

ふと、いつもの習慣を始めて落ち着いたところに何か割り込む。なんだろう？ と自分の胸の内を探ってみると、百を超える分割思考のうちの一つがずっと考えていることで、ずっと意識的に無視していたことだった。

『これで少しはフェリの道が開ければ良いな、とと思って』

兄の言葉とは違う意味で激しくフェリの感情をかき乱すこの言葉とあの少年の照れたような笑顔。一度意識を失ってしまうと、それは性質たちの悪いウイルスのようにフェリの思考を侵食して行く。

昨日会ったばかりの、年下の少年の言葉に振り回される自分の心がわずらわしかった。

昨日は敬称をつけていたのに自分がいないと分かれば呼び捨てにするところとか、自分の事を分かったかのようにしゃべって、それがまた当たっている所とか、自分とは正反対な太陽のような笑顔とか、すべてがいらいらするというか、心がもやもやする。

今までに感じた事のない感情に苛立っているフェリの念威端子に近づいてくる気配が引っかけた。

いつものように探索を止めようとするが、何故か止まらない。しかしフェリは焦る事無くその気配の主を迎え入れた。

「フェリ……先輩。なにしてるんです？ こんなところで」

やっぱり気に入らない。取って付けたような敬語も、呼び捨てで呼んでいたはずの自分の名前に敬称がついていることも、どうしようもなくフェリの心を苛立たせる。

錬金鋼を手に持っている様子から体を動かし来たんだろうか。

とりあえず、フェリは胸の内のもやもやをぶつけるように念威爆

雷を発動させた。

### 第三話 『揺れる心』(後書き)

色々理由はあるんですが、何を書いても言い訳になりそうなので、簡潔に一言述べさせて頂きます。

遅れてすみませんでしたっ！

さて、気を取り直して後書きへ。

早速レイフォン君が武芸をやる気に(?)なりました。頼れる親友、支えてくれる恋人。原作とは違い、相当精神的には楽なはずです。とはいえ、あくまでこの作品の主人公はトウヤなので、あまりレイフォン君が目立ちすぎても困るのですが……

まあ、何はともあれ、ご都合主義がふんだんに盛り込まれている作品なので、少しぐらいの無茶は笑って見逃していただけるとありがたいです。

小説の書き方講座等で書き方を勉強していますが、なかなか上手く行きません。なにかアドバイスや、誤字脱字等ありましたら、ご一報下さい。お願いいたします。

#### 第四話 『大切な時間』

ずがん。

ぼんやりと物憂げな表情で立っていた、絵画の中から出てきたような美しさを持つフェリに話しかけた代償は、唐突な念威爆雷だった。

まさか知り合いにそんなものをぶつけられるとは思ってもいなかったトウヤはあわてて頭を後ろに引いたが、前髪が犠牲になった。

まあ自分の容姿はロス兄弟のように秀麗、というわけでもないのに特に気にしないのだが。

「一応聞きますが何すんですか？ 先輩」

「むかつきましたから」

返ってきた答えは限りなく理不尽だった。

思わず返答に困るトウヤを見て、フェリははあ、と大きくため息をついた。

「とにかく、そのとってつけたような敬語はやめてください。あなたに敬語で話されると……なにか、こつもやもやします」

「あ、そうなの？ じゃ、遠慮なく」

許可をもらってさっそく敬語をやめると、軽く睨まれてしまった。

「ご機嫌斜めのフェリに話しかけたことを若干後悔していると、珍しくフェリがどこか迷った風な様子で口を開いた。

「あなたの、あなたの道とは、<sup>やじかた</sup>何ですか？」

「……ああ、そのことが。んー、俺の道、ねえ」

フェリの不機嫌の理由に勘付いたトウヤは虚空に視線を躍らせ、軽く思案する。

一言で言ってしまうえば『自由』なのだが、これじゃあ納得してもらえそうにはないことは重々承知である。だから、自分なりに一応言葉にしてみた。

「好きにやることかな」

「好きにやる？」

「そ。やりたいことをやって、最後といわずいつも笑っていらればいい。笑っていられるうちは幸せだから。これが俺の道、かな」

「自分勝手ですね」

「利己的、ともいうかな」

にやっ、と不適に笑って見せると、フェリの表情が少し和らいだような気がする。

「でも、いいですね」

そう、小さく呟いたフェリの言葉には確かに羨みが混じっていて、でも、どこかそれを諦めている様な気がした。

「やればいいじゃないか」

「できませんよ。家に縛られている私には。知ってます？ 私、念威が無ければ何も無いんですよ？ 料理はできないし、裁縫も苦手。口下手だし笑うこともできない。出来損ないの機械みたいですよ」

フェリは最後に自分を自嘲するかのように笑うと、俯いてしまった。

「うーん」

困った。何が困ったかというと、カウンセラーでもなく、武芸一本で人生経験の少ない自分がこんな難題といってもいい人生相談をされていることに、だ。

ただひたすらに棒を振り続けてきただけの自分では、こういうときに最良の答えを返してやることができない。それがなんだか少し悔しかった。

所詮自分にできるのは自分の思ったことを言うだけなのだ。と少し開き直り気味になって顔を上げた。

結局、トウヤは自分を頼ってくれている人を見捨てることができないう人よしなのであった。

「それでいいと思うよ」

「え？」

「料理ができなくてもいい。裁縫が苦手、笑顔が下手。どれだって探せばそんな人いるさ」

「それは……」

「武芸者をしてると、才能のありがたみが改めてわかる。才能は努力を凌駕する。これは当たり前前の事実としてそこにあるんだ」

ぼかん、とこちらを見上げてくるフェリを見ながら、思うが俣言葉を紡いでいく。

「でも、世の中才能だけじゃない、っていうのは本当だと思う。いくら武芸の才能があるからって料理がとんでもなくおいしく作れるわけじゃない」

「……………」

「料理が下手ならできる人と結婚すればいいし、裁縫だってそうだし、笑顔にさせてくれるような人や何かを見つければいい。そのために先輩はここに来ているのでしょうか？」

「……………言われてみれば、そうでしたね。ありがとうございます。すこしは心が楽になりました」

先ほどの、物憂げな顔からは幾許かすっきりした表情でフェリが言った。

「いえ、気にすることはないですよ。ただ自分が思っている事を言っただけですから」

「ふふ……」

「？」

「いえ、『これで少しはフェリの道が開ければ良いな、』と  
思っています。貴方らしい言葉です」

「あはは、それで、す……かあ？」

「ええ、御人好しの貴方らしい言葉です」

「えっと、つかぬ事をお聞きしますが、それ、どこで？」

「盗聴、ってという言葉知ってます？」

「犯罪ですけどねー！！」

「うわー、うわー。と奇声を発しながらごろごろと地面を転がりま  
わるトウヤを見て、フェリが珍しく少し微笑んだ。しかし、地面に  
転がるトウヤはそれには気づかず転がり続けた。」

「そのうち力尽きたのか、ぐてー、とうつ伏せて地面に突っ伏して  
いるトウヤの背中に、フェリがちよこんと座った。」

「先輩？」

「重くはない。むしろ軽すぎるくらいだがこういう行為に至った経

緯の説明を求めているトウヤの頭をぺちり、とフェリが優しく叩く。フェリ自身、自分がどうして急にこんな事をしたのか正しく理解していないのだ。

ま、いいですけど。と、恥ずかしすぎて未だにフェリと顔を合わせる事のできないトウヤはそのまま火照った顔を冷たい地面に押し付けた。

「背中に乘られて腹は立たないんですか？」

「ん？ いや、孤児院ではいつも俺の背中にみんな乗ってたがってたから、ぜんぜん気にならない」

「そうですね」

素っ気無く言い返しながらも、フェリは意外と乗り心地の良いトウヤの背中をつつー、と撫でてみた。

「うわ、くすぐったっ。やめろって」

もじもじと身をよじるトウヤを上手く乗りこなしつつ、フェリは先ほどからずっと気になっていた事を口にした。

「あなたは、どうして私のためにここまでしてくれるんですか？」

「ここまでって……俺は別に」

「いいから」

本当に大した事をしていないトウヤが苦笑するが、強い口調のフ

エリに押されて、渋々口を開いた。

「一回言った事なんですけどね。ついでと自己満足、後は先輩が寂しそうだったから、かな？」

「寂しそう？」

先ほど聞いた答えと違うことに気づいたフェリが鸚鵡返しに聞き返す。

そういえば盗聴してたんじゃない。と自分が今説明している事に対して疑問を抱きつつ、フェリに答えた。

「顔は無表情で、いつちゃ悪いけど人形みたいだと最初は思った。けど、目がなんだか寂しそうだったから。なんだか構って貰えない子供が……いえ、すいません」

「人を我侷な子供みたいに言わないでください。なるほど、あなたはあの時私が子供の癩癩を起こしていたと？」

「いえ、そこまでは言っていないんですけど……」

フェリに気圧されて、流石のトウヤもだんだん敬語に戻っていく。

フェリはそんなトウヤの後頭部を冷やややかな目で見つめると、ぐりぐりと肩甲骨の間に指を差し込んだ。

「いたっ！ 地味に痛い！ ちょっと、やめっ………すいませんでしたあっ！」

「わかればよろしい」

今やってるのがまさに子供の癩癩ですよ。と口にしそうになったが、自分の上に乗っている御冠なお姫様をちら、と盗み見て止めておく。

一頻りトウヤをいじって満足したのか、フェリがすつとトウヤの背中から退くと、その小さな手をトウヤの目の前に差し出した。

礼を言つてその小さくて柔らかい手を取ったトウヤは、地面を暴れまわった事であった砂をぱんぱん、と軽く払った。

「……怒らないんですか？」

「何に？」

「……はあ。やっぱり変な人ですね、あなたは」

「そっか？」

幼馴染二人には良く言われるが、その他にはあまり言われた事のない言葉にトウヤは軽く首をかしげる。

「自覚が無いんですか？」

「自覚も何も……普通だと思っけど？ 下に小さい弟とか妹とかがいれば、こつこついつのって結構有るものだろう？ ……ど、どうかしたか？」

「……そうですね。それを聞くと、私が貴方の中で小さい女の子だ

と定義されているような気がするのですが」

「あ、あはは……そんなことないって」

普段、人からの評価をまったく気にしないフェリであったが、トウヤに子ども扱いされると何故か激しい怒りを覚えた。

その怒りに気圧されるようにしてトウヤが一步下がると、フェリも一步前に進んだ。

「どうして貴方はそういつも通りなんですか？ 私なんて……」

私なんて？ この次にはどういう言葉が続くのだろう。トウヤと話していると勝手に自分の手綱から放れていく心のコントロールにフェリは躍起になっていた。

楽しいようで、苛々する。心が安らぐようで、同時にささくれ立つ。こういった心の変化が起こる現象を書物等で一つだけ知っているが、それだけは絶対に認めたくなかった。

「先輩？」

急に黙り込んでしまったフェリをトウヤが心配そうに覗き込む。

そういったトウヤの動作に一喜一憂し、振り回される自分の心が実に腹立たしかった。少し優しくされた位でころころ転がるような女だったのか自分は。いや、違う。

「大丈夫です。貴方に心配される覚えは有りません」

意図的に何重にも自分の心にプロテクトを張ると、トウヤは驚いたように目を瞬かせた。

「どうかしましたか？」

「い、いや、その……先輩？」

何か有った？ と能天気聞いてくる目の前の御人好しの脛を蹴っ飛ばしてやりたくなるが、ここは我慢。

感情の籠っていない、まさに先ほどトウヤが表現した人形のような目で身長差が有る彼を見上げる。

「何も有りません」

「いや、何か無理してる」

フェリの感情の籠らない声で何を確信したのか、トウヤが自身満々に言いきった。そしてそれは見事に的中し、フェリの鉄の鎧を打ち抜くことに成功していた。

一瞬、フェリの瞳が僅かに揺れたのを見逃さなかったトウヤは少し屈んでフェリと視線を合わせると、心配そうな声音でフェリを氣遣った。

「どうした？ 何か有ったんなら俺にでもいいから……ってそういや会って二日だっけ。俺が信用なら無きゃカリアンのところでも行くか？」

よしよし、と頭を撫でて来る彼の少しごっごつした手に不覚にも

心地よさを感じた自分を心の中で叩きのめした。

まるでこれでは本当に子供扱いではないか。思いつきり脛を蹴るうにも、相手は本気で心配してくれているのでどうもやりにくい。

「別にいいです。それよりも、手を退けてください」

「おっと、悪かった」

離れていく手を無意識に目で追いつくなるのを我慢して彼の目をじっと見つめる。

どうした？ ともう一度目で聞いてくる彼からは、普段では想像のできない父性というかなんというか、ほんわかとした空気が流れていた。

自分がおかしいのはきつとこれのせいだ。と無理やり納得させる。

「トウヤー!!」

「お、来たみたいだ」

遠くからの声が目の前の少年を呼んでいる。心当たりがあるのか、トウヤは指を口に咥えると、遠くまでよく響く指笛を吹くと、屈んでいた体を起こした。

「そろそろ行くわ」

それに頷くと、何がうれしいのかトウヤはまた笑った。

「じゃ」

トウヤが足に力を込めると一瞬で後姿が遠ざかっていく。

僅かに感じた寂しさを打ち払うように頭を振ると、習慣の探索を続けることにした。

なぜか、ずっとトウヤの笑顔がフェリの脳裏にこびりついていた。

## 第四話 『大切な時間』（後書き）

第四話、急ピッチで仕上げました。

いやー、マナケミア2に思わず手を出してしまったのが失敗でしたね。しかもまだグレイセス（テイルズ）や、キングダムハーツの新作など、次々と欲しい物が……

まあ、投稿に滞りの無い程度にしておきましょう。はい。

感想にありましたヒロインの数なんですけど、もう既に出てきた二人は確定で、あとはお爺ちゃんの孫（わかるかな？）等ですかね。まだ増えるかもしれませんが、五人を超えることはありません。收拾がつかないので。

しかし、ヒロインを考えていたら、電子精霊の擬人化や他作品からのクロスオーバーなど、荒唐無稽な考えがぼつぼつと出てきて、自分の電波脳に呆れるばかりです。しかし、感想ではあの女王様をヒロインに推すともんでもない猛者もいらっしやるようで、なるほど……と思わず感心してしまいました。

ふと最近の小説を読んでいて思うことは、ハーレム系の主人公が謂れの無い暴力を受けすぎだということです。

可愛い悪戯（今回のフェリはこの範囲……かな？）ならまだしも、本気で主人公の事を無視したりと、ライバルが大勢いる中で考えられない行動を取るヒロインもしばしば見かけ、首を捻ってしまいます。

と、まあ所詮たくさんの女性にちやほやされたい、というのは男の妄想でしかないのですが、妄想だからこそちやほやされてもいいじゃないか、と思います。

あー、なんだか話が変な方向にいききました。お目汚しをすみませ  
ん。

と、まあこんな主人公至上主義といわれるような小説ですが、ど  
うか今後ご贖罪にお願いいたします。また、感想やご指摘がありま  
したらお願いいたします。批判も、この小説の根底に関わるような  
ものではなくれば糧としていきたいので、ありましたら一言お願い  
いたします。

長文、失礼致しました。

p s

とんでもないアホなミスをしていました。どこをどうひねっても  
ファンタジーなのに、文学として投稿してありました。

虎穴でもいいから穴があったら入りたい気分です……

## 第五話 『入隊試験』（前書き）

たくさん感想、ありがとうございます。PVも気づけば一万を越しており、狂喜乱舞してキーボードを叩いておりますと、気づけば書きあがっております。

今回はバトルの布石です。次回はトウヤVSレイフォン第二弾です。

## 第五話 『入隊試験』

「わたしはニーナ・アントーク。ここ十七小隊の隊長を務めている」  
よろしく、と差し出された手をトウヤとレイフォンは軽く握った。

その手を差し出したニーナの隣では、リーリンがきよるきよると  
辺りを見回している。

放課後、案内されて来たここは、武道館にある十七小隊の訓練場  
だった。

広さは教室二つ分ほどしかないが、壁にはさまざまな錬金鋼が復  
元された状態で吊るされている。周りを囲む壁はそこそこ厚そうだ  
が、しょっちゅう爆音やら何かを叩き付ける音が響いてくる。

ひとまず全員と軽く自己紹介をし終えると、軽くあたりを見渡す。  
壁際に設置されたソファーに寝転がりながらこちらに手を振るシャ  
ーニッド。ツナギを着ているハーレイは手元のパソコンをいじるの  
に忙しそうだ。何故か来ている壁際のフェリとは目が合ったがすぐ  
に逸らされた。

フェリを見て、ふと昨日の事を思い出す。あの時は完璧に油断し  
ていたので、避け切れずに少し前髪の先端が焦げてしまった。焦げ  
た前髪をいじりながらぼんやりと昨日の事を思い出す。

昨日はレイフォンと久しぶりに体を動かそう、ということとで都市  
の外延部に向かった。

が、レイフォンがリーリンに呼ばれたので待ち合わせを確認してから一人で向かったところ、そこで一人念威を飛ばしているフェリと出会った。

それを見た感想は、正直カリアンがやつきになって引き入れようとするのも無理は無い、というものだった。才能だけでいえば、天劍のデルボネさんクラス。髪の毛全てが発光するなんて人物は、その人しか見た事が無かった。

と、ぼんやりと回想しているうちに、レイフォンとニーナが試合をする事になったらしい。

「会長からお前はとんでもない実力者だと聞いている。本気で行くぞ」

「ええ、どうぞ」

先輩に対しても不遜な態度で返すレイフォンを見て、リーリンがむっと眉を潜めたが、それを窘めながら壁際に引っ張って行った。

それを確認したニーナは、両腰につけていた錬金鋼を鉄鞭に復元した。

レイフォンもハーレイから適当な錬金鋼を選ぶと復元すると、調子確かめるように軽く振ると頷いた。

「どこからでもどうぞ」

正眼に構え、何の気負いも無く言ったレイフォンに、シャーニツドとハーレイが目丸くした。驚いたのはニーナも同じだったよう

だが、すぐに眼を怒らせるとレイフォンに飛び掛った。

鉄鞭での刺突は、その重量もあって容易に逸らされる事はない。自分の一撃に自身を持っていたニーナは、二撃目の用意をしていなかった。

が、一瞬。まさに瞬きするだけの時間でニーナは床に転がされていた。

何が起こったか分からない様子のニーナは、仰向けに倒れながら目をぱちくりさせている。

「終わりですか？」

「っ！ まだだ。もう一本頼む」

声をかけられてようやく自分が倒れている事を自覚したのか、ニーナが飛び起きる。

再び構えるが、それには先ほど見えた油断などひとつも無い。シヤーンとソファから体を起こして真剣にレイフォンを見つめていた。

「行くぞ！」

重い音を立てて、空気を引きちぎりながらニーナの鉄鞭がレイフォンに迫る。両側から迫る同時攻撃は並みの武者では防ぎきる事はできないだろう。

「ぶっ」

短い呼吸が一つ。一瞬の後にニーナは後ろから咽元に剣を突きつけられていた。

「……参った。降参だ」

目を伏せながらニーナが苦々しく宣言する。

レイフォンはこの試合で何も特別な事はしていない。一本目では突き出される鉄鞭を半身になって避け、足払いをしただけ。二本目でも同様。鉄鞭をかくぐりながら後ろにすり抜け、振り返りざまに剣を突きつけただけ。

内力系活剣を使っただけの体裁き。それだけで若くして小隊のリーダーを務めるニーナを完膚なきまでに下したレイフォンの力量に周りのものは目を丸くした。

「いじられるだけの人だと思ったら……」

しかし、当人はフェリの呟いた言葉に軽くなみだ目になっていたが。

「……すげえな。そっちのやつはどれくらいやれるんだ？」

「……昨日久しぶりに打ち合って見ましたが、手も足も出ませんでしたよ……」

どよーん、とショックを受けたように蹲るレイフォンを見て、シャーニッドは目を丸くしてトウヤを凝視した。

「いえ、ただこいつが一年間腑抜けてただけです。ま、三日もすれば復調すると思いますよ」

ほら、しゃきつとしなさい！　いつものようにリーリンに怒らせているレイフォンを見て口元を緩めながらそう答えた。

「……リーリンから聞いてはいたが、凄まじいな、二人とも。いや、しかしこれでは……」

聞いた話ではリーリンとニーナは同じ寮だったらしい。リーリンが軽く、さわりのところぐらいトウヤたちの事を話したんだろう。

「ああ、カリアン……会長からは剽の使用を禁止されているんですよ」

「なに？」

「少なくとも対校試合では一般の小隊員程度に抑えてくれて」

立ち直ったレイフォンがトウヤの言葉を引き継ぐとなるほど、と頷いていた。

「それはそうと、その壁際にいる譲ちゃん是谁なんだ？　見たところ知り合いみたいだが、紹介してくれよ」

と、近寄ってきたシャーニッドが耳打ちしてきた。

そういえばなんでフェリが来ているのか理由をまだ聞いていない。

それも気になったのでちょいちょい、と手招きをすると、フェリ

がとことこと近寄ってきた。

「こちら、生徒会長の妹で……」

「フェリ・ロス。普通科二年です」

「俺はシャーニッド・クリプトン。よろしくな」

「ハーレイ・サットン。錬金科の三年だよ。よろしくね」

シャーニッドが手を差し出だして無視されるという、トウヤと同じようなことをしていたが、ハーレイは分かっていたらしく、苦笑いをするだけだった。

ふと、フェリの冷静な目が自分に向けられていることに気がついた。

昨日敬語は要らない、と言われていたので気楽に話しかける。

「なに？」

「あなたは戦わないのですか？」

「俺？ うーん、どうします？ アントーク先輩」

「ん？ ああ、そうだな……レイフォンとやってみてくれないか？」

「は？」

入団テストのようなものなのに、同じ新入団員のレイフォンとや

りあってどうするのか。さっぱりニーナの考えていることが分からないトウヤとレイフォンは二人そろって首をかしげた。

それを見て、ニーナは複雑そうに話し始めた。

「正直、私ではレイフォンの力量がどれほどのものか見極めることができなかった。トウヤはそれよりもさらに上だというじゃないか。一武者として、第三者の視点で見てもたくなかったんだ」

まあ、その気持ちもわからないでもない。自分だって女王とリントンスの真剣勝負なら見てみたい。見られるのはリントンスの見事な負けっぷりだろうけれど。

「幸い、生徒会長から念のため、と野戦グラウンドの一角を貸切にしてもらっている」

この展開を読んでいたのであろう親友にトウヤは恨み言の一つでも言いたくなった。あまり目立つのは好きではないのだ。

「今日一日は人も近寄らないようにしてくれているらしい。さ、行くぞ」

何かを吹っ切ったのか、先ほどの何かに悩むような表情はなりを潜め、ニーナは意気揚々と武道館を出て行った。

残された面々は苦笑しながらも、ニーナに続いてぞろぞろと着いて行った。

「やあ、遅かったね。トウヤ、レイフォン君」

「やっぱりいたな……」

用意されたという野戦グラウンドの一角に着くと、あのにこやかな笑みでカリアンが迎えた。その隣には、こちらを胡散臭そうに見る無精髭を生やした色黒の巨漢が立っていた。

「ああ、紹介するよ。こちらはツエル二の武芸長を務める6年生のヴァンゼ。武芸科の実質的なトップだ」

「ヴァンゼ・ハルデイだ。こいつからは君たちが想像を絶する武芸者だと聞いている。……正直、一年がそこまでの実力を持っているかは眉唾物だが」

はつきりと信じていない、と言い切るヴァンゼに先ほどのレイフォンの試合を見ていた十七小隊の一同が苦笑を浮かべる。

一方、トウヤたちはといえばほとんど気にしていなかった。いくら実力主義なところがあるグレンダンだからといって、嫉妬ややかみが皆無ということは無かった。特に年上からはずっと目の上のたんこぶ扱いされてきたのでトウヤは慣れているし、天剣になったとはいえ、完全に無くなったわけではなかったレイフォンにとってもそれは同じ。また、それを見ていたリーリンもまたか、と聞き流している様子だった。

しかし、その態度がますます気にくわなかったのか、ヴァンゼの目が吊り上った。

「ふん。カリアンがああも断言するのだからそれなりの実力はあ  
るのだろっな。それがどの程度なのか今日見定めてやるっ」

最後にもう一度苛立たしそくに鼻を鳴らしたヴァンゼは踵を返す  
と設置された観客席へと歩いていった。

「すまないね。ヴァンゼとは入学してからの長い付き合いなのだが、  
入学当初に話していた君たちの話を覚えていたようだね。今日見に  
行くと言ったら自分も行くと言って聞かなくてね……」

若干気まずそうに頬を掻くカリアンに気にして無い、と軽く手を  
振ると自分が動き回ることになるだろうグラウンドを見渡す。

全体的に平らで、円を描くように広がっている。レイフォンと天  
剣をかけて戦ったときの闘技場みたいだった。しかし、なかなかい  
い感じのグラウンドなのにあまり使われているような様子は無い。

トウヤの疑問を感じたのか、カリアンがいつものように解説を入  
れてくれた。

「ここは予備だね。普段はもっぱら林や段差など付けた所で集団戦  
を考慮した試合しかしないから、ここはほとんど使用されていない  
んだよ。だから人が近寄る心配も無い」

「なるほど、道理で辺鄙なところに建てられているわけだ」

シャーニッドが都市のシールドが見えるような位置に建てられて  
いるグラウンドを見て納得したように頷いた。

ふと視線を下げれば、ハーレイが錬金鋼を広げて分厚いPCのよ

うなものをいじくっていた。

「さ、二人とも希望は？」

輝くような笑顔のハーレイに後押しされて、トウヤはエメラルドダイト碧石錬金鋼を、レイフォンは少しの逡巡の後、クロムダイト黒鋼錬金鋼を手に取った。

「レイフォン！」

「はは……迷っていたけど、振り切れたよ。ありがとう、トウヤ、リーリン」

何のことか分かっていないカリアンたちを置き去りにして、レイフォンは晴れやかな笑みを湛えながらトウヤとリーリンに笑いかけた。

## 第五話 『入隊試験』（後書き）

原作を知らない方のためへの補足を付け足しておきます。

原作主人公で、当作品では主人公の親友ポジションにいるレイフオンは、過去にトラウマを持っています。

孤児院の資金を稼ぐ目的で武芸の道を志し、10歳で最年少の天剣授受者となり、同時に、さらなる資金稼ぎのために天剣授受者の名を利用して違法の賭け試合に出場し始めるが、数年後、ガハルド・バレーンというレイフオンを嫉んだ武芸者の告発によりそれが公になります。

これにより、女王から都市外追放を命じられ、孤児院の仲間達からは冷たい視線で見られるようになった。仲間に見離されたことから武芸へのやる気が失せ、武芸者でない生き方を見つけるためにツエルニの一般教養科へ入学する。といったものが原作の大まかな流れです。

しかし、ここで作者のご都合主義が発動し、都市外追放を命じられた時に、本来いなかったはずの幼馴染のトウヤが、レイフオンに好意を抱いていたリーリンとレイフオンをくっつけます。その後恋人であるリーリンとトウヤの励ましによって、武芸に絶望せず、武芸をやるかどうか、という程度で抑えられ、更に出立の前日に師であるデルクがレイフオンを認め、免許皆伝の証として錬金鋼を渡す。というのがこの作品の流れです。

十四巻を見て、やっぱりレイフオンとリーリンはくっついてほしい、という作者の願いを叶わせるための強引な原作改変ですが、ご了承ください。

後、いただいた感想には返信を必ず返させて頂いております。この作品のちょっとした疑問や、分からないところがありましたら、

遠慮なく申し付けてください。気づき次第、お答えさせていただきます。

PVが一万を突破しました。ありがとうございます。

第六話 『バトル』（前書き）

## 第六話 『バトル』

「では、私が止め、と言うまでだ。いいな？」

「はい。あ、そうだ先輩。危ないから観客席まで戻っててくださいいね」

「は？」

刀を持ったレイフォンが言った言葉に、ニーナは不思議そうな顔をした。

「危ないから、って言ってもな。二百メートルほどあるぞ？ ここ」

闘技場の端まで寄っていれば、よっぽどの事がない限り自分に被害はないだろう。と、一般的な武芸者の考えでニーナは判断していた。

「いいからこっちに来るんだ！ ニーナ君！」

間近で見たいニーナは渋っていたが、遠くの観客席からカリアンに呼ばれ、渋々観客席まで引き上げて行った。

「まずは錯落としからだな。レイフォン」

「うん。……トウヤにここまで差を付けられちゃったのは正直悔しいけど、すぐに超えて見せるよ」

すつとどちらからともなく獲物を構える。

レイフォンは八双に刀を構え、トウヤはどっしりと腰を落ち着けて棒を構えている。

「こおお。と特殊な呼吸法で集中を高めていく。研ぎ澄まされた視線が虚空でぶつかり合い、打ち込む機会を探り合う。」

二人の間にある空間ではすでに無数の想像の攻撃が繰り出されている。

「はじめえっ!!!」

観客席から響いた始まりの合図にレイフォンが弾かれた様に動き出した。

サイハーデン刀争術 『水鏡渡り』

レイフォンの姿が一瞬ぶれたかと思うと一瞬でトウヤの後ろに周る。その左手はすでに刀に掛けられており、トウヤに抜刀術を仕掛けられる体制になっていた。

レイフォンの必勝パターン。ならばこの次に続くのは神速の抜刀術！

「焰」

「甘いつ！」

抜かれつつあった刀の柄尻を脇越しに突き出した棒の先端で押し込む。完璧に技を潰されたレイフォンは大きく目を見開いた。

慌ててその場から脱しようとするレイフォンに、トウヤは慈悲のない攻撃を仕掛ける。

外力系衝剄

『閃断・嵐』

ひゅひゅひゅひゅんと棒を頭上で高速回転させながら、その先端と後ろ端からは絶え間なく小さな閃断がレイフォンに襲い掛かる。

スピードも威力も無視できるレベルではない。レイフォンは慌てて抜刀し、自分の急所のみを守っていく。

トウヤ本人もただ回しているだけではない。レイフォンのガードを絶妙なタイミングで崩し、少なくともダメージを負わせていく。

「どうしたレイフォン！」

「くっ、おおおおおお！！！」

活剄衝剄混合変化、天剣技

『金剛剄』

レイフォンは瞬時に剄をかき集めると、活剄による肉体強化と同時に、衝剄による反射を行う天剣の一人、リヴァースの模倣技を使用した。

閃断はレイフォンの全身から放つ高密度の衝剄にすべてかき消されて、霧散してしまった。

こうなると次に焦るのはトウヤだった。レイフォンに納刀させないように高速の連撃をたたみ込んでいく。

ソウシン流棒術 『流水棍』

「くううっ」

トウヤの得意技でもある『流水棍』。これは衝剄による攻撃ではなく、トウヤの純粋な身のこなしから来る、砲弾のような刺突の嵐。

一分の隙も見られない流れるような連撃は、ひとつの完成された舞にも見える。

一方そのころ、ニーナ達観客席一同は、その戦いに釘付けになっていた。

武芸者であるニーナ、シャーニッド、ヴァンゼは全力の内力系活剄で視力を限界にまで引き伸ばし、なんとかその高速の試合運びについていこうとしているし、好奇心でフェリも錬金鋼無しで念威端子を飛ばして感覚を拡大させていた。ハーレイは目をまん丸にして純粋に驚いている。

そんな中、カリアンは身を震わせて感動に打ち震えていた。

二度と見られないかと思っていた二人の戦いを再び見れたことに、若き日の感動を今もう一度感じられたことに。

しかし、カリアンやフェリ、ハーレイの非武芸者組みは気づいていなかったが、ニーナたちは、試合の流れが刻一刻と変化しているのに気づいていた。

「……凄まじいな」

ぼつり、とヴァンゼが放心したかのように呟いた。

「ええ。特にレイフォンは、この試合の中でだんだん動きが良くなつていつている」

「ああ、蛹が蝶になるみたいにな」

眼下にいるレイフォンは、所々被弾していたトウヤの攻撃をなんとか裁けるようにまでなっていた。

「はあああああああつっ！！！！」

予想以上の速さで動きが良くなっていくレイフォンに、心中驚きを覚えながらも棒を突き出す動きは止まらない。

切り上げをわざと防がせ、それに絡めるようにして剣を上弾き飛ばすと、槍でいう石突の部分で鳩尾を突くが鞘で弾かれ、ついに距離を取られた。

かちん、と鐳鳴りの音が小さく響く。

トウヤはレイフォン得意の抜刀術の構えにまで持って行かせてしまったことに小さくため息をついた。

「さあ、仕切りなおしだ！」

「ああ。来い！ レイフォン」

その言葉を皮切りに、レイフォンがトウヤに向かって跳躍した。

サイハーデン刀争術 『焰切り・翔刃』

跳ぶのと抜くのを同時に行う。動きが戻ってきたレイフォン自信の一撃は、トウヤによっていとも簡単に往なされた。

ソウシン流棒術 『ながし流』

全身の力を抜いて、クッションが衝撃を受けるようにレイフォンの一撃を受けた後、レイフォン自身の力と、体の捻りを使ってレイフォンを後ろに弾き飛ばす。

「まだ、まだあつ！！」

サイハーデン刀争術 『焰重ね・紅布』

外力系衝剄の化鍊変化によって炎と化した剄が無防備なトウヤの背中に突き刺さる、かと思いきやトウヤの姿はすでにそこにはなかった。

「なっ……」

「やっば、剄技の勝負ではお前に分があるな」

声に反応してレイフォンが上を向くといつの間にか、頭上高くに舞い上がっていたトウヤがレイフォンに向かって膨大な剄が籠められた棒の先端を向けていた。

ソウシン流棒術・奥義之巻、裏 『流星』

ひゅごっ、と空気を切り裂きながら一つの弾丸と化して、レイフォンの目からしても莫大な剄を纏ったトウヤがその名の通り流星の如く落ちてくる。

空気の壁を突き破ってくるので後ろではソニックブームすら起きている。

負ける。それを見たレイフォンの脳裏にこの三文字が絶望的なまで浮かび上がる。

「いや、まだだ！」

負けてたまるか！ 自分にこんな一面があったことに驚きつつも、燃え滾る心に突き動かされるようにしてレイフォンは全力で剄を集める。

集めた剄の量に手の錬金鋼がぎしぎしと軋みを立てる。この状況に六年前の試合を思い出しながらトウヤの一撃必殺に対抗できる技を練り上げていく。

天剣技 『餓狼一閃』

暴れ狂う膨大な剄をたった一つの閃断に籠める。そのあまりの剄の量に錬金鋼はがたがたと震えていた。

大きく振り上げた刀に、この煮えたぎるほどの闘争心を籠めて振り下ろした。

放出の瞬間、耐え切れずに刀身は粉碎したが、何とか技は完成させる事が出来た。

この技は、ある人ならただの閃断である。と言っだろう。しかし、他人には真似出来ない圧倒的な剄の量が、唯の閃断を天剣技にまで昇華させていた。

莫大な剄の塊がぶつかり合う。その衝撃波で地面は抉れ、野戦グラウンドには突風が巻き起こる。

観戦組みは、その剄の余波に身を竦めながらも試合の結末を見ようと目を凝らす。

そこに立っていたのは

「やっぱ敵わなかったね」

「ば〜か。今のお前が俺に勝とうなんざ……三ヶ月ほど早い」

トウヤはやけに具体的な数字を口にし、笑いながらびしっと半ばから折れた棒をレイフォンに突き出した。

レイフォンは苦笑しながら立ち上がると、ふと手元に残った柄だけが残った錬金鋼を見てあちゃ〜、という顔をする。

「どつしよつ……」

「ま、謝るしかないな。なぐに、カリアンに何とかしてもらっさ」

自分の錬金鋼を見、そう言って軽く肩を竦めて見せる親友にレイフォンは軽く笑った。

「レイフォン！」

「あ、リーリン」

「こら！ だめでしょ、錬金鋼壊しちゃ」

「あ、ごめん。でも、トウヤとするの久しぶりだったから、つい…」

「つい、じゃないでしょ！ 借り物なのよ！？ こら、トウヤもそこで笑ってないで、反省しなさい！」

リーリンに遅れてやってきたカリアン達は、先ほど人外の戦いをやって見せた二人を正座させてお説教をするリーリンを見て呆気にとられていた。

「ふ〜。よつやく終わったか」

「あはは……」

ようやくリーリンの説教地獄から抜け出したトウヤは、正座していた足を崩すと伸びをした。

「お疲れ様。いい試合だったよ、二人とも」

「いや、レイフォンと思いつきりやれてすつきりしたよ。サンキューな、カリアン」

「この試合を見ることに比べればここを貸し切る事なんて軽いものさ。さて、ニーナ君。二人はどうかね？ 私は十分合格の基準に達していると思うが」

心此処に在らず、といった様子だったニーナはカリアンに尋ねられて、はっと顔を上げると顎に手を当てて答えだした。

「ええ。劉や、それを扱う技量は十分、身のこなしも超一流、とくれば採用しない手は有りませんが、いいんですか？ 私のような部隊に二人を入れて。二人が不満に思ったりとかは……」

「不満？」

ニーナの部隊に入隊するのにそんなもの微塵も感じていないトウヤは首を傾げて問い返した。

ニーナの実直でまじめな姿勢には好感が持てるし、シャーニッドとは結構気が合いそうだ。ハーレイもいい人そうだし、何一つ不満はない。

「ニーナ君。二人が戦闘能力で舞台を選び好みするような人間に見えるのかい？」

「っ、そ、うですね。すまない、トウヤ、レイフォン。私はお前たちのことを侮辱していた」

「あ、いえ。気にしてないんで頭を上げてください先輩」

レイフォンが慌ててニーナをとりなすのを横目に見ながら、レイフォンはこの場の面々を見て、なるほど、と頷いた。

リーリンとおしゃべりしているシャーニッドはいかにもやる気になさそうだし、隊長のニーナは三年生。ここにフェリが入る予定だったのだろう。その隣では、ぼろぼろになった二人の錬金鋼を取り上げたハーレイが忙しそうに計器を覗んだり機器を指を躍らせたりしている。人数も揃っていないし、結束力も低い。普通の武者ならば他の人材とかが揃っているところに行きたがるのであろう。しかし、トウヤとレイフォンは普通の武者者ではなかった。

「別にそんなの気にしませんよ」

「いざとなれば、僕とトウヤがちょっと本気を出せばいいだけですから」

レイフォンの暴言とさえ取れる言葉にニーナや、傍で聞いていたヴァンゼが一瞬目を見開くが、先ほどの戦闘を思い出して納得した。

ここにいる他の面々は知らないことだが、グレンダンでの戦争

武芸大会は、女王が作ったくじで選ばれた天剣が一人出場するだけで、他は出ない。なぜなら、必要ないからだ。

天剣最強と言われるリントスは、普通一昼夜通して行われる戦

争を一時間で終わらせてしまった。それほどの化け物なのだ、天剣とは。

レイフォンもそこまでではないが、全員倒しても半日かからない。トウヤも似たようなものだろう。一人、都市ごと破壊してしまった天剣がいたが、そのタイムスコアは考えないようにする。

「……恐ろしいね」

今の天剣を持たないレイフォンやトウヤでは勝つのが難しい相手が十一人。女王は次元が違うという。

「なるほど。武芸の本場の名は伊達ではない、ということが」

「らしいですね」

「ま、そんな気にすることないって。グレンダンとここじゃ相当距離が有るからな。それに、都市の性質上戦争にはならないさ」

「そ、そうか。それもそうだったね」

トウヤの言葉で都市の習性を思い出したカリアンがほっとため息を漏らした。

「そうそう。なんでフェリがここにいるのか教えてくれるかい？」

「……………」

無表情でそっぽをむいているように見えるフェリだったが、トウヤの目には痛いところを突かれた、と冷や汗を掻いているように見

えた。

「あー、会長さん。だめですよ？ トウヤと約束しましたもんね」

「うぐ……しかし、一応聞いておかねば。これも兄としての勤めだ」

本当にー？ と覗き込むリーリンの目から逃げるようにしてカリアンはフェリの方を向いた。

「興味がありましたから。あなたが絶賛する二人の腕前に」

「そうか。どうだったかい？」

「確かに、いうだけのことはありましたね」

気のせいだろうか。トウヤは一瞬、フェリがリーリンに詰め寄られてたじたじになっているカリアンを見て、優しく微笑んだような気がした。

「なんですか？」

「いや、別に？」

笑ったフェリを見て、自然とほころんだ口元を隠しながら、いつの間にか隠れて手をつないでいる幼馴染二人を冷やかにいった。

## 第六話 『バトル』（後書き）

第六話、なんとか上がりました。

今回の戦いは、自分では少し物足りない量なのですが、レイフォンの鎧落としなのでこんなものかな、と納得する事に。

さて、トウヤの扱うソウシン流には、ちょっとした秘密があります。チャクラを回す。と言えば分かる人は分かるでしょうか？

ちょっとした疑問、ご意見、感想など、頂ければ随時返答していきたく思っております。ご遠慮なくどうぞ

## 第七話 『普通の日常、平和な時間』

ひゅっ、と風が耳元を通り過ぎていく。野戦グラウンドに設置されている森林の中をトウヤは風を引きちぎりながら進んでいた。

木が流れるように視界の後ろに消えていくのをぼんやりと意識しながら、前を失踪するニーナのサインを見て、頷いた。あれは確か挟撃だったはず。

さっ、と左に流れていくニーナを見送るでもなく、トウヤは右に向かって足を進めた。

すると、訓練用に設置された自動機械が三台木々の中から現れた。作戦が実行できなくなったことを悟ったトウヤはすぐさま腰の通信機に手を伸ばした。

「ちっ……隊長、こっちに先回りされました」

『了解。すぐそちらに向かう。それまで、耐えろ。』

「了解。レストレーション」

通信機を素早く腰に下げると、剣帯から鍊金鋼タイトを抜き取り、復元した。

それに反応したのか、自動機械達は備え付けのギミックの一つである刃引きされた剣ブレードを腰から引き抜くと、素早い動きで腕を振り回した。

三方向から襲い掛かるそれをトウヤは自身の技量のみで受け流し、捌き切った。

埒が明かないと判断したのか、自動人形はその樽の様な胴体の中央から鋼鉄製の紐を飛ばしてきた。それなりのスピードで飛んできたそれを錬金鋼ダイトで弾きつつ、発射された紐を剉を纏った手で纏めて引っつかむと、手繰り寄せようとしたが相手側の逸早い判断によって切り離された。

と、そこでようやく救援が来た。

「はあっ！」

力強い一撃で吹き飛んだ自動人形を見送りつつ、トウヤはすぐさまニーナと背中合わせになるようにして備えた。

今、トウヤは剉を一般の小隊員と同等にまで落としている。そうでもなければこのような自動人形ガラクタなど、一撃で粉碎してしまう。ニーナが先ほど『耐える』と言ったのも一応の念押しだった。それもそうだ。今は連携の訓練をしているのだから。

正面から一体。ニーナの方に一体。横から一体。それぞれがじりじりと近寄ってくる。と、そこで横手の一体が長距離からの射撃で吹き飛んだ。

「いまだっ！」

それを合図に、弾かれるようにしてトウヤとニーナは飛び出した。

シャーニッドが吹き飛ばした一体をそのまま釘付けにしてくれて

いるのが視界の端に映った。とりあえずその一体は無視して今トウヤの目の前で剣を振りかざしている物に集中することにした。

「ふっ！」

鋭く息を吐きながら流れるような五連撃。一撃目で剣を弾き、二撃目で肘関節と思われるところを突いて完全に剣を後ろに逸らし、無防備な胴に続けて二発。体制が崩れたところに強烈な一撃を見舞って、相手を行動不能にした。

重い音を立てて木に衝突し、動かなくなった自動人形を確かめてからトウヤはニーナを加勢しに行った。

「ふう……」

「お疲れ、トウヤ」

「お、サンキュー。リーリン」

無事撃破に成功し、レイフォンと入れ替わってベンチに戻ったトウヤはリーリンからタオルを受け取ると、隅で大スクリーンに映し出されるレイフォンとニーナのことをじっと見つめるフェリの方を見た。

「……何か？」

「いや、武芸を嫌がっていたのにどうい風吹き回しかな、と思

つてな」

「……たまたまです。それと、武芸が嫌いなわけではありません。自分で選択したいだけです」

こちらを見ようとせずスクリーンを見続けるフェリに、そっかと呟くとトウヤもスクリーンを見上げた。

そこには相手を気遣うあまり連携を崩したレイフォンと、それに上手く合わせているニーナの姿が映されていた。

「いや、大したもんだ」

「？ あなたにとってはアントーク先輩の技など兎戯に等しいはずですが？」

まったく、レイフォンは……と、呟いているリーリンの横で呟いたトウヤの言葉を聞いて、初めてフェリがこちらを向いた。

すっぱりとエリートであるニーナの武芸を兎戯に等しいと例えるフェリに思わず苦笑いを返しながらトウヤは答えた。

「そういう技とか力じゃなくって……なんというか、剄の輝きが違うんだ。隊長がどれほど武芸に情熱を掲げているかが分かる」

「……そうなんですか？」

「ま、なんとなくだけだな。それに技量も捨てたものじゃない。単独行動しかほとんどしてこなかったレイフォンにあれだけ合わせられるんだ。基礎を相当やり込んでるんだろ」

武者でないフェリやリーリンにこういうことを言ってもあまり分からないだろう。揃って首を傾げているのを見てトウヤは少し笑うと、スクリーンを見上げた。そこでは、ちょうど最後の一体を撃破したところだった。

「ん、飯の時間だな……隊長、昼ですけどどうします?」

『ん、そうだな。今日はここまでにしよう。一旦ベンチに集合だ』

「『了解』」

ぶつつ、という音を残して切られた通信機を再び腰に下げると、フェリに再び向き直った。

「先輩。俺らは多分今から昼食へに行くけど、先輩はどうする? よければ一緒に食おうぜ」

「そうですね……」

フェリは顎に手を当てて軽く思案するように目を伏せると、何を思いついたのか、ぽん、と手を叩いた。

「そうです。何かおかしいと思ったらあなたの口調です」

「口調?」

昼飯の話をしてたんじゃあ……という突っ込みは当然のように流され、フェリはどこかすつきりしたように口を開いた。

「ずっと違和感があったんです。先輩と呼んでいるのに砕けた口調で話しているからどうも調子が狂うんです」

「え？　なら敬語に直しましょうか？」

「それはやめて下さいと言ったはずですよ」

フェリは心底嫌そうに（といっても無表情にだが）即答した。

しかし、そうなる後は……

「名前で呼ぶのか？」

「そうですね。それが好ましいです。しかし、それなら私もあなたのことを名前で呼びましょうか」

「ま、いいけど。じゃあフェリでいいのか？」

「……そうですね。じゃあ私はトウヤ、と呼ぶことにしましょう」

トウヤは一瞬、そう言って一ツ頷くフェリが、嬉しそうに微笑んだように見えた。

「っと、それはそうとして、飯どうするんだ？　フェリ」

「昼ですか？　どこか適当なところで食べようと思ってますけど」

「いや、そうじゃなくてだな」

どうやら聞いていなかったらしいフェリにもう一度説明している隣で、何故かリーリンがすごく微笑ましい物を見る目でフェリを見ていたのが少し気になった。

合流したハーレイを加えた昼食は楽しかった。シャーニッドが軽いジョークで場を盛り上げ、行き過ぎたところでニーナがやんわりと嗜める。トウヤとレイフォンは研究熱心なハーレイの話に巻き込まれ、フェリはリーリンと二人で何かを話していた。

何も問題はなかった。なのに、なぜこんなところで座っているのだろうか？ と、トウヤは革張りのソファの感触を楽しみながら首を傾げた。

「待ちましたか？」

「いや、特には」

出されたクッキーをぼりぼり齧りながら振り向けば、普通科の制服から、フリルのたくさんついた可愛らしい私服に着替えたフェリが立っていた。

「似合ってるな、私服」

「どうも」

社交辞令よりも熱が籠った褒め言葉に、フェリは何故か口を引き締めて答えた。

それを疑問に思いながら上品な香りを立てる紅茶を口元に運んだ。

「っ……げほっ、渋っ！」

何倍に凝縮すればこうなるのか、口に含んだとたん舌に広がった  
渋みに思わず咳き込んだ。

「……失敗しましたか」

「……あー、これフェリが淹れてくれたん、だよなあ」

思わず口を突いて出そうになるため息を飲み込んで、ぐいっと一  
気にかップの中身を煽った。

「うん……悪くない」

体をびりびりと駆け巡る信号を意識的に無視しながら何事も無か  
ったかのようにクッキーを一口口に運んだ。

それをじと目で見ていたフェリだったが、トウヤの対面にまわっ  
てソファに腰を下ろすと、用意されていたティーカップに残ってい  
た紅茶を注ぎ、優雅な動作で口元に運んで……盛大に眉を顰めた。

「……よくこんなものが飲めましたね」

「いや、義妹いせむとが持って来る泥団こねだま子はこれ以上に酷かったから」

「……気を使ってくれているのは分かりますが、比較対象が泥団子  
ですか」

「あ、いや、まあ……悪かった」

拗ねた様にそっぽを向くフェリの子供染みた仕草に自然と笑みが浮かんだ。

ちら、とトウヤの方を見て盛大なため息をついたフェリは、口直しにかクツキーを一枚口に運んでから口を開いた。

「さて、今日はトウヤを私の家に招待したわけですが……」

「拉致の間違いでは？」

昼を食べて、店を出たとたんに、行きますよ。と言われわけも分からないうちにここに座らせられていたトウヤとしてはフェリの招待という言葉に一言申さねばならなかった。

しかし、フェリは気にした様子も無く言葉を進めていく。

「用というのは他でもありません。兄である生徒会長がたまには顔を見たい、と言っていたのを思い出したんです」

「なるほど。俺に用事があるとは考えなかったのか？」

「あなたの予定が今日の五時半にアルセイフさんと体を動かすまでは何も無いことは知っていました」

「……どうやって調べたんだ？」

「念威で少し」

「犯罪だっつ！！！」

プライベートの侵害は立派な犯罪である。事も無げに犯罪行為を口にしたフェリにトウヤは声を大にして叫んだ。しかし、フェリは涼しい顔でそれはさておき、と軽く流すと話を元に戻した。

「そろそろ帰ってくるはずなので私は席を外しますね……と、噂をすれば影、ですか」

がちゃ、と玄関の扉が開く音がフェリの言葉を遮った。

「ただいま、フェリ。ようこそ我が家へ、トウヤ」

部屋に入ってきて、どこか芝居がかった仕草で手を広げるのはトウヤの友達であり生徒会長のカリアンだった。

「よ。何のようだ？ カリアン」

「おや、聞いてなかったのかい？ 久しぶりに話したかったのと、フェリのことでお礼をね」

「お礼？」

ちら、とフェリの方を見れば照れているのかそっぽを向いていた。

「あの後すっかり話してね。少しは関係の改善につながった、ということだよ」

「そっか。そりゃよかった」

本当によかった、と我が事のように喜ぶトウヤを見てカリアンは仮面ではない、本当の笑みを見せた。

「はぁ……本当に、お人よしですね。トウヤは」

「おや？ いつの間に名前で呼び合うような関係になったんだい？」

「……さあ？ いつでしょう？」

「ふふ、兄としては喜ばいいのか悲しめばいいのか。ねえ？」

「俺に振るなよ」

にこやかな笑顔で聞いてくるカリアンをばつさりと切り捨てながらも、トウヤは随分と仲良くなった兄妹を見て、うんうん、と満足げな笑みを浮かべた。

そんなやり取りをしている男二人を冷ややかな目で見つめたフェリは、カリアンが手早くいれなおした紅茶を口元に運んだ。

「まあ、付き合うのはいいのだけれど、清い関係を保つようにね。君たちはまだ不純異性交際につっかかる年齢なのだから」

「っ……けほっ、こほっ」

「……あのなあ、カリアン」

流石のフェリも鉄面皮を維持できなくなっただけならいい。紅茶を気管に入れてしまったのか、なみだ目で咳き込むフェリの背中をさすっ

てやりながらトウヤは軽くカリアンを睨んだ。

「はっはっは、いやなに、人を遠ざけていたフェリが初めて積極的に知ろうとする他人……それも異性となればそういうのを期待してもいいだろう？」

「それにしたって限度がある。俺とフェリは会って一週間もたっていないんだ。そういう関係になるわけが無いだろう。今フェリが俺に興味を抱いてくれるのは……なんでだ？」

「僕に聞かないでほしいのだけれどね。さて、どういった理由なんだい、フェリ？」

「……………」

そんな自覚無しで馬鹿なやり取りをしている男二人をフェリはただ淡々と冷たく見据えた。

その背筋の凍るような視線に、老生体の殺気に耐えるトウヤや、武器を突き付けられても平然と笑うことが出来るカリアンでさえしり込みした。

「……………はあ」

もういいです、というように一振りされた手でようやくトウヤとカリアンは硬直を解いた。

フェリの前では恋愛事の会話は禁止だ、と目と目で会話をすると、二人して同時にうなずいた。

こちらに向けられているフェリの視線が痛い、気にしない。

「はあ、私は部屋に行ってますので、後はあなたたちで親睦を深めていて下さい」

呆れたようなため息をもらして去っていくフェリを見送ると、なぜか笑いがこみ上げてきた。

「くっ……」

「ははっ……」

二人で顔をつき合わせて笑っていると念威爆雷が頭上で炸裂した。

直接当たらずに、爆風が二人を襲うだけだったが、二人の髪の毛は見事にぐちゃぐちゃになっていた。

それをお互いに見て、また意味も無く笑うと、二人は取り留めの無い話を夕飯の時間まで続けた。

夕飯を作ろうとするフェリを必死に止めたのと、約束をすっぽかしたレイフォンに怒られる事になったのも、まあ、楽しい思い出の一つとなった。



## 第8話 『学校生活』

「これは……で、あるからにして、xに 5が代入でき……」

壇上に立つ教師の言葉が段々トウヤとレイフォンの思考能力を奪っていく。

向こうでさつそく仲良しになった女子生徒と座っているリーリンが睨んでいるが、そんなことも気にならないくらいに二人の意識は朦朧としていた。

「レイフォン・アルセイフ。トウヤ・カネモリ。この問題を解け」

「……は？」

名前を呼ばれて顔を上げてみれば、二人にとって意味を成さない数字の羅列があった。

たった一回の授業で見事に置いていかれた二人は慌てて周りに助けを求めるが、学校はまだ始まったばかりで知り合いも皆無。リーリンには聞かない。怖いから。

元はといえば、授業についていけないと思ったりリーリンのスパルタ授業のせいでもあるのだが、同じように付き合ったリーリンは、こうしてまじめに授業を受けているので文句は言えなかった。

「すみません」

初日から注目を集めることになった二人は、顔を真っ赤にして机

に沈み込んだ。

「まったくもう、二人とも武芸以外はてんでだめなんだから」

「面目ない」

「じめん」

リーリンは真面目に反省している二人を見ると、ふう、と大きくため息をついた。

と、そこでリーリンの説教が一区切りしたのを見計らったのか、三人の女子生徒が近づいていった。

「あ、あの〜……」

「ん？ あら、たしか……トリンデンさんとゲルニさん。ロツテンさんだったかしら？」

「そつ。今日はこの子がそのトウヤんに用事があるんだ」

「俺か？」

語尾に変な単語が付いていたような気もするが、地域独特の訛りだと判断して、気にしないことに。

金髪のツインテールが特徴的な少女に押されるようにして、三人

の中では一番背が低くてスタイルの良い小柄な少女が出てきた。その手には彼女が食べるには少し大きそうなサイズのお弁当が握られていた。

それを見て何を理解したのか、リーリンがレイフォンを引っ張って少し後ろに下がった。

「え、えっと、その、あの……」

俯いて顔を真っ赤にさせていた彼女が、何かを決心したように顔を上げ、トウヤの目を見た。

「あ……」

その琥珀色の瞳を見て、トウヤは彼女とどこで出会ったのか気づいたが、彼女が何か言おうとしていたのでそれをじっと待った。

「この間は、あ、ありがとございました」

「いや、気にしなくてもいいよ。放っておけなかっただけだから」

「そ、それでも……です」

「そうか？ ま、怪我が無いようで何より、だな」

につ、と人懐っこい笑みを見せるトウヤに、安心したのようにな彼女も小さく笑みを見せた。

「俺はトウヤ・カネモリ。好きに呼んでくれ」

「メイシエン・トリンデンです。友達からは、メイって呼ばれてます」

「じゃ、俺もメイでいいか？」

「あ……う、うん」

笑顔を見せて話す二人に、それぞれの幼馴染はうんうん、と頷いた。

ふと、お互いの存在を確認した四人は、いい感じの二人を放っておいて四人で集まった。

「リーリン・マーフェスよ。名前の方で呼んでね」

「レイフォン・アルセイフ。普通科だけど、武芸科も兼任してる」

「あたしはナルキ・ゲルニ。武芸科だ」

「で、わたしはミイフィ・ロツテン。わたしと、あつちのメイっちは一般教養科。わたしたち三人は交通都市ヨルテムから来たの。よろしくねー」

ふと、視線をずらせば完熟りんごのように顔を真っ赤にしたメイシエンがお弁当をトウヤに渡しているところだった。

それにナルキとミイフィは感心したような表情を見せる。

「へえ、あのメイがな……」

「うんうん、頑張ったよ」

ホロリ、と目を拭う仕草をするミィフィ。

彼女が何でトウヤにお弁当を渡しているのか分かっていないレイフォンの隣で、リーリンが正解にたどり着いた。

「あ、そっか」

「え？ 知ってるの？ リーリン」

「ほら、入学式るとき、トウヤが助けた娘じゃない」

「……ああ、そういえばそんなことも」

レベルの低い武者二人が暴れまわったことぐらいしか頭に残っていなかったレイフォンは時間がかかったが、何とか思い出せたようだ。

「そういえば、三人はどここの出身？ メジャーなところ？」

「あー、うん。えっとね……」

ちら、と横目で見てくるリーリンにレイフォンは頷きを返すと口を開いた。

「槍殻都市グレンダんだよ。放浪バスで来る途中にヨルテムにも立ち寄ったよ」

「へえー。武芸の本場かあ。だからトウヤんはあんなに強かったん

だね。レイとんも強いの？」

「まあ、そこそこに……って、それ僕の名前？」

トウヤと同じく訛りだと思っていたレイフォンは、自分の名前がはっきりと変わっていることに気づいて、思わず突っ込みを入れた。

「うん。そうだけど？」

何かおかしい？ といった風に聞かれ、レイフォンは自分がおかしいように錯覚してしまふ。

そこに苦笑するナルキがフォローに入る。

「すまないな。こういうやつなんだ」

「あ、うん。別にいいんだけど……」

と、そこで一人あだ名をつけられていないリーリンの方を見てみる。

「な、何？」

「いや、リーリンならどんなあだ名が付くんだろうな。って思っ  
て」

「うん、そうねえ。リーたん、リーリー、リーヤん、リーちゃん、  
リーンちゃん、リーちゃん。うん、なんかぱっとしないなあ」

「そうだな」

うん、と真剣に考え始めた三人をリーリンが慌てて止めに入る。このままじゃ珍獣のようなあだ名をつけられそうだった。

「わたしは別に、普通でいいから」

「うん、そう？　ならリーリンちゃんまで」

「……それでいいわよ。もう」

がくつと肩を落とすリーリンを見て、笑いが漏れる。

そのまましばらく穏やかで楽しい時間が続くが、ふと放っておいた二人の方を見てみると、二人仲良くお弁当を食べていた。

「……………」

「……………わお」

ナルキは驚き、メイフィでさえ一言漏らすのが精一杯のようだった。

極度の人見知りでそれに加えて男性が苦手なメイシエンが肉親以外とここまで一緒にいるのは初めてだった。しかもお弁当と一緒に食べている。

メイシエンの弁当を食べたとたん笑顔になるトウヤに、メイシエンが嬉しそうに顔をほころばせる。トウヤが弁当を指しながら何事か言ったかと思うとメイシエンがまた何かをしゃべる。

「これは……」

「ひょっとして、ひょっとするか……？」

お互いの顔を見合わせる二人にリーリンとレイフォンは首を傾げる。出会ってすぐなら確かに早いような気がするが、メイシエンはあんなことがあったのだから、吊り橋効果でトウヤへの好意が膨れ上がってもおかしくはない。女の子が異性に惚れるにはありがちなシチュエーションだったような気がする。

「どうしたの？」

「んーん。なんでもない。詳しいことは食堂行ってから話すよ。二人は、そっとしておこう」

るるん、とスキップをしながら出て行くメイフィを追って、三人は教室から出ていった。

「稽古をつけてほしい？」

「ああ、頼む。このとおりだ」

放課後、メイシエンたち三人と分かれたトウヤたちは、小隊員の合同練習があるということで武道館に向かった。

そこで見たのは、トウヤとレイフォンに頭を下げる小隊長、二ノ姿だった。

「うーん、ソウシン流はまだ極めたとはいえないから、難しいですね。あ、レイフォンは？ 免許皆伝もらってただろっ？」

「え？ うーん、そうだね……出来なくもないけど……」

現在刀を使っているレイフォンだったが、一度金儲けに使った自分が人様に教えていいものか、とレイフォンは真剣に悩んだ。

「ま、何事も試しだ。やってみる」

「えー……」

「嫌そうな声出さないの！ もう……二ーナ先輩の前なのよ？」

「あ！ す、すみません隊長」

「いや、私は気にしていないが……いいのか？ レイフォン」

真摯な目で見つめられ、レイフォンは自らの手に視線を落とした。躊躇う様に数回握ったり開いたりして、ぐっ、と力強く手のひらを握り締めた。

ゆっくりと顔を上げ、二ーナの目を見つめ返すレイフォン

「やります」

「……そうか。礼を言う、レイフォン」

ぺこり、と頭を下げる二ーナにレイフォンは尊大とも言える態度

で頷くだけだった。

それを見たリーリンにレイフォンが頭を叩かれるのはいつもの話だった。

「仲がいいな、あの二人は」

「でしよう?」

楽しそうに言い争う二人を見て、口元を緩めるリーナにトウヤはにやっと笑って見せた。

ごっしごっしとブラシが壁や床をこする音だけがただっぴろい空間を少しずつつ反響していく。

都市の心臓でもある機関部。中央にあるよく分からないものや複雑に入り混じった配管に注意しながら、レイフォンとトウヤはその汚れを落としていく。

「あのさー、レイフォン」

「なに? トウヤ」

ぼんやりと、しかし雑でなく仕事を淡々とこなしていたトウヤが、傍らのレイフォンに声をかけた。

「フェリ先輩のことどう思う?」

「フェリ先輩……ああ、あの先輩かあ」

レイフォンはうーん、と唸りながらちやぽちやぽとブラシを水につける。

「苦手……かな。あの目で見られるとどうにも落ち着かないんだ」

「そか。ま、そんなもんだらうな」

そんなもん? と首を傾げるレイフォンを無視してトウヤは先日のフェリとの会話を思い出す。

最初こそ何かに苛々しているようだったが、最後の方は楽しそうだった。様な気がする。フェリの表情は読みにくいので確証は持てない。

でも、フェリとじゃれあうようなあの時間は、確かに楽しかった。ちよつと子供っぽくって、少し背伸びしている感じが微笑ましかったフェリ。あれが本来の彼女なのだろうか。

「ま、考えて分かることじゃないな」

まだ自分は出会ってから日が浅い。彼女のことを知っているわけでもない。ならこれから知っていこうじゃないか。そう前向きに考えることにした。

急に独り言を呟いたトウヤを不思議そうに見るレイフォンに笑いかけながら、モップを動かした。

「なんだよ？」

「いや、なんでもない」

そうして、後は取り留めのないことをレイフォンと話しながら時間過ぎていった。

第8話 『学校生活』（後書き）

遅れて済みません。

いやー、友人から譲られた小説を書いていたり、グレイセスにはまったりと、執筆する時間が取れませんでした。

あと、今後引き継いだ『逆行なのはさん奮闘記』と平行して書いていくことになると思います。ご了承ください。

## 第九話 『急接近』

かりかりとペンをノートに走らせる音と、熟年の教師の淀み無いすらすらとした朗読が教室を支配する。ペら、と教師の男性が教科書を捲ったところで終わりのチャイムが鳴った。

「今日はこちらまで。P138の議題を自分なりに考えて纏めておく事」

壮年の男性は淡々と授業の終わりを告げると、そのまま静かに教室を出て行った。

「「終わったあー！ー！！！」

それを見届けるのと同時に、トウヤとレイフォンが喜びの雄叫びを上げながら机に倒れこんだ。

それを皮切りに静かな静寂に包まれていた教室は騒然とした空気に入れ替わった。気の早い者は、もう鞆に教科書を手当たり次第突っ込んでいる奴もいる。

「まったくもう、いつもいつも情けない声出さないでよね、二人とも」

「ごめん、つい……」

「出ちまっつんだよなあ」

うう、あゝ、あゝ、と気味の悪い脱力しきった声を上げる二人を、

リーリンは冷ややかに見下ろした。

教室内でもトウヤたちの行動を特に気にした様子は無い。何人かは笑っている様子から、二人はこの教室に何とか馴染めた様だった。

と、そこに馴染めた要因の一つでもある少女が、金髪のツインテールをひよこつと揺らしながらトウヤたちの前に現れた。

「あはは、いつも通りだねー。三人とも」

「お、ミィか」

「そそ、ミィちゃんです。っと、そうだ今日って予定ある？ レイトんとトウヤんは明後日の対校試合のための休養で今日は空いているはずだし、リリィちゃんは買出し以外にする事は無いはずだけど……」

「いつもながらどこからそんな情報を仕入れてくるのか気になるけれど……そうね、確かに予定は無いわ。二人を荷物持ちにどこか出かけようと思っていたところだから」

「あ、やっぱり？ じゃあさ、あたたちと遊びに行かない？ もちろん、荷物持ちの二人も一緒にね」

「そうね、そうしましょうか。こんな馬の骨でいいのならいくらでも貸すわよ」

「馬の骨って……」

ぐったりと身を机に預けている馬の骨兼荷物持ちの苦情はあっさ

りと無視された。

「リーちゃん。二人が馬の骨っていつのは酷いと思うよ?」

「冗談に決まってるじゃない。メイは心配性ね」

優しいメイシェンがなんとか不名誉な呼び名は撤回させてくれたが、荷物持ちはどうがんばったって変わらないのだった。

汚染獣相手なら一歩も引かない二人も、女だらけのこのグループでのヒエラルキーは底辺だった。

「ありがとう、メイ」

「サンキューな」

それでも、優しい少女に礼を言うのは当たり前だろう。あんまり言いすぎると照れて隠れてしまうので一言で簡潔に済ませる。この三人娘との付き合いもそろそろ一ヶ月。トウヤたちとミィフィたちの関係は今のところ、友達以上親友未満、といったところをうろつろつとしていた。

約一名、親友の壁をも乗り越えたい少女がいるようだが、最近身の回りがばたばたしていて相手には気づいてもらえていない。まあ、その親友のように度を越えた鈍感ではないようなので落ち着けば気づかれるだろう。

「さて、こんなところで長々と立ち話をしているのもあれだし、さっさと町に乗り出すとしよう」

「そうね」

「さんせうい」

男二人を供にして、ぞろぞろと華やかな集団は教室を出て行った。

日が緩やかに傾いて、段々と視界に暖色系の色が混じり始めるような時間は、学園都市の商店街がもつとも賑わう時間帯だった。

道路は同じような制服の生徒で埋め尽くされ、小柄なものではすぐに埋もれてしまう。

と、まあ小柄なメイシエンが予想通り人波に飲まれ、念の為傍に控えていたトウヤがその手を取ったまでは良かったのだが、そのまま二人して人の波にさらわれてしまったのだった。

「ど、どうしよう……」

「んー、どうする？」

連絡を取るような手段が見つからない現状、この場を動かさないのが正解なのだろうがどうしてもとんとんとあちらこちらに流されてしまう。こうなっては手を繋いだ位では意味が無く、メイシエンがトウヤに抱きつくような形になっていた。

メイシエンの柔らかい体や、髪から流れる甘い香り……と、お約

束の女の子の攻撃に、耐性の無いトウヤはあっさりと負けてしまい、内心どきまぎしながらなんとかメイシエンが潰されない様に人の流れを読んでなるべく自分にだけ当てるようにしていた。

「う……」

「ん？ 大丈夫か？ メイ」

しかし、ぎゅっとトウヤの体を抱きしめるようにして辛そうな呻き声を上げるメイシエンを見て、そんなお花畑な思考はあっという間に消え去った。

青い顔で首を横に振るメイシエンに、人波に酔ったのだろう、と簡単に判断してすぐさま行動に移した。

腰を支えながら、僅かな足場を使用して流れるように雑踏を潜り抜けていく。ソウシン流の基本である『流』の応用で、人の流れを読んでその隙間に強引に体をねじ込んで行く。

肩やら背中に道行く人の体がぶつかり、迷惑そうな顔を向けられるが軽く頭を下げながら何とか休めそうな公園にたどり着いた。

途中の水場でハンカチを濡らし、ぐったりとしているメイシエンをベンチで膝枕すると、濡れたハンカチで冷や汗をかいたメイシエンの顔を軽くぬぐってやる。

「ごめん、ね。トウヤ」

「いや、気にすんな。それより硬い枕で悪いな」

メイシエンはトウヤのおどけた様なセリフにふるふると小さく首を振ると、ほっ、と人心地ついたような表情を見せた。

カラスの濡れ羽、というのだろうか。カラスという生き物は知らないが、メイシエンの髪のような色をした羽を持った鳥ならば、たいそう美しかったに違いない。

そつと引き寄せられるように髪に手を伸ばすと、一房手に取ってみる。

「う、わ……」

指と指の間をさらさらと零れ落ちていく感触を楽しんでいると、青い顔をしていたメイシエンが真っ赤な顔をして目を見開いていた。

「……………」

「……………」

なんとなく見詰め合ってしまったが、良く考えれば恋人でもない男に触られていい気がするものでも無いだろう。リーリンも髪は女の命だとよくレイフォンに言っていた。

「というかこの体制も十分危ない。まあこれはメイシエンの体調不良が原因だ、と責任転嫁して自分を納得させる。」

「あー、ごめん」

「え、あ、ううん。別にいいよ、これぐらい」

「そうなのか？」

社交辞令だと分かっているのにもかかわらずまた手が伸びる。掬い上げた髪は、重力に逆らわずに、滑らかな感触だけを残して滑り落ちていく。よく義妹や義弟の頭を撫でていたが、これは別次元の心地よさがある。

ふと、真つ赤な顔をして身を縮こまらせているメイシエンを見て、またやっちまった……と、激しく自己嫌悪した。

「いや、本当にごめん。メイシエンの髪が……」

「私の？」

「なんか艶々してて触り心地が良さそうだったから、つい……」

なんだか悪戯小僧が母親に叱られるのを待っている気分だった。

しかし、返ってきた言葉は、トウヤの予想の斜め上を行った。

「気に入ってくれたなら、いつでも触っていいよ……？」

「は？」

「あ、ひ、人がいるところじゃだめだよ？」

そこじゃないだろ！ と突っ込みそうになるのを我慢しながら何とか頷いた。メイシエンは、とたんにほっとしたように体から力を抜いて、トウヤに体を預けた。

トウヤの膝の上で安心しきった様子で目を閉じるメイシエンは、なんだかとても庇護欲をかき立てられる。具体的に言えば守ってやりたくなる、だ。

そして、友達とはいえ、異性である自分に体を預けるメイシエン。これは、ひよつとしてひよつとするかも……？

いや、待て待て。メイシエンは今まで男友達がいなかったんだし、友達には大体こんな感じなのかもしれない。勝手にメイシエンの気持ちを決め付けるのは良くない。うん。

大きく深呼吸して激しく脈打っている心臓を何とか鎮め、思春期特有の勘違いを吹き飛ばす。緊張で汗を掻いていた手を袖で拭って、心地良さそうな寝息を立て始めたメイシエンに上着をかけてやる。

そこまで寒くはないとはいえ、まだ夏には程遠い。風邪を引くかもしれない。

と、そこでトウヤの鋭敏な感覚が二十メートルほど先の茂みから、三……四人ほどの視線がこちらに向かっているのに気がついた。分りにくいのはレイフォンだろうか、トウヤでもはつきりと認識出来なかった。

「……出てきていいぞ」

「あっははは、ばれてた？」

「いや……」

見栄を張ってもいいが、あんなあからさまな視線に気づかなかつ

た自分が未熟なのだから、と否定する。断じてメイシエンに動揺していたわけではない、と思いたい。

「ほお、気持ち良さそうに寝ているなメイの奴」

「ほんとねー。そんなに寝心地が良いのかしら？」

リーリンとナルキが、にやにやとからかいの笑みを張り付けながら、トウヤが身動きの取れないことをいいことにメイシエンの腕を取ってトウヤの腰に巻き付けたりして遊び始めた。

「あ、わたしもやるやるー」

「ちよつ、待てお前らっ！　ね、レイフォンっ！！」

「じゅめん……」

「このやるっ……って、やめろっ、やばいから、ほんとに」

親友に助けを求めるも、薄情なことに視線をあらぬ方に向けたレイフォンを睨みながらメイシエンの体をトウヤに撓垂れ掛らせようとする三人から何とか抜け出すと、ほっと一息ついた。

「なにー？　まさか家のメイ<sup>うち</sup>っちを受け取れないっていうんじゃあないでしょうね」

「そうだぞ。顔良し、器量よし、性格良しの優良物件だ。今から唾付けといて損はないだろう」

「トウヤ、男らしくないわよ」

「だー、もういいから静かにしてくれ……」

そんなに言われると本当に勘違いしてしまいそうだ。というか、本人がいないところで話す内容じゃない。いたらいたでまた問題なのだが。

疲れ果てて、ぐったりとして地面に座り込むトウヤの背中に、眠ったままのメイシエンが乗っけられた。

「よろしくね、トウヤ」

「……りょーかい」

いい笑顔でお願いされ、渋々頷いたのだった。

ゆらゆらとゆっくりと体が揺すられるのがぼんやりと感じられる。霞がかかった意識の中で、何か暖かいものに触れているのが分かる。気持ちよくて、心地よくて、無意識のうちにその暖かい物を抱きしめていた。

「わ、メイっち大胆」

「ふむ、メイを頼むぞトウヤん」

ぐらり、と一定のリズムで揺れていた体がなぜか大きく揺れた。心地いい時間を邪魔されたことに小さな怒りを覚えながら、メイシエンは目を開けた。

「あ、起きた」

「……え？」

目を開けてみれば、自分よりも背が高いはずのミィフィの顔が下にあった。

それに疑問を覚えつつ、無意識に何かからずり落ちないように腕に力を込めた。

暖かい何かにくつつくと、鼻を何かがかくすぐった。顔を前に向けてみれば、茶色がかった黒い髪の毛があった。背中にはなぜか男子物の制服が掛けられている。

「あー、メイ？ もういいか？」

「ふえ？」

くるん、と目の前の物体が回転したかと思うと、正に目と鼻の先に先ほど自分を看病してくれていたトウヤの顔があった。

「え……あ、う、え？」

「ふふ、気持ち良さそうに寝てたわよ、メイ」

「そうだな。メイが苦手な男の膝の上や背中でもうも安らいだ顔を見せるとは……少し予想外だったかな」

パニックになる頭ではそんな親友たちの言葉でさえ右から左だった。意外と冷静な部分では、トウヤの手厚い看護を受けているうちに心地よすぎて眠ってしまった、ということは覚えていた。

まわりの友達の暖かい視線が恥ずかしすぎる。穴があつたら入りたいぐらいだった。

「って、待て、なんでそこに顔を？ いい加減いろいろとやばいんだけど……」

疲れたような、何かに慣れてしまったような彼の声が聞こえてきたが、メイシエンは彼の背中から顔を離すつもりはなかった。

ここまで恥ずかしい思いをしたと言うのに、何故か離れようという気はまったく起こらなかったのが不思議だった。その恥ずかしさを隠すため、と自分自身に言い訳しながら、メイシエンはより一層、抱きつく強さを強めた。

第九話 『急接近』（後書き）

すみません、ここで一つお知らせがあります。

家庭の事情により、国公立を目指すこととなってしまいましたので、一時更新を中断させていただきます。楽しみにしてください。方には、ご迷惑をおかけしますがご了承ください。

## 第十話『初試合』（前書き）

どうもお久しぶりです。なんとか地方の某有名国公立に入学することが予定されている（あくまで予定です。発表は七日）take yaです。楽しみにしていてくださった方がいらっしやれば幸いです。

久々に文章を書いたのでクオリティが少し心配ですが、どうぞお楽しみください。

## 第十話『初試合』

「さて、今期に入りまして初の小隊対抗試合が開催されます！ 今回は安定した強さに定評がある十四小隊と、謎の新人二人を加えた十七小隊との対決です！！ さあ、この試合の行方はどうなるのか、それは私には想像も

お決まりの言葉を若干興奮しながらまくし立てる司会者の言葉と、会場のざわざわとしたざわめきを心地よさそうに聞きながらシャーニッドが口を開いた。

「んっ、いいねえ。こつこつ雰囲気の中ならいつもの5倍の実力が出せそうだ」

「出来ないものは口にするんじゃない。浮かれすぎだぞシャーニッド」

「はは、こつこつものは緊張しすぎても毒なだけだつて。楽しまなきゃな」

そう言うシャーニッドの顔には緊張の色はなく、本当にこつこつ空気を楽しんでいるようだった。

それを見て、寝ていたニーナも諦めた様にため息を吐くと、こちらは本当に自然体でいる二人に話しかけた。

「二人はどうだ？ 緊張はしてないか？」

「いえ」

「いくらなんでも人が死ぬわけでもない試合で緊張はしないですよ。隊長も力抜かなきゃ、いざというときに本領発揮できませんよ?」

レイフォンの刃引きされた刀を見て、トウヤが肩をすくめた。

二人にとってこんな試合はお遊びにしかないのは知っているが、それをさも当然のように言われては、真面目に対校試合に向けて取り組んできたニーナにしてみたら、少し複雑なものがあつた。

「それに、本番は今日じゃない。味方に過剰な敵意を見せるのも、変な話だと思いませんか?」

「っ! ……そうだったな。どうせわたしたちは新米部隊なんだ。胸を借りる気持ちでぶつかっていくぞ!」

トウヤの指摘を受け、どこか切羽詰ったかのような敵意を見せていたニーナの気配がふつと緩み、すぐさまそれ以上の闘志が溢れ出る。

シャーニッドやハーレイを見れば、ようやく本調子になったか、という風に苦笑していた。

「相変わらず、トウヤは人を元気付けるのが上手いね」

「そうか?」

「そうだよ」

そうだったか? と首を傾げるトウヤにレイフォンは頷きを返す

と、目の前の野戦グラウンドに視線を向けた。

先日練習を行ったグラウンドなので大体地形は把握しているが、今十四小隊が罫を仕掛けていているから、そう易々と進めそうになかった。

「お、リーリン発見」

「え？」

トウヤの声に釣られてそちらを見てみれば、内力系活剷で強化された目がこちらに手を振るリーリンを捕らえた。

それに軽く手を振り返しながら隣で同じようにメイシエンたちに手を振っているトウヤを見た。

くつつけたのは自分の癖にいつも彼女が欲しい、と自分たちを見て言っていたトウヤだけど、あれだけ可愛い女の子が三人もいれば一人ぐらいとはくつつくのかな。と、鈍い頭を働かせて考えてみたがトウヤの好きなタイプなんて知らないので、所詮は捕らぬ狸の皮算用でしか無かった。

「始まるみたいだ。……いくぞ」

「ういゝっす」

気の抜けた声を返しながら、シャーニッドが所定の位置についた。それに習ってトウヤとレイフォンもニーナの後ろに続いた。

「それでは！ 対抗試合、第一戦。第十四小隊VS第十七小隊。試

合、開始！！！」

ピイイイーと、甲高い笛の音を聞きながら、レイフォンたちはそれぞれ行動を開始した。

「はああああ！！！！」

「遅い！」

罾を解除しながら進んでいると、哨戒に来ていたのか、三人で固まった十四小隊のメンバーを見つけた。

敵もトウヤに数瞬遅れて構えを取ると、旋廻で一気に懐に飛び込んできたが、レイフォンやその他天剣メンバーの動きに目が慣れていくトウヤにとっては止まっているも同然だった。

一斉に突き出された剣を体に当たらないように『流し』、硬直している一人の腹に棒を突き立てた。

「ぐふあっ！」

新人、ということでお断りしていたのか成す術も無く吹き飛ばされていく隊員Aを見送るでもなくトウヤは残りの二人に視線を向けた。

そこでようやく手を抜いて敵う相手ではないと悟ったのか、隊員

BとCが全身に剄を迸らせて剣を構えた。

「こちら03（ゼロスリー）。三人と交戦中、隊長格はいません」

『こちら01（ゼロワン）。了解、無理しないで戦え』

「03（ゼロスリー）了解」

『こちら04（ゼロフォー）。敵念威操者に捕捉されたみたい  
です。指示をお願いします』

『01（ゼロワン）了解。そのままフラッグに直進し、敵を引  
き付ける。フラッグの破壊は02（ゼロツー）に任せる』

『04（ゼロフォー）了解』

ちら、と時計を見れば作戦完了（ミツヨク）まであと二時間あった。

「くっ、一筋縄ではいかないぞ！」

「分かってる！」

起き上がってきた隊員Cと声を掛け合って武器を構える隊員A B  
Cに、トウヤは不適に笑って見せた。

二流、三流所の武芸者は総じてプライドが高い。それを嫌という  
ほど知っているトウヤはわざとらしく手招きして挑発してみせた。

「「「」

頭に血が上った馬鹿三人をトウヤが片付けるのに、そう時間はかからなかった。

「……………」

なぜ自分はこんなところにいるのだろうか、とフェリは自問した。

それでもフェリの視線は巨大スクリーンの方へと向けられ、今まさに三人目を叩きのめそうとしているトウヤの姿をしっかりと捉えていた。

「強い！ 強いぞトウヤ・カネモリ！！ 十七小隊、期待の新人がやってくれました！ これで四対七で不利だった十七小隊は、四対四の互角に持ち込むことが出来ました！」

何故か高揚する自分の胸を押さえ、フェリは画面を見続ける。

画面では、無力化した隊員をトウヤが解除した罫の紐やら縄を使って手早く縛り上げていた。縛り終わると、掻いてもない汗を拭う仕草をするのが彼らしかった。らしくもなく緩んだ自分の唇を押さええていると、隣から聞き覚えのある名前が飛び出した。

「……………驚いたな、トウヤんがこんなに強かったとは」

「そつなの？ ナツキでも勝てない？」

「無理だつて。それどころか今簡単に伸された三人のうち一人とやっても勝てない」

「……そ、そんなに強かつたんだ。トウヤ」

なぜだろう。小柄な女生徒が彼の名前を呼ぶと心がざわつくのは。

ふと画面に視線を戻せば、既に彼の友達に視点は移り変わっていた。迫り来る念威爆雷や罨を掻い潜り、派手に注意を引き付けて敵本陣に切り込む様は確かに心踊るものがあった。

しかし、先ほどの彼の時と違い、何かつまらない。もう一度彼が出ればいいのに、といつの間にか自分で期待していた。

「レイとんも凄いな」

「そうだねー。わたしは武芸なんてさっぱりだけど、二人が凄いはよく分かるよ」

「いや……」

「何か違うの……？」

「いや、私もなんていったらいいかわからないんだけど、あの二人は何か違うんだ。こう、言い表せないけど、一挙手一投足が、私みたいな凡人とは違う。そう思うんだ」

「ふーん。で、なに？ 嫉妬でもしちゃった？ ナツキ」

「……正直、嫉妬はしてる。これ以上ないほどに。でも……」

「でも？」

「それで今まで見てきた二人が変わるわけじゃない。ミィの言いたい事は分かってるさ」

イラッ

「ふふん。ならいいのよ。メイっちはどう？ さっきからスクリーンに釘付けだけど」

「え？ あ、わ、私は、別にそういうのじゃなくて、ただかっこいいなあって……」

ムカツ

「んん？ それってやっぱり……」

「あ、う、ちが、今の無しにして」

「だーめ。ほら、愛しの彼を応援してあげなきゃ。いっせーのーっで！」

「む、無理だよお」

イライライライラと、自分でも訳の分からない憤りがフェリを支配する。なんだこれは、悔しい？

何が悔しいというのか。たとえ彼が自分の知らないところで何をしていたように、誰と仲良くなるのが自分には関係ないはずだ。だと

いづのになぜ自分はこのなにもイラついているのか。

「……………はあ」

帰ろう。とフェリが立ち上がったとき、画面ではニーナが敵の奇襲を受けて吹き飛ばされるところだった。

「ぐうっ……………！」

奇襲を受けた？ 何処から？ 敵は何処だ。

勢い良く体を地面に叩き付けられたが、ニーナの思考が止まることはない。痛む体を無理やり動かして、反射的に攻撃を受けたほうと逆の方向へと跳んだ。着地するよりも早くにまた衝撃。

今度は警戒していたのでなんとか受身を取って素早く敵に向き直った。

「ほお、訓練は怠っていなかったようだな」

「……………あなたは」

泥にまみれたニーナが見上げる形で相対したのは、ニーナがまだ十四小隊に所属していたころに良くしてくれた隊長、シン・カイハーンだった。

「お久しぶりです」

「ああ、息災のようで何よりだ」

そのいかつい面差しも、厳格そうに引き締められた口元も、ニーナの記憶通りだった。

一瞬、お互いに懐かしむような雰囲気あいまみで相見えた二人だったが、次の瞬間には空気が重くなるほどの闘志を持って対峙した。

相手の僅かな一挙動をも見逃さぬよう、両者の瞳が鋭く光る。互いにある程度は知っている相手である。頭の中で相手の次の行動を思い浮かべ、それに備えるか打って出るかを考える。

壮絶な読み合いを制したのはシンだった。先に仕掛けることを決めたニーナよりも数瞬早くに地を蹴ったシンは、大上段からの痛恨の一撃をニーナに叩き込んだ。

質量に差がある鉄鞭で受け止めたにもかかわらず、体の芯にまで響くその重い一撃にニーナは改めてシンの高い実力を再確認し、口元に薄い笑みを貼り付けた。

それはシンも同じだったようで、額と額をこすり合わせるようにしながら獰猛な笑みを浮かべていた。

「はあっ！！」

「っあっ！！」

シンの回転が速く、巧みで重い攻撃をニーナは武器の質量の差と

鍛え上げた臂力とで捌いて行く。

「ふんっ！」

「でやあっ！」

ぎしぎしと軋みを上げる体を無視して、無理に両腕の回転速度を上げていく。無理しているのは相手も同じなのだろう。一分ほどの交戦で、既にお互い汗だくになっていた。

それでも止めない。ただひたすらに目の前の敵を見据え、打ち込むことだけを考える。

「くっ、おおおっ！！！」

シンはその鬼気迫る勢いのニーナに一瞬吞まれかけ、自らを鼓舞するかのように雄叫びを上げた。

「くうっ……」

シンがニーナの鉄鞭を弾き、すぐさま距離をとった。戦況をひっくり返したというのに、すぐさま元に戻された。

このあたりに自分とシンとの経験の差が出ているようで、ニーナは臍を噛んだ。しかし、すぐさま頭を振ってそんな弱気を吹き飛ばし、気持ち新たにシンに向かい合った。

「……驚いたな。俺が見てきたお前は、今のような場面では逆に猪突猛進するタイプだったと思っていたが……一皮剥けたか」

「はい」

「……あの新人二人か？」

「はい。自分が如何に井の中の蛙だったかを思い知らされました。毎日悩んで、悩み通した結果が、今の十七小隊です」

「……そうか」

特に何が変わったという訳ではない。二人の事を受け止めたからといって、ニーナの力が物凄く強くなったわけでも、隊の結束力が上がったわけでもない。ただ、ニーナ自身が変わっていた。

それを見越しての言葉だったのだろう。目の前の男の大きさをニーナは再確認し、相手への敬意を込めながら疲れる腕に鞭打って鉄鞭を構えた。

「しかし、ここで俺がお前を倒せばいい。あの新人二人はフラッグにはまだまだ遠い。それまでに決着は着いているだろう」

レイフオンは今正に戦っているところだろうし、トウヤの位置は遠かった。

「ええ、でしょうね。私ではあなたに勝てない」

時間を置いたことで鉄鞭を持つ腕が重い。このままでは数分と持たないだろう。しかし……

「十七小隊は私や、あの二人だけではありませんよ」

「なに？」

穏やかな顔でそう言ったニーナに、シンは何かを忘れていたような気がして顔をしかめた。その瞬間

『シューーーーーッット！！！！　なんと、なんとここで決め手はシャーニッドだったあ！？　誰にも気づかれずに近づき一発でフラッグをとめるその腕には驚嘆の一言！！　十四小隊のフラッグが折れたことで、十七小隊の初白星の決定だーーーー！！！！』

「な……………」

言葉を失い、呆然と立ち尽くすシンにニーナは会心の笑みをみせた。

「私は仲間を信じていた。昔の私とはもう違いますよ、カイハーン先輩」

「…………シンでいい。確かに、昔とは違うようだ。よくここまで成長したな、ニーナ」

「ありがとうございます」

こうして、大半の観客の予想を裏切る形で、十七小隊は勝利を収めた。

## 第十話『初試合』（後書き）

二回目ですがどうも、復活しましたtakayaです。

発表が七日なので、日々眠れない毎日を過ごしています。それを紛らわせるためにも、がんばっていきたいと思います。七日から更新がしばらく途切れる可能性もありますが、そのあたりは、まあ笑ってください。

さて、本題に入りますが、かなりあっさり勝ちました。まあこれはこんなもんでしよう、と。むしろ苦戦してもおかしいです。今更ながら小隊を分ければ良かったか思いつつ、そしたらフェリがないんだから人数が足りないだろう、と自分で突っ込みを入れた書いていました。

いまだ小隊に入隊していないフェリですが、どうなると思います？ このままほの恋愛ルートまっしぐら、とかも考えたんですが、それじゃアレギオスにする意味がない。まったく、ままならぬものです。

ちよつとぐぐだになりましたが、これにて終わろうと思います。

感想は血肉に、ご指摘は養分に、批判は脳の活性に役立てていきたいと思えます。どうぞよろしく願います。

## 第十一話 『過ちて改むるにはばかりることなかれ』

「~~~~っ、はあ。疲れたな、レイフォン」

「そうだね……」

レイフォンとトウヤは部屋に戻るなり、制服も脱がずにベットに勢い良く転がった。

あの後、祝勝会と称して二ーナの寮でささやかなパーティを開いてもらった。メイシエン達も呼んで、寮生の人たちと一緒に飲み食いした。メイシエンの力作の料理はとてもおいしかったし、試合後の程よい疲れで、みんなちよつと気を抜いていた。……それがいけなかったのかもしれない。

なんと、寮長であるセリナさんが、いつの間にかお酒を持ち込んでいたのだった。王宮でのつきあいがあったレイフォンと、女王や天剣授受者の皆に気に入られていたトウヤは立食パーティーなどで酒を嗜む事もあったため、それが酒だとすぐに気づいたのだが、唯一二十歳を越えていて酒精解禁の年齢に至っていない皆は気づかずに果物酒などを結構な量飲んでしまっていた。

慌てて取り上げたときにはもう遅い。暑がって服を脱ごうとする人や、泣き上戸でレイフォンに縋り付いて泣き続けるリーリンに、やたらトウヤに引っ付きたがるメイシエンに、絡み酒のミイフィ。笑い上戸のナルキと、收拾がつけられなくなってなんとかお開きしたのがつい先ほどの26時。

女性陣は寮に泊まっていけばいいものの、本来男子禁制であるは

ずの女子寮に泊まるわけにいかず、男二人はなんとかかんとか男子寮に戻ってきていた。

「でも……」

「ん〜……？」

「楽しかったね」

「ああ、そうだな」

二人は顔を見合わせて軽く笑うと、制服を脱ぎ、電気を消して再びベットに寝転がった。

「おやすみ」

「ああ、おやすみ」

「で、何で俺は連行されているんだ？ フェリ」

「いいから着いてきてください」

経緯はこうだ。授業が終わって、レイフォンと喜びの雄叫びを上げてみると、一年の教室にフェリが殴りこみ(?)をかけてきた。

ざわめく教室のドアが開いたとたん、「トウヤ・カネモリはいま

すか？」と、現実離れた美少女のフェリに言われ、極々一般人であるクラスメート一同は氷付けになったかのように固まってしまった。

そこで、「なんか用か？」とメイエンたちが遊びの計画を立てている途中で見事に固まっているのを見て、思わず笑ってしまったトウヤはとりあえず手を上げてフェリを呼び寄せたが、つかつかと近寄ってきたフェリに有無をいわずに連れ出されたのだった。

今頃教室でどんなことが噂されているかと思うと、正直気が気でないが、目の前のどこか拗ねている様なフェリの手を振り解いて教室に戻るわけにもいかなかった。

「あー、わかったわかった。逃げないから、落ち着けて」

ぼんぼん、と頭を半ば叩く様にして撫でると、数瞬置いてから手が叩き落とされた。

「レディーの頭を容易に触るものじゃありませんよ」

「了解、お嬢様<sup>レディー</sup>」

「ふんっ」

「いたっ」

おどけて手を差し出してみると、何が気に入らなかったのか脛を蹴っ飛ばされた。

思わぬ痛みで思わず前かがみになりそうなのを堪えていると、情

けなく差し出したままだった手に、柔らかいものが絡みついた。

「フェリ？」

「今から商店街に行くんです。はぐれてしまっただけなので

「いや、手を繋ぐんじゃないめなのか？」

「私は子供じゃありません」

だから腕組という訳なのか。だが、180センチメートルあるトウヤと150センチメートル少しのフェリでは、腕を組む、というよりは抱きついている、という方が正しそうだった。

それがお人形のように可愛らしいフェリによく似合っているような気がして、トウヤの口元は自然と弧を描いた。

「？ 笑ってないで行きますよ」

「了解、商店街だったな。何が欲しいんだ？」

「貧乏人に財布は期待していません。あなたは黙って荷物持ちになっ

「うわひでえ」

「……まあ、頑張ればあなたの好きなもの一つや二つは買って上げてもいいですよ」

「あ、ほんとに？ ラッキー。ちょうど欲しい物があつたんだ。早

く行くじせ」

「それはいいですけど、ちゃんとエスコートを忘れないようにしてくださいね」

「わかってるよ」

そうして、他愛のない話をしながら、ゆっくりと、小さなフェリの歩幅に合うようにしながらトウヤは歩を進めていった。

「これなんてどうだ？」

「……そうですね、いいとは思いますがもう少しフリルが欲しいですね」

「ならこつち」

「……まあ、ぎりぎり合格点、というところでしょうか。じゃあ試着してきますので」

そう言い残すと、トウヤにポーチを預けて大量の服とともに試着室に入ってしまった。ピンクの内装の店の中で知り合いのいないところに取り残されるのは、いささか以上に寂しいものがあった。

あたりを見渡すと、自分と同じように所在無さげに試着室の前で立ち尽くしている男を数名発見。目でこの気まずさを共有し合っていると、予想以上に早く試着室からフェリが出てきた。

「どうですか？」

「似合っていていいと思うけどな……そっちはどうするんだ？」

「これですか？ 元に戻しますけど」

トウヤが指差したのは、フェリ自身が選んだセンスの良い十着近くの服。時間からしてそちらは着ていないのだろう。何故か即決でトウヤの選んだ服が選ばれていた。

「いや、あんなに時間かけてたのにいいのか？」

「別にいいですよ。この服も気に入りましたし」

トウヤの選んだ黒を基調としたシックな感じでフリルが付いている上品なドレスの端を摘みながらフェリが言った。

しかし、今フェリが言った言葉の中に引っかかるものがあった。

「……も？」

服『も』とはどういうことなのか。純粹な疑問から出た疑問だったのだが……

「……………」

「あれ？ フェリ？」

何かにショックを受けたように固まってしまったフェリの目の前で手を振ってみるも反応がない。

銅像のように固まってしまったフェリの前でどうしたものか、と頭を悩ませていると、フェリが突然復活した。

「これも買います」

「え？ これって……全部？」

「ええ」

ぴっ、とフェリが指差したのは先ほどトウヤが指差したのと同じ山だった。

確か、付いていた値札の値段に腰を抜かしそうになるものばかりだったような気がする。自分では到底手が出ないお値段だった。

「何でそんな急に」

「……何も言わないで下さい。お願いですから」

さすがにしょんぼりと、何かに落胆したかのように肩を落とすフェリにこれ以上聞くのは躊躇われた。

「あー、何があったか分からないけど、頑張れ」

「……ありがとうございます」

なでなで、とフェリの頭を撫でてやるといつものように払い除ける元気もないのか、そのまま撫でさせてくれた。

最近、どうも女の子の髪に触りたがっていると思う。いや、まあ確かにメイシエンやフェリの髪の毛は手触りがいいのだけれども……。たまに勝手にメイシエンの髪の毛に手が伸びていたりして自分でびっくりしたりしている。

彼氏でもないのに、リーリン曰く女の子の命らしい髪にべたべた触るわけにもいかないのでその度自重しているが。

フェリのほうを見てみれば、両手で抱えきれないような服の山を相手に悪戦苦闘していた。

「やれやれ……」

よいしょ、と半分以上を抱えてやると恥ずかしそうに顔を背けて、てくてくと先に進んでいってしまった。

結局、全部の荷物を買ったフェリは次に喫茶店に足を向けた。

「……で、何が欲しいんですけどっけ？」

「ああ、参考書とかその辺を。ほら、俺って頭悪いからさ」

「そうですか……」

へらり、と笑ってみると、なにかを考えるようにフェリは顎に手を当てた。

フェリは考え込んでいるようだが、口元が緩んでいる様子からそ

んな気難しいことは考えてないようだ。

「どうすっかな……」

考えるのはもちろん身近に迫った期末テスト。授業は一応聞いているものの、付いていくのでやっと。その応用のテストに手が出るとは思わなかった。

まだツエルニに来て初めてのテストなので勝手は分からないが、それなりに難しいのだろう。

このままではレイフォンと一緒に地獄の一丁目リリッソで鬼の監視の下心が折れそうになるまで勉強させられるに違いない。

ツエルニに来る前、ホテルの一室に缶詰にされたことを思い出し、トウヤの顔から血の気がさあっ、と引いていった。

あれはそれほどまでに恐ろしいものだった。特に女王様が乱入してからは体罰やら何やらも加わって……

「どうしました？」

「ん？ ああ……いや、なんでもない」

「そうですか？」

いつの間にか考え事は終わっていたらしい。フェリはいつものように眉一つ動かさないが、声と目が心配そうに揺れていた。

最近一緒にいることも多いからか、こうしたちょっとした感情の

揺れに気づけることが多くなった。巷ではフェリは冷血漢だと思われていたようだが、その実感情を出さないだけで結構感情は豊かだったりする。

周りが気づかないフェリの変化に、自分が気づけることが意味もなく嬉しくなる。

フェリと一緒にいると、何かが楽しい。

それはレイフォンやリーリン達のように兄弟同然の気安い関係とも違い、ミイフィヤナルキとちょっとした馬鹿をやるのとも違う。

これは、あの公園でメイシエンと二人っきりでいたときに感じた感覚に似ていた。

「っ……………!?!」

「ん……………熱は無いようですね」

「あ、ああ……………」

ひとり、とひんやりとした物が額に当たるのにはつとなれば、フェリが手を額に当てていた。考え事に没頭していたからか、それとも他の要因か、フェリの接近にまったく気がつかなかった。

カウンターに座っているので少し手を伸ばせば互いに手が届く。しかし、フェリはその小さな体を目一杯に伸ばしているので半ばトウヤにもたれかかる様な体勢になっている。

それに気づいたのか、さっ、といすに座りなおし、少し頬を染め

たフェリが小さく謝った。

「いや、心配してくれたんだろ？　ありがとうな」

「いえ、お礼を言われるようなことではありませんから」

照れているのか、少し他人行儀な返事を返すフェリが可愛くて、思わずなでなでと頭をなでていた。

これも案外気に入られているようで、大概フェリは数秒待つてから手を叩き落とす。今回もおそらく……

「ん？」

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもない」

今日は機嫌がいいのか、なでていても何も言われない。逆に不思議そうに見つめ返された。

なら遠慮はいらないだろう。と、思う存分にフェリの触り心地が良い髪を堪能することにした。

「今日はどうしたんだ？」

「……なにがです？」

いつもと違い、ふにゃり、と心地よさそうに目元を下げるフェリに聞いてみると返ってきたのは夢見心地のような返事だった。

「……………」

「……………」

しばらく、ゆっくりとした時間が流れる。

マスター兼学生の女性がニコニコとこちらを見ているが気にならない。なんだかとても心が満たされるような感じがトウヤを包んだ。

それはフェリも同じようで、いつものように人を寄せ付けない空気でなく、ほんわかとした空気が流れた。

カタン、と近くの客が席を立つ音でこの時間が終わりになったことをなんとなくトウヤは悟った。

「トウヤ」

「ん……………メイシエンか。どうした？」

特に苦手な英語の音波攻撃に屈し、机と同化する勢いで沈み込んでいたトウヤは控えめながら良く通るメイシエンの声に反応してむっくりと体を起こした。

「あの……………お弁当」

「……………ああ、そうか」

もう昼だったか、と時計を見て始めて気がついた。既にいつもの二人の姿はなかった。

薄情な幼馴染を虚空に捉え、恨みがましい目で睨み付けているトウヤに、メイシェンがおずおずと手に持っていた昨日と同じお弁当を差し出した。

レيفونとは違い、ここまでされて気づかないトウヤではない。数瞬、弁当を見つめると笑顔で受け取った。

「サンキューな」

「う、ううん。……………あの、私も一緒に食べて良い？ ミイもナツキもいつの間にかいなくなってる……………」

「……………なるほどな」

「えっ？」

「いや、なんでもない。一緒に食おうぜ。飯は一緒に食ったほうが旨い」

「あ……………うんっ」

理由は分かるが（おそらく訳も分からずリーリンに連れ出された）、嫌がらせに今日の夕飯はレيفونの唯一苦手なナットウを出してやるぞ。とトウヤは笑みを浮かべながら心の中で晒っていた。

「…………あれ？」

「え？」

席をくつつけて、早速目の前の美味しそうな弁当に齧り付こうとした時、メイシエンの肩越しに最近良く見ることになった銀髪を見かけた。

「…………何をやってるんですか？」

「え？ いや、メイシエンが弁当作ってくれたから食べようと思っただけだけど…………」

「っ……………そうですか。なんでもありません、忘れてください」

「「?????」」

フェリは一瞬、メイシエン手作りの弁当を睨み付けた。

「アントーク先輩が放課後、武道館に呼んでいたと、兄が言っていました」

「……………ん、了解。いつも言ってるけど、わざわざフェリが来なくてもいいって」

思わず、それだけ？ と口を突いて出そうになった言葉を、何か葛藤しているようなフェリの様子を見て呑み込んだ。

代わりに、こういったカリアンからの伝言をいつも持ってきてく

れるフェリを気遣って来なくてもいい、と言ったがそれはどうやらフェリの機嫌を損ねるものだったようだった。

「っ、そうですか。では、自分から会いに行かせますね」

「あ、ちょ………?」

「失礼いたします」

つかつかと去って行くフェリの行動がどうにも掴めず、その背に向かって苦笑を漏らした。

「トウヤ………?」

自分はそんな酷い顔をしていたのだろうか。心配そうに覗き込むメイシエンに笑いかけると、再び箸を取った。

「いや、心配ない。早く食っちゃおうぜ」

「う、うん」

やっぱりメイシエンのお弁当は美味しくて、一口口に含むと自然に口元が綻んだ。

「うん、うまい」

「そ、そう? よかった」

ずいぶん軽くなった気持ちで笑いかけると、メイシエンは安心したように小さく微笑むと、自分の小さなお弁当から卵を一口口に運

んだ。

はむはむと小動物的な可愛さを見せ、メイシエンは弁当を食べていく。

みんなで食べる騒がしい昼もいいけれど、こういったお昼もまたよかった。

メイシエンと静かに談笑しながら、今度フェリに会ったときは今日のことをそれとなく聞いてみよう、と思った。

第十一話『過ちて改むるにはばかりことなかれ』（後書き）

どうでしたか？ 十一話、投稿いたしました。

文中に出てきた『冷血漢』。フェリは女の子なので冷血女？ と思いました。冷血漢であっていたようです。はてさて、私と同じように思っていた人はいるのでしょうか？

さて、本文の内容に入りましたが、買い物で二時間かけてしまいました。フェリの心中や感情の変化など、頭の中では形になってはいるのですが、言葉にすると上手く伝わらないものですね。

少しずつ自分の中のトウヤを認めつつあるフェリと、トウヤにアプローチをかけるメイシエン。原作ではどちらもとても魅力的なヒロインですが、ここからだんだんと二人も変わっていきます。

お人よしといえば優柔不断。良い所でもあるけれど悪いところでもある。幸い鈍感スキルは無いトウヤですが、この先どうなるか？ 乞う御期待ください。

第十二話『好事魔多し』（前書き）

国立、合格できました。

暖かい応援をしてくださった方々には無上の感謝を。

## 第十二話『好事魔多し』

トウヤはぽりぽりと、朝メイシエンが余ったから、といって好意でくれた焼き菓子を齧りながら校庭を歩いていた。

胸ポケットには「果てし状」と表に書かれた封筒が納まっていた。「果たし状」はグレンダンでよく来たけれど、「果てし状」なんてものが来たのは初めてだった。

行く必要はまったく無いのだけれど、平仮名すら間違えるようなのはどんな奴だろう、と半ば好奇心で校舎裏に向かっていた。

「……来たな」

「……はあ」

まあ、予想はしていたけれど、そこにいたのは既に錬金鋼を復元させた状態で構えている上級生の武芸科の先輩が七人。

誰しもがトウヤのことを鬱陶しそうな目つきで睨んでいた。

「……面倒めんどくさ」

「てめえ、今自分がどんな状況にいるのか分かってんのか!？」

「あー、はいはい。分かってますよ」

てめえは手前からきていて、自分を下に下げる謙遜語だったようだな……と、今日国語で習ったばかりの知識を頭で反芻していると、

頭に血を上らせた一人が我慢しきれなくなったのか、トウヤの胸元に伸ばしてきた。

その手を自然に弾き、張り手を顎に掠らせて昏倒させた。

「……なっ!?!」「」

反応すらできず崩れ落ちて行く仲間を啞然と見つめる先輩らをさも面倒だと睨め付けたトウヤは素手のまま軽く挑発した。

「どうせ僻みなんでしょう? あんたらなんか付き合ってる暇は無いんで、さっさと来て下さい!」

「」「」「」「」「う、うおおおおお!!」「」「」「」

「ふう……」

ぱんぱん、と汚れてもいない手を叩きながら用具倉庫から出てきたトウヤは、すぐそばに見知った三人がこちらを見ているのに気がついた。

近くに気配は感じなかったから二階か三階の窓からでも見ていたのだろうか。

「ありや……見てたか？ 今の」

「う、うん」

「いやー、圧倒的だったねー。スカツとしたよ」

メイシエンは覗き見をしていた自責の念からか小さくなり、ミイファイはしゅっしゅっ、と興奮気味にシャドーをしている。

と、そこで気まずそうに頭をかくトウヤに、厳しい顔で腕を組んでいたナルキが口を開いた。

「しかし、あそこまですることは無かったんじゃないか？ トウヤ」

「ん？」

「いくらなんでも錬金鋼を持たない相手に複数人で挑んで手も足も出なかったでは、あまりにもあの先輩たちが惨め過ぎる」

「……ああ、そっか」

「ここで、ようやくナルキがトウヤの行動を咎めていることに気がついた。」

「え……で、でも最初に手を出したのはあの人たちだよ？」

「そうそう。いい気味じゃない」

「いや……確かに悪いのは先輩方なんだけどな。矜持きょうじというかなんというか……」

「ま、要するに相手の顔を立てながら平和的解決をした方が良いっていつんだらう?」

ナルキの言いたそうな事をとりあえずまとめてみると、案の定ナルキはうなずいた。

それに、トウヤに賛同していた二人もああ、なるほど。と理解したようだった。

「これからの学校生活もあるし、なるべくそういう不祥事は起こさないほうが良いと思うのだが」

「ま、そりゃそうなんだけどな……」

得てしてああいうタイプはしつこいのが相場なのだ。というか口下手なトウヤやレイフォンでは、下手に出ているつもりでもいつの間にか相手が剣を振り上げていたりすることもあるので手に負えない。

結局、二人が一番手っ取り早い拳で解決するのに統一するのにその時間はかからなかった。

「それに、周囲の者はいつ仕返しが来るか気が気でなくなる」

「そ、そんな……私は別に気にしないよ」

「……あ、そっか」

弱肉強食が当たり前なグレンダンでは一度力尽くで黙らされたら

なかなか歯向かってこないものだが、ここはグレンダンではないのだ。

そんな当たり前のことにようやく気がついたトウヤは素直に頭を下げた。

「悪かった。そこまで頭が回らなかった」

「いや、気を付けてくれさえすればいいさ」

本当に気にしていないかのようにナルキが軽く手を振ってこの話題はおしまい。すぐさまミイファイが新たな話題を持ってくる。

「ね、ね、どうせトウヤも暇でしょ？」

「ん、まあな」

「んじゃ、遊びに行こう！」

「やっぱりな……」

いえーっ。と拳を天に突き上げて意味もなく叫んだミイファイに苦笑を一つ。

しかし、決して嫌なわけではない。ミイファイたちと一緒にいれば自然と笑顔になれる。なんとなく楽しい雰囲気伝わってくるミイファイに、落ち着いたナルキ。メイシエンの小動物的な仕草にはこちらも癒される。

メイシエンの気持ちは……うつすらと自覚はしているが、自分の

中ではまだ答えは出ていない。メイシエンもこちらが答えを出すことを望んでいるわけではないようなので、今のぬるま湯の様な心地よい関係をもう少し続けていきたいと思っている。

それに、フェリのことにも心に強く引つかかっている。どちらもツエルニに来て出来た大切な友人。もちろんナルキやミイフィも大切なのだが、この二人は特にトウヤの心の中に強く入って来ていた。

「おいミイ、遊びに行くのはいいが、どこに行くかは決めてあるのか？」

「な〜に言ってるの。それを今からみんなで決めるんじゃない」

「……そうだな、お前はそういうやつだった」

手を額に乗せ、ため息を吐いたナルキに、苦労人だなあと苦笑してしまう。隣のメイシエンも同じようなことを考えていたのか、お互い顔を見合わせて小さく笑いあった。

「ほら、ナルキがさっさと考えないから二人がいちゃつき始めちゃったじゃんか」

「え、ええ！？　そ、そんなことしてないよ〜」

そして、メイシエンがミイフィにいじられるのもいつものこと。ナルキはいつものようにそれを楽しそうに傍観していて、助け出す気配はない。

と、いうことは目につけば涙をためてこちらにSOSコールを発信しているメイシエンを助けるのはトウヤしかいなかった。

「ほらほら、さっさと行く場所決めないと日が暮れるぞ」

「あ、そうだったね。……うん、どうする？ あ！ ほら、38号区の喫茶店。あそこいい感じだったじゃない？」

「そうだな。行ってみるか」

「う、うん」

貴重な放課後は、あつという間に過ぎていく。それを理解している三人はすぐに場所を決めてしまうと、トウヤの腕を引っ張りながら目的地に駆け出した。

ふと、トウヤたちが通り過ぎた校舎のどこかの教室のカーテンが風に揺らされ、一瞬捲り上がった。

「……………」

そこから、桃色の燐光を垂れ流しながら四人を見つめている影があったことに、誰も気づかなかった。

太陽が沈み、静寂が支配する夜。

大きな三日月が夜空を照らす中、トウヤは珍しく一人で歩いていった。

今日はたまたま機関部清掃が早い時間に終わっただけ。レイフォンはどうやら別の場所をやらなければならなくなったようで、一人先に帰らせてもらうことにした。

「はあ……」

なかなかいい雰囲気の夜道だが、トウヤの口から出るのは憂鬱なため息ばかり。

疲れているわけではない。機関部清掃のバイトの間、ちょっと活剋を流せば数時間くらいどうってことはない。ただ、トウヤの心に暗い影を落とすのはある少女のことだった。

何がなんだかわからないまま喧嘩別れのようになってしまったのは、おそらく自分が何か不用意な発言をしたからであろう。意味もなく怒るような子ではない、はずだった。

あれから暇になったら都市の外延部に行ってみたり、高いところに行ってみたり、カリアンを尋ねるついでに家に行ってみたり、と考え付くことをしてみたが、相手は天剣クラスの念威操者。こちら

の行動はすべて先読みされているかのように一度も会うことは出来なかった。

それはよく考えてみれば四六時中フェリの念威がトウヤのすぐ傍にある、ということなのだがなぜかそこまで頭は回らなかったようだ。

しかし、諦めようかと思ったとたんあの銀髪が視界の隅を掠めていくのだから、諦めようがない。

まるで気難しい猫のようだ、とトウヤは思った。

「どうしたものか……な」

彼女との会話やじゃれあいは存外トウヤも気に入っていたので、それがなくなると結構さびしいものだった。

ふと、見覚えのある念威端子が視界を掠めた。

「っ、……っ、待てよ！」

ひらひらとトウヤを誘うように路地裏に消えていった端子を追いかけると、すうっと頭上に昇って行った。

内力系活剽で一瞬のうちに足を強化して一度の跳躍で五階建ての建物を飛び越え、ひらひらと踊るようにどこかへと飛んでいく端子に着いていく。

何故だか知らないが心が沸き立つ。童心に帰ったかのように夢中で端子を追いかけていると、いつの間にか農業科のホームグラウン

ドでもある、郊外に鬱蒼と生い茂る森の中に飛んで行った。

「ここか……？」

それにしても、なんてべたな誘い方だろう。いや、フェリらしいんだけど。とトウヤの口元は緩んだ。

道中は月の光すらとどかないようなたっぷりの葉を茂らせた木々を掻き分けた奥のさらに奥。

内力系活剽で目を強化しながらまっすぐ念威端子を追っていくと、少し開けた広場に出た。

「……へえ」

思わずため息が漏れた。

農業科の生徒が戯れに作ったのか、色とりどりの花々が中央から同心円を描くように広がり、中心に行くまでに一本の道が出来ていた。

探し人はその中央にいた。

月光をその長い髪から発光する淡い燐光で中和し、その美貌を月に向けてトウヤに背を向けていた。

それはトウヤが知らず見惚れてしまうほど。月夜の花畑に立つフェリはそれほどに絵になった。

「……お久しぶりですね」

「そう……だな」

にこり、と振り向いて自然な笑顔を見せるフェリに、なぜか動揺することなく笑い返す事が出来た。

月夜に照らされ、小さく微笑むフェリはぞくぞくするほどに美しくかった。

「……降参です」

「ん？」

「この数日間、あなたと会わずにいただけで私は……」

「……フェリ？」

振り返ったフェリの顔は穏やかに笑っていた。

「知ってますか？ 私は、私で居たかった。ただ、それだけ。それを叶えてくれたのは、貴方だけなんですよ？」

「……意味が、分からない。フェリはフェリだろう」

なんでもないことを口にしたはずなのだが、フェリは笑みをいっそう深くした。

「私に向かって真摯に言葉をかけてくれたのって、ここ最近では貴方だけだったんです」

「そうなのか？」

「ええ。稀代の念威操者。生徒会長の妹。富豪の娘。そんなフィリターをかけられた視線なんてもううんざりです」

口を尖らせて拗ねたような顔をしたフェリは再びくるつとトウヤに背を向けると月に向かって手を伸ばした。

「ずっと思っていた。ずっと願っていた。私を私と見てくれる人がいつか現れるだろうって。」

でも、本当に現れるとそれを認めたくなくって、ずっと心で否定していました」

フェリの言葉はどこか統一性がなかった。まるで思っていることをそのまま言葉にしているようで、話が前後したりしたが、今フェリが話しているのは、紛れもなく彼女自身の本心であることはトウヤにも伝わってきたので真剣に耳を傾けた。

「でも、否定して逃げるのはもう止めにしました」

くるつとまた振り返ったフェリのブリーツスカートの裾がふわっと広がった。

「私は、自分の心に少しだけ、ほんの少しだけ正直になることにします」

さくつさくつ、と土を柔らかく踏み碎いてフェリが木陰にいるトウヤの元に歩いてくる。

それは、絵画の中のお姫様が抜け出してくるようだった。

トウヤの目の前で立ち止まったフェリはぐっ、と背伸びをするとトウヤの首に腕を絡めトウヤを引き寄せた。

「……ん」

「っ！？ ……ぷはっ、フェリッ！？」

「ふふ……」

ぺろり、と舌で唇をなぞったフェリは満足そうに微笑むと絡めた腕を解くとトウヤの胸に額をくっつけてきた。

「こんな美少女にここまでさせたんです。 ……分からないと言ったら、蹴っ飛ばしますよ？」

「う……答えは、ちょっと待ってくれないか？」

「む……メイシェン・トリンデンとやらですか」

「それもあるんだけど、今までそういう対象でフェリを見てなかったというか……悪い」

「……時間が欲しいというわけですか」

「ま、そんなとこかな……いてっ」

気まずそうに頬を掻くトウヤの脛を蹴っ飛ばしたフェリがすつと体を離れた。

「まあいいでしょう。ならば貴方が私から離れられなくすればいいだけの話です」

「おいおい……」

自信有り気な顔でにやりと笑われては、背筋に薄ら寒いものが通るのを禁じえない。

脱力して肩を落とすトウヤに、フェリはさらに声をかけた。

「まあ、優柔不断な貴方から今すぐに答えがもらえるとは思っていませんでしたから。気長に待ちます」

くるり、と振り返ったフェリの長髪がトウヤの頬を撫でた。

「でも、忘れないくださいね？ 女の情熱は、なかなか冷めることがありませんから」

そう言っつて、振り向き様に人差し指を口に当てて笑っフェリは、心を奪われるほどに美しかった。

トウヤがそれに見惚れながらも返事を返そうとしたその時だった。

「まあ、近いうちに答えは出せるようにすっ……！？」

「きゃっ」

ぐらり、と世界が揺れた。

経験が豊富なトウヤはすぐさま都震だと気づき、腰を落として身

構えたがフェリはそういうわけにもいかない。外延部に近いここは揺れの影響も大きく、最初の縦揺れでフェリの体は宙に投げ出されていた。

「くっ……！？」

内力系活剽で体を強化する暇も無い。自身の身体能力だけで2、3メートル跳躍したトウヤは空中でフェリを捕まえることに成功した。

しかし、無理な跳躍でトウヤは体制を崩していた。フェリを抱えているので受身を取ることもしかない。内力系活剽で体を強化しつつ、衝撃に備えた。しかし

「ぐっ……」

都震はまだ続いている。地に足をつけていないトウヤは、地に付く瞬間に起きた横揺れで意図も簡単に横方向に吹き飛ばされ、木に背中を強く打ち付けた。

「トウヤ！」

それでもフェリを抱きかかえる力を緩めることはしない。即座に体勢を入れ替えてフェリを下にするように庇った。揺れで地盤が緩くなったせいも、周りの木々が次々に倒壊していく。

「ぐっ、ふうっ……」

背中に数十枚の重みが押し掛かる。潤沢な水分を啜った木々は重く、いくら内力系活剽で強化しているとはいえ、体中の骨がぎしぎし

しと軋みをあげていた。

「ぐっ……はぁっ」

がくがくと支える腕が振るえ、まず膝が落ちた。次第に腕もゆっくりと下りていく。

驚愕と恐れで目を見開くフェリの顔がどんと近づいてゆく。

だめだ。

せっかくフェリと仲直りできたのに、ここまでなんて、我慢できなかった。

「ぐ、ううう……」

ぎし、ぎし、とフェリの頭上の木が音を立てながら押し戻されていく。

今、真っ暗なはずのこの狭い空間は眩い光で満たされていた。

「トウヤ……」

生きる意志、守りたいと願う心。トウヤの強い意志に呼応して、剽が活性化する。

トウヤが賞賛したニーナの力強い剽の輝き。フェリの目にはそれよりも数段輝いているように思えた。

そのあまりの剽の量に、直接危害は無いのにフェリの体に凄まじ

いプレッシャーがかかる。汗をだらだらとかいているフェリに気づいたのか、トウヤが申し訳なさそうに顔をゆがめた。

ああ……なんて

フェリの胸に暖かいものが湧き上がる。このどうしようにもないお人よしから目が離せない。つい先程まで苦しく感じていた剽はもはや感じない。いや、感じているがそれをフェリ体は受け入れていた。

またしても胸が苦しくなる。トウヤが今必死でがんばっているのに不謹慎だとは思うが、この感情の発露を止められない。

ただ、暖かい何かがフェリの胸を満たしていった。しかし、それと同時に燃え上がるような欲求がフェリの身を支配していた。

その欲求に耐え切れず手がぶるぶると震える。自分の節操の無い体に嫌悪しながら、ありつたけの精神力でそれを押さえ、手を伸ばした。

「フェ、リ……？」

その滝のような汗が流れ落ちる頬に手を添える。汗が手を伝って降りてくるがまったく気にならない。

「がんばって」

「……ああ！ 頑張っで見せるさ」

フェリが声をかけたとたん、剽の煌きがよりいっそう強くなった。

まるで超新星のごとき圧倒的な光の奔流は、一瞬フェリの視界を支配した。

第十二話『好事魔多し』（後書き）

三日ぶりでしょうか？ takayaです。

無事、国公立に合格することができました。アパートの手配や大学の用意など、ごたごたしていますがそれでも時間はあるので週二、三のペースを守っていきたいと思います。

さて、合格したテンションで思うがままに書いてしまいましたが……前半がなんじゃこりゃ？ というものに。後半も、まさかここでフェリが告白するとは……と、私自身驚きを隠せません。

まあ、トウヤはお人よしが必要持つている優柔不断スキルを余すことなく装備しているのだから決まりませんが。むしろヒロインが増えそうです。このままいくとハーレムルートまっしぐら！なんてことになりそうです。

皆さんは許せますか？ Yes or No でお答えください。

第十三話 『疾風に勁草を知る』 (前書き)

難産でした……。更新が遅れ、すみません。

中盤あたりまでは原作とそこまで変わらないので読み飛ばしていただいても結構かと。

### 第十三話 『疾風に勁草を知る』

「あれ……？ 隊長？」

「ん？ レイフォンじゃないか」

トウヤと別れ、初めての他人とのシフトに緊張しながらレイフォンが向かった先には、見知った顔があった。

どんな人が来るのだろう、と内心とても緊張していたレイフォンはほっと肩の力を抜いた。

「そうか、とても優秀な新人が二人いると言っていたが、お前らのことだったのか」

「あ、多分そうです」

事実、周りの新人があまりのキツさで次々にやめていく中、レイフォンとトウヤはその空いた穴すらフォローしていたのだった。

今日のトウヤの早い切り上げだって、働きすぎだと判断した班長が無理やり帰らせたからだ。

ちなみにレイフォンの休みは明後日の予定だそうだ。

「そうか。バイトをしているとは聞いたがどこかは聞いていなかったな。どうだ？ 機関部清掃に、少しは慣れたか？」

「あ、はい。こういう単純作業は嫌いではないので」

「そうか。では、今日私たちが任されているのはここから ー」  
だ」

かさり、とニーナが懐から取り出した地図を広げて指を走らせる。

その範囲はいつもトウヤとやっているのとあまり変わらない。むしろ少ないくらいだった。ただ、やる位置がいつもよりも下層部で、やはり上級生は信頼されて任されているんだろう。と思った。

「気をつけるよ。特にこのあたりのパイプを壊したりすれば1ー1  
2号区の寮で水が使えなくなったりするからな」

「あ、はい。気をつけます」

「よし。早速取り掛かるか」

「はい」

「よし、よし、とブラシが硬い鉄の床を滑る音だけが広い機関部に響いていく。

無駄話をしたということが余り無く、上級生で隊長のニーナにレ  
イフォンは話しかけられず、黙々と作業していた。

いつもトウヤとは無駄話をしながらしているのでいつもよりも効率は良さそうだ。この分なら結構早くに終わるな。と頭で時間を計算していると、それまで沈黙を保っていたニーナが口を開いた。

「なあ、その……レイフォンは、グレンダンでの最強の一人の天剣授受者というものなのか？」

「誰から……カリアンさんか」

まったく、あの人は……と少し痛んだ米神を揉み解した。あまり人のプライバシーを吹聴しないでほしかった。

「それで、何らかの不祥事でグレンダンを追い出されてここに来たとか」

「ちらり、とこちらを盗み見るニーナは嘘であってくれ、と願っているようだった。」

しかし、レイフォンの心はすっと冷えた。苦笑していた顔から表情が抜け落ちる。

「……ええ、そうですよ」

驚愕に顔を染めるニーナを、どこか遠いところから見下ろしているような気分になりながら話を進める。

「僕は孤児院出身です。孤児院は貧乏でした。必ず何人かは年を越せないほどに」

「なっ……」

「別に家が特別だったわけじゃない。トウヤのところも似たようなものだったし、他のところもみんなそう」

「……………」

以前、ハーレイからニーナはいいとこのお嬢様だと聞いたような気がする。おそらく食べ物に困ったことなど無かったのだろう。

別にそれを恨むわけではない。お門違いも甚だしいし、何より意味が無い。

「師匠に武芸の才を褒められた。ならこれで食べていこうと思った。食べるために修行して、食べるために試合に出てお金を稼いだ。武芸は好きだったけど、何よりの目的はお金を稼ぐことだった」

「なっ…………それは!」

「何がだめなんです？ 武芸は天から送られた贈り物。確かにそうなんでしょう。僕たちは剽脈を手に入れた時点で人間ではなくなっているのだから」

「何を言っ……………」

「だけど、僕には孤児を、家族を救うためにたくさんのお金が必要でした」

お金を稼ぐために大会に出て、とにかく高額なものに出続けていた。幼馴染のトウヤとは同じ大会に出ないように注意はしていた。勝てないかもしれないから。

練習では一進一退だった。レイフォンは自分が天才だと自覚している。そして、同年代で自分と同じ位階にいるトウヤも同じ天才なのだ、と子供ながらに理解していた。

そして、勝利に勝利を重ねると、いつの間にか天剣授受者決定戦なんてものに出場していた。

結果的には自分が勝ったけれど、ほんの少し何かがずれていたら分からなかった。自分はあの時絶好調だったけどトウヤがそうだとは限らない。自分の調子がほんの少しでも崩れていたら、ほかはともかくトウヤには確実に勝てなっただろう。

レイフォンは武芸に関しては自身家だが、冷静に自身の力量を客観的に評価することもできた。

「そして、試合に出続けるうちに知っただんです」

闇試合の存在を。

とたん、眉に皺を寄せて嫌悪を顕にするニーナを見ても、レイフォンは何も感じなかった。武芸者はほとんどが同じ反応だったからだ。

武芸者の多くは武芸を神聖なものだと認識している。

しかし、神聖なものだからこそ穢したいと願う人は多い。

そのための闇試合だった。

「だけど、所詮は長く持ちませんでした。すぐに僕が出ていることは人々に知れ渡り、結果僕は放逐されました」

「だろうな」

嫌悪も顕に言い捨てるニーナをレイフォンは何の感情も宿していない瞳で見つめた。

その感情はレイフォンも受け慣れていた。武芸者でそれをしなかつたのは幼馴染でレイフォンと同じく武芸を手段と考えていたトウヤと天剣の中でも破天荒なメンバーたちだった。……さすがにティグリスら古株には苦い顔をされたが。

別に、今ではその感情が理解できないというわけではない。ただ納得できないだけで。

トウヤとリーリンに教えられ、人は異端な考えをするものを嫌う傾向にあることを知った。ならば自分は異端なんだろう。そして、そんな自分を理解し、あまつさえ受け入れてくれるリーリンやトウヤはかけがえの無い存在だ。

二人がいなければ自分は今ここにしっかりとした考えを持って立っただけだろうか。答えは否。

もはや二人がいない生活などレイフォンは想像もできなかった。依存とも考えるが、最早それがどうした、と開き直っていた。

「でも、僕は今でも悪いことをしたとは思ってません」

「なに？」

柳眉を逆立ててこちらを睨むニーナに静かに言葉を重ねていく。

「確かにやり方は間違っただけでしょう。だけど、間違っただけでも、数百の孤児を救うことができた。この結果だけは、悪いことではない。間違っただけ。と認めています。」

まあ、やり方が悪かったことは少し反省してますけど」

「……………そう、か」

ニーナは長い沈黙の後、ゆっくりと頷いた。

「確かにお前は一度間違っただけだろう。しかし、今ではしっかりと前に進んでいる。なら、それでいいと、私は考える。」

……………リーリンとトウヤを、大切にするんだぞ、レイフォン」

「……………はい」

微笑むニーナにレイフォンが強く頷き返した次の瞬間、二人を強い揺れが襲った。

「はあっ、はあっ、はあっ……………」

「大丈夫ですか？ ほら、横になって」

耳元で聞こえるフェリの声に従ってごろり、と横に倒れる。

横顔を柔らかい感触が覆ったがそんなことを気にしている余裕は無かった。

「はあっ、ふうっ、……はあ、はあ」

活剏をゆつくりと強めていき、体の疲労を吹き飛ばす。息が整い、滝のような汗が止まるころには頭を優しく撫でられていることに気がついた。

「サンキュー、フェリ」

「いえ、私に出来ることといえば、これくらいですから」

そっか、と返し、寝心地の良いフェリの太腿の上で軽く寝返りを打ってフェリの顔を見れるようにした。

やさしく微笑んでいたフェリの顔が一瞬こわばり、次いで赤くなつた顔をぷいっと逸らした。しかし、頭を撫でる手は止まっていな

い。  
限界ぎりぎり、というか一瞬限界を突破したかもしれない。最後の衝刺は錬金鋼を持ってなかったので制御はばらばら、狙いが甘くてフェリを傷つけないようにするので精一杯だった。

「まったく、私を放っておけば無事ですんだというのに」

「そりゃそうだけだよ、そうしたらフェリは今頃死んでたぜ？　そんなの、俺は嫌だったからな」

「だからといって貴方まで死にそうな目にあうことも無かったでしょうに」

「まあ、そりゃそうなんだけどな。フェリが危ない、って思ったら体が勝手に動いてたんだよ」

「……………」

首がみしみしと音を立てそうなくらい限界まで顔を逸らしているフェリを見上げながら、トウヤは軽く目を閉じて、反動をつけて起き上がった。

「あつ、まだ……………」

「もう大丈夫だ」

その言葉に嘘は無い。汗も止まり、息も普段どおり。体に疲れも残っていない。……………いつでも戦える。

心配そうな目で見上げてくるフェリの頭を撫でて、トウヤはフェリのことを横抱きに抱き上げると、倒れた木々が散乱する森の中を街のほうへと走り出した。

「ト、トウヤ？」

「おかしいな……………？　非常召集がまだかからない」

「非常召集？」

「ああ、急いでフェリもシエルターに入らないと。もたもたしてればあいつらが来る」

「あいつら？」

話を通らないフェリにやきもきしながら、トウヤは自身にとって当たり前的事实を口にしようとする。

次の瞬間、けたたましいサイレンと放送がかかった。

第一種警戒態勢及びに武芸科の生徒の招集。これが意味するのはつまり……

「汚染獣だよ」

「っ！？」

ぎちぎちと嫌な音を立てながら、幼生体がツエルニに向かっていった。

「少し遅くなった。悪いなカリアン」

「トウヤか。助かったよ」

フェリをシエルターの前まで送り届け、そこから中央にある生徒会室まで、途中でハーレイに設定してもらった鋼糸を使い文字通り一直線にやってきたトウヤ。

他の建物と数十メートル離れているのにいきなり尖塔の天辺にある生徒会室の窓から入ってきたトウヤにその場にいた武芸長や錬金科の代表は驚きを隠せないようだが、カリアンだけが予想していたように、ほっと一息ついた。

「では指示通り頼むよ」

「あ、はい」

ばたばたと慌しく駆けていく上級生を見送ると、カリアンはトウヤに向き直った。

「念威操者総出で数えたところ、幼生体が3853体だそうだ。今武芸科の生徒が応戦しているが、正直戦況は良いとは言えない状況だ」

「だろうな」

「どうやら小隊員以外は3、4人でグループを作ってようやく一体を仕留められるぐらいだそうだ。前情報ではここまで苦戦すること

は無かったのだが、な」

「あー、それは、まあなんとというか……」

じろり、と責める様に見てくるヴァンゼに、トウヤは肩を竦めるしかない。

確かに、幼生体は動きが直線的で、鱗ももろくて楽な相手であると言ったのはトウヤだが、それは老性体に比べて、だった。

老性体の鱗を鋼鉄だとすれば、幼生体の鱗なんてまるで泡のようには感じられないので、そう言ったのだが、今更ながら比較対照が間違っていたことに気づいた、などとは言えない。

「それはともかく、だ。ヴァンゼには至急前線に向かってもらいたい。東側が特に苦戦しているようだ」

「了解した。すぐに向かおう」

ぱっ、と立ち上がったヴァンゼが早足で生徒会室を出て行った。

「さて、後はレイフォン君を待つだけなのだが……」

「遅くなりました!」

「いや、良いタイミングだ」

カリアンはレイフォンが駆け込んでくると、すぐさま状況の解説を始めた。

「どつやら雌性体というやつの中にも足をついでしまったよ  
うだね。今は幼生体に囲まれている状況だ。」

さらに悪いことは、それに呼応して周囲に居たらしい三体の雌性  
体の動きも活発化してしまつたらしい。先程入ってきた情報だけで  
も3853体。巣穴からはまだまだ物凄い勢いで出続けていると聞  
いている」

一般的な武芸者にとってはどう考えても絶望的な状況に、二人は  
眉を動かすことなく頷いた。

「当然、士気にかかわるので前線の生徒には伝えていないが、死傷  
者が出る前に終わらせてしまいたい。そこで、二人の力を借りたい。  
いいかな？」

「もちろん」

「分かりました」

カリアンは迷い無く頷く二人を頼もしそうに見ると、用意してあ  
つたのだろう。都市外装備を机の下から引っ張り出した。

『トヤ。僕は西とみな を担当するから、トウヤはひが と た をお願い』

「了解。全部やる必要は無いんだ。気楽に行くぞ」

『分かつ る』

念威操者の補助を受けているが、音質が悪すぎる。しかも肝心なところが聞こえなかったりする有様だ。

こういつところであつてつくづくツェルニの、いや学生の武者のレベルの低さを感じさせられる。

幼生体にしたって普通の都市なら、たとえトウヤたちぐらいの年齢であつても少し才能がある程度で普通に戦えるのだ。上級生すら苦戦すると言われても困るしかなかった。まあ、普通は才能のある武者を他の都市に行かせようなんて考えないので仕方ないといえは、仕方ないのだが。

今、トウヤは生徒会室がある一番高い尖閣と対になるように立っている尖塔の、東側の頂上に立っていた。

西を見れば同じく錬金鋼を待機モードのままにしてあるレイフォンの姿が見える。

ふと、下の状況を見るがまだ退避は完了していないようだ。まあいきなり言われても確かに訳が分からないだろうけど。

「それにしても、窮屈だな」

動かすたびにぎしぎしと軋む都市外装備を見下ろしてため息を吐いた。平和な都市だったのだろう。まったく使われていないことが丸分かりだし、グレンダンではもう遙か昔に使われていた型のものだった。

それがいいことなのか悪いことなのかは判断しかねる。それでも、平和ボケするのと、気の休まる暇も無く戦つのを選べと言われれば、平和ボケするほうをトウヤは選ぶ。

数キロメートル離れたここからでも確実に動かせる数本の鋼糸で見える限りのところにいる危なそうな生徒をちよくちよくと助けていると、耳に聞こえないはずの音が鮮明に届いた。

『まったく、本当にお人よしですね』

「……………フェリ?」

どうして。シェルターにいるはずでは。と疑問を口にしかけたところで、急に視界が広がった。すべての映像が鮮明になり、耳に入ってくる言葉がクリアになり、すごく聞き取りやすくなった。

「フェリ?」

『考えて、考えて、考え抜いて結論を出しました。私は、利用されるのではなく、貴方のためにこの力を使います』

「そっか……………ありがとな」

フェリが自分なりに少しでも前に進めたようなので、トウヤはうれしかった。

『いえ。後、これはサービスです』

「ん？」

『う、わ。トウヤ！ そっちはどう？ こっちはなんか凄いことが起きたんだけど！？』

まるで耳元でしゃべっているかのように鮮明に聞こえてくる親友の声を聞いて、トウヤはもう一度フェリにお礼を言った。

「それ、フェリのおかげだから。後で感謝しとけよ」

『え？ カリアンさんの妹さん？ うっわ、凄いな。デルボネ様クラスだよ』

ここで比較対照に天剣を出しても遜色ないというあたり、確かにフェリの念威は物凄い。

そして、どうやら戦場のほつも退避が完了したようだった。

「行くぞ、レイフォン」

『いいよ。じゃあどっちが多く倒せるか勝負だね』

「上等。フェリ、サポート頼む」

『あ、ずるっ』

耳元で聞こえるレイフォンの声を無視して、トウヤは一足先に尖

塔から飛び降りた。

第十三話 『疾風に勁草を知る』 (後書き)

たくさんのご感想、ありがとうございます。

ハーレムはNOという意見がたくさんありました。まあ正直私の力量だと一度に動かせるのが三、四人なので、結局ヒロインは一人に絞るか、もしくは二人ぐらいだと思います。

#### 第十四話『蹂躪』（前書き）

お久しぶりです。と言っても分かる方は居られないと思います。一年ほど前にこの作品を投稿させていただいていたものですが、おめおめと戻ってまいりました。錆落としから入ることになりますが、生暖かい目で見守っていただけると光栄です。

## 第十四話 『蹂躪』

戦場に飛ばした念威端子から送られてくる情報をフェリは信じられない気持ちで整理していた。

兄から聞いた3853体の汚染獣は、二人が戦い始めたころには6208にまで膨れ上がっていた。あまりにも絶望的な状況。事実、外延部にまで非難した武芸科の生徒たちの顔は絶望一色で塗りつぶされていた。

「レストレーション02」

耳元で二人の声が聞こえる。何の気負いも無く、淡々とした声。

そして、落下途中の二人が軽く腕を振った瞬間、信じがたい出来事が起きた。

「……え？」

汚染獣のマークにしていた赤い点が二箇所ごっそりと欠けた。

それからも加速度的に殲滅速度は上がっていく。

念威端子からは、戦場を何か糸のように、いやそれよりもまだ細い何か縦横無尽に暴れまわっている情報が送られてくる。それが皆があれだけ苦労していた幼生体の外殻を熱したバターを切るかのように容易く切り裂いていく。

視覚映像で見る気にはなれない。先ほどちらりと見た映像はフェ

リのトラウマを十分に刺激するものだった。

初めての汚染獣戦。十になったばかりで戦場に狩り出されたフェリは、そこで地獄を見た。

相手は雄生体三期が5体。普通の都市ならまあ、そこそこの被害は出るだろうが無事に撃退できる相手であった。それはフェリの故郷流易都市サントブルグでも変わりはなかった。

しかし、温室育ちの十歳の少女には戦場の風景は厳しすぎた。

頭が弾け飛んだ死体。自分に声をかけてくれた人が食われていく映像。人が生きることができない死の大地で唯一生きることのできる汚染獣。

衝撃的だった。思わず戦場から逃げ出してベットで縮こまって二週間は出られなくなるほど。

あの時からだ。自分が感情を表に出さなくなったのは。

だけど、とフェリは思う。あの人なら。自分の心をぐちゃぐちゃにしていくあの人が戦っているところなら、大丈夫かもしれない。

恐怖で支配され、フェリのがちがちに固まった心をさっきのトウヤとのキスが溶かしていく。思い出すだけで体全体が暖かくなって、幸せな気分になれる。

「トウヤ」

『フェリ？ 何かあったか？』

「いえ、何も。それより、私も見ていますから、少しはかっこいいところを見せてくださいな」

強がってみるけれど、情けなく声が震えてしまふ。怖いので、まずはトウヤの顔だけを映した。

こちらの声が震えていることは伝わったのだろう。トウヤが優しく目を細めた。

あ、いいな

「まかせとけ。そっちには一匹も通さねえからな」

その優しい雰囲気と、力強い声に押され、視界を少しずつ広げていく。トウヤの通った道にはおびただしいほどの汚染獣の死骸が転がっている。鋭利な刃物で両断されたかのように真っ二つなものもあれば、細切れにされているものもある。グロテスクで、吐き気を催す映像に胃の中身がひっくり返りそうになったが、次の瞬間には気にならなくなった。

風のように戦場を駆け回り、まるで暴風のように汚染獣に死を撒き散らしていく。その様は正に爽快の一言だった。

自分のトラウマの源で、この世界の恐怖の象徴でもある汚染獣を、トウヤはまるで紙のように蹴散らしていく。

ちょっとした余興でこれを生徒会室にも繋げてやる。今頃あのスクリーンにはトウヤとそのおまけが敵を殲滅していく様子がありありと映っていることだろう。

トウヤを見るのに大半の念威端子を使っているせいであの兄の唾然とした表情が見られないのは残念だが、自分としては断然こちらのほうが優先度は高い。

薄く頬を染めたフェリは、トウヤの一挙手一投足に至るまで把握しようと思威に没頭した。

もう赤い点は四桁を切りそうだった。

「よっ、ほっ、はっ！」

戦場に張り巡らせた鋼系の上を駆け抜けながら手の中にあるいつもの違サファイア青石鍊金鋼を振るっていく。

別に振る必要はないのだが、なんとなく振ってしまう。

レイフォンはおそらく人気のない外縁部の端で座ってやっているのだろう。トウヤとレイフォンの鋼系に限っての力量差は拮抗している。

レイフォンは流す剋に優れ、トウヤは鋼糸を神経や筋肉にして自由自在に操る事に長けていた。

どちらに優劣をつける事はできない。所詮二人の力量では老生体をばらばらに解体する、なんて事はできないのだから。

トウヤもじつとしながら操作する事はできなくもないのだが、体を動かさずに武器を振るうというのはなんだか違和感があるので、こうして体も動かしている。当然、危険になるなどのリスクは承知の上だ。

「そろそろかな……フェリ。後何体ぐらいだ？」

『え、と……』

珍しくフェリが口ごもった。何かほかに没頭するような出来事でも起きたのだろうか。

「フェリ？」

『済みません。トウヤの側に389体。あちらの彼のほうに536体残っています』

「……そうか、なら残り20体まで数を減らしたら母体の殲滅に向かうとカリアンに伝えてくれ。それとフェリは四箇所にいるはずの母体の正確な位置と進入路の操作を。母体に救援を呼ばれたら厄介だ」

『わかりました』

ぐつと足元の鋼糸を踏みしめて、反動で高く舞い上がる。視界に収まった幼生体の数は、132。

トウヤが今展開している鋼糸の数は500。殲滅戦ということでいつもよりも数を多くしているが、トウヤの限界数は962本なので気にする事はない。

トウヤの意思に合わせて鋼糸が滑らかに動いていく。戦場を鋼糸の群れが暴れまわる。

切り、裂き、投げ潰し、細切れにする。一体に三本の鋼糸を使ってもまだお釣りの来る状況だ。いくらでも料理できる。

「後、257」

一つの零しもなく殲滅し終えたトウヤは、我先にとツエルニに向かっている幼生体の群れに飛び込んだ。

「なんだ、これ……」

「ありえねえ。どうなってるんだ!！」

周囲では先ほどまで戦っていた汚染獣が今は物言わぬ死骸になっている事に混乱し、パニック寸前の者までいる。

いきなり防護柵の後ろまで下がれと言われた後はもう一瞬だった。

上って来ていた幼生体が力強い何かによってあつという間に細切れにされたかと思うと、遠くの汚染獣が次々に殺されていく。

こんな事ができる人物を、ニーナは二人ほどしか知らなかった。

「アントーク!」

「武芸長」

こちらを探していたのだろうか。左肩を汚染獣の角にでも引き裂かれたのか、包帯を巻いている。

「あれは……」

「多分、二人の仕業でしょう」

近くで西のほうでも同じ事が起こっていると念威操者からの連絡を受けた者がいた。間違いない。

「……なるほど、あの言葉は嘘ではなかったか」

「何か言いましたか?」

「いや。それより、私はこれから生徒会室に戻る。現状を整理しなくては」

苦笑いをしながら戦場を見つめていたヴァンゼは、何かを呟くとあたりの生徒に指示を出して足早にツエル二の中央にある生徒会室に向かって行った。

それを軽く見送ったニーナはもう一度戦場に目を移した。内力系活動で強化した目では、汚染獣の中を黒い都市外装備を着た一人の武芸者が目まぐるしいスピードで戦場を駆け巡っているのがわかる。

「ひゅう。さっすが、違うね」

ふと、聞きなれた声に視線を動かせばいつものシャーニッドがそこに居た。先ほどまでの真剣な表情をいつものいいものをと思わずにいられないが、これがシャーニッドなのだから仕方がない。

「そうだな」

「悔しいな」

「……そうだな」

顔や態度はいつもの飄々としたものだったが、銃剣を握る手が音を立てたのと、目がいつもと違った。

悔しい。確かにその気持ちはニーナにもある。むしろ向上心が旺盛な武芸者ならば誰しも抱かずに居られない感情だ。しかし、

「なら、強くなればいい」

「は？」

「あいつらの隣に立てないのが悔しいのなら、立てるまでに強くなればいい」

「……………」

しばしの間ぽかんとしていたシャーニッドだったが、何かに堪え切れなくなったように噴出した。

「ぶっ、はっはははは。冗談きついぜニーナ。あれぐらいって……どのくらいだよ？」

馬鹿にしたかのように笑うシャーニッドに、ニーナは何も言わなかった。シャーニッドの目が笑っていなかったから。

「でも……面白いかな」

「ああ」

無理だとわかっている。武芸の世界は才能で決まる。トウヤ等と自分たちではおそらく紙飛行機とランドローラー程の違いがあるだろう。

しかし、誰が紙飛行機がランドローラーに勝てないと決めた？  
どうしても勝てないというならば、勝てる紙飛行機を作ればいいじゃないか。

自分たちがいかに馬鹿で、無謀な考えしているかなど二人は重々承知だった。しかし、それでもあの隣に立ちたい、と思ってしまうのだ。

「厳しいな」

「ああ。だが、諦めるわけにはいかん」

「もちろん」

おもむろにシャーニッドが肩に担いでいた白金鍊金鋼製の銃を戦場を駆け巡る黒い点に向かって大雑把に構えた。

すると、次の瞬間発砲した。

「お、おい？」

「なに、ちょっとした挑戦状だよ。あいつに叩き込んできた」

「そうか。……なら、私もあいつ等が帰ってきたら一試合挑もうかな」

「ははッ。そりゃあいい」

このときシャーニッドは少し浮かれていた。笑いあつた数秒後には、多分の怒りを含んだ念威爆雷がシャーニッドの顔面で爆発した。

「まったく、なんだったんだ」

周囲にいる汚染獣の最後の一匹を殺し終えたとたんに飛んできた一発の銃弾。殺意がなかったので避けるのが一瞬遅れたが、特に問題はなかった。

『……今のは、狙撃手の人が馬鹿な考えを起こしたようです』

「狙撃手……シャーニツド先輩が？ またなんで……」

あの人はいまさら嫉妬するような人ではなかったと思うのだが。

『考えるのも馬鹿らしい理由です』

「……そうか」

あの人のことだからノリで、とかありそうだ。

「で、母体の割り出しは？」

『終わってますよ。一番近いのがそこから北東に18キロメル進んだ先にある縦穴を一直線に下り終えたところにいます』

「そっか。んじゃ、カリアンに残りの殲滅は頼んだ、って言っておいてくれないか。ええと、北東といえは……」

『トウヤから左斜めです』

「お、サンキュー。んじゃ、ちょっと行ってくる」

『気をつけて』

近くに浮いている念威端子に向かって親指を立てると、内力系活動で強化した足でそこから瞬時に駆け去った。

その念威端子はしばらく心配そうにそこに留まってくるくる回っていたが、自分の役目を思い出したのかすうっ、と上空に上って行った。

道中、未熟児とも言えはいいのか。足が発達していなかったり他の仲間に頭を齧られて半死半生の汚染獣を潰しながら近くの念威端子の発する僅かな光と誘導を頼りに縦穴を突き進んで行く。

無残な死骸を見ると、ここは正に地獄だと実感させられる。

壁を蹴りながら一直線に落ちた。100メートル以上はあったと思う。それだけ深い穴を降りた後に、幼生体の母体の雌性体がようやく見えた。

「レストレーション」

体に馴染んだ一本の棒の心地良い重みが手に乗った。

体の三分の二を構成する腹は幼生体によって食い破られ、目の輝きもすでにほとんど消えかけていた。

「常に他者を犠牲にしなければ生きていけない人間は傲慢なのかもしれない」

声に反応したのか、雌性体の複眼が一斉にこちらを向いた。

「共存できる道は、もしかしたらあるかもしれない」

限界まで剉を錬金鋼に込める。

「でも、生きたいんだ」

もしかしたら、この世界の頂点に君臨しているのは汚染獣なのかもしれない。この死の大地で生きる事を許された唯一の種。世界に選ばれたのは人間ではなく汚染獣だったのでないか。人間は大地が死滅したときに一緒に滅ぶべきだった。そう唱える学者もいる。

だが、それならばなぜ神は人間に剉という牙を与えたのか。矛を与え、汚染獣に対抗できるようになれば当然欲も出る。

勝ちたい。生きたい。

その原初の欲求は人間を強くした。こうしてここに立っているトウヤも、そうした過程の末に生まれたヒトである。

「詫びるつもりはない」

この生存競争に勝ったのはトウヤであり、ツエルニだった。

トウヤの振るった棒は、雌生体の頭を打ち抜いた。

## 第十四話『蹂躪』（後書き）

この作品にまだ目を通してくださる方がいると、感想欄を見たときは驚きました。一旦放り出したものに手をつけるのは心苦しいですが、何とか頑張っていきたいと思えます。

次回の更新は、四日後月曜のの23時頃を予定しています。

## 第十五話『希望』（前書き）

予告を少し裏切って早めに投稿してみました。ようやく一巻分が終了といったところでしょうか。二巻を過ぎた辺りから本格的に原作乖離させていくつもりですので、チヨコチヨコと目標を定めて頑張っていると思います。

## 第十五話 『希望』

ニーナの振るった鉄鞭が幼生体の複眼を潰す。

痛みに反応して前身を起こして暴れまわる幼生体に残りの学生が群がり確実にその命を刈り取った。

(……よし！)

これならいける。ニーナだけでなく、周りの武者皆が同時にそう思った。その時だった。

「「「う、うわあああああつっ！！！！」「」」

広範囲に広がって殲滅していた一角で大きな叫び声が聞こえた。

反射的に振り向けば、そこには地面から這い出てくる幼生体とは比べ物にならない大きな巨体。軽く二倍はあるだろうか。恐怖に捕われながらも、周囲の武者が関節部や目など、今まで弱点で簡単に潰せたところを狙うが、すべてが意図も簡単に弾き返された。

「なっ……！！」

それを見ていたニーナも、思わず声を上げた。攻撃に参加していた一人は第一小隊の副隊長だった。一撃の重さと正確さには定評があり、五年生ながらヴァンゼの後釜として皆が認めうる実力を有していた。しかし、雄生体の体皮や、複眼はそんな彼の一撃でさえ、凹みを僅かに付けただけだった。

それを見た周囲に絶望ムードが広がる。この中では実質トップの第一小队メンバーが声を掛け合って何とか士気を保とうとするも、見上げるような巨体とそのグロテスクなフォルムに、戦意を殺がれていく。

「いかん。シャーニッド！」

「おう！」

幼生体のように押し掛かるだけでなく、その足で走ることができないらしい雄生体はその巨体を生かした突進で武芸者の戦意を刈り取っていく。

それを阻止すべく、ニーナはシャーニッドに声を掛けて走り出した。

雄生体の数メートル前で力強く踏み切り、高く跳躍する。

「はあああああっ！！！」

体を独楽ユラのように回し、その遠心力と重力を持って雄生体の首と思われる頭と胴体を繋いでいる所に自身の最高の一撃を振るった。

まるで鉄の塊を殴ったような感触。手元の錬金鋼が手から吹き飛んでいきそうになるのを握力で押さえ、鉄鞭の先端に踵を振り下ろした。

メキヨッ、と鉄を割ったかのような感触が手に感じられた。

（やった！）

確かな手ごたえに満足したが、着地の事を考えてなかったせいで強く背中を打ちつけた。

「ぐうっ……っ!？」

痛みに顔をしかめ、閉じそつになる目を何とか開くとそこにはこちらに振り上げた前身を振り下ろそうとする雄生体の巨体があった。

まずい、と思った瞬間ニーナの両手が抜けるかと思うほどの力で引っ張られた。

鼻先を雄生体の太い前足が通り過ぎていくのをひやりと感じながら後ろを振り向くと、シャーニッドとヴァンゼがそれぞれニーナの腕をつかんでいた。

「ニーナ。やったな、おい！」

「ああ、よくやった」

「……え？」

何を言われたのか理解が追いついていないニーナに、ヴァンゼが苦笑しながら前を指差した。

そこには、痛みで苦しみ暴れまわる雄生体の姿があった。その暴れようからして致命傷ではなかったようだが、確かな手傷を負わせた事に間違いない。

「皆！ よく聞け！ 見ての通り、敵は強大だが無敵ではない。皆

の力を合わせ、一枚岩になれば、倒せない相手ではない。三人一組で互いをフォローし合って関節部や目を狙え!!」

ヴァンゼが腹に響く声でニーナの戦果に沸き立つ周囲に激励し、真っ先に副隊長と小隊メンバーの一人を引き連れ、雄生体に切り掛かった。

その頼もしい姿に周りは更に沸き、剽の煌きを残して我先にと飛び込んでいった。

ニーナはしばし呆然と自分の手のひらを見つめていたが、自分を見るシャーニッドに気づくと顔を見引き締めた。

「行くぞ！」

「おつよー！」

二人は皆を弾き飛ばす勢いで雄生体の巨体に走り出した。

「これなら、大丈夫そうだな」

『そうですね』

一時、雌生体の排除が間に合わず、救難信号に反応して雄生体が現れたと聞いたときは肝が冷える思いだったが、ニーナの活躍でそれも心配ないようだった。

雄生体に群がって戦う武芸者は、皆眩いほど全身の剄を輝かせていた。

攻撃する者と、注意を逸らす者。危なそうな者を助ける奴など、号令は無いにもかかわらずみんな示し合わせたかのように纏まった動きを見せていた。

皆希望に顔を輝かせ、普段よりもいい動きができているようだった。

「いいねー」

『混ざりたいですか？』

「いや。皆の感動を壊すことになりそうだからやめとくよ」

自分が参加してしまえば剄を込めた一撃で決まってしまう。そんな事をすれば興ざめするし、皆のためにもならない。

『もうそちらはいいでしょう。こちらに戻ってはきませんか？』

「ん？ なんで？」

『それは……』

「わかった。今行くよ」

なぜか言い辛そうに口ごもるフェリに何かあるんだろう。と思つて理由は聞かずにしゃがんでいた尖塔の上から飛び降りた。

【トウヤ？】

【ちょっと行ってくる。お前はここに残っててくれ】

【ん。了解】

トウヤの前で見ていたレイフォンとアイコンタクトで軽く会話してフェリが居るだろう生徒会室に鋼糸で飛ぶように移動する。

一般教養科や農業科などは皆避難しているし、武芸者は皆あちらにかかりきりなので気にする必要も無い。いつもこころないのに、と思わずだらけた事を考えているとフェリの小さな姿をトウヤの強化された目が捉えた。

まっすぐトウヤだけをじっと見つめてくる彼女の視線に気恥ずかしくなるが、それを抑えて生徒会室の上にある棒に鋼糸を巻き付け、大きく跳躍してフェリの前に降り立った。

「よし、と」

「お疲れ様です」

「フェリもな。サポートサンキュ」

「いえ、私がやりたかっただけですから」

「そっか」

胸を張って自主性を主張するフェリは子供が背伸びしているようで可愛らしかったが、ここでそんな事を口にするほどトウヤも愚かではない。それに、つい先ほどに猛烈な告白を受けていて、身勝手な理由で延期している身としては申し訳なさも感じたりする。

まあ、それでよそよそしくなることは彼女の望む事でないことは十分理解しているので、今までどおり、ありのままの自分で接する事にした。

「何か、あったのか？」

「いえ、ただ無事な姿が見れてほっとしました」

胸に手を添え、ほっと一息ついたフェリは常にトウヤの側に念威端子を置いていたはずだが、それでも自分の目で一目無事を確認したかったらしい。

「……………」

そこまで心配してくれた事による嬉しさと、なんだかかむず痒いような照れくささとが混じり合って、トウヤは自分が今赤面しているだろうな、と自分の状態を正しく認識していた。

何か言おうと思っても、気の効いた言葉が出てこない。色々かっこつけたセリフが思い浮かんで来たが、口から出てきたのはなんの飾りも無い一言だけだった。

「ありがとな」

「……いえ」

「ありがとう」という言葉が出てきた途端、フェリは嬉しそうに顔を綻ばせた。

その純粋な笑顔に魅入られたトウヤは呆然と手を伸ばしたが、すりと逃げられてしまった。

「ふふ、手に入れたければこっちまで来て下さいね」

「っ！……ああ、そうだな」

ぶらりと垂らした手で自分の顔を叩くと、トウヤはきりつと顔を引き締めた。

それに満足そうな表情を浮かべたフェリはたんつ、と地面を軽く蹴ってトウヤの手に自分の手をするりと絡めさせた。

「ご褒美です。負けるとは思いませんが、骨抜きにするのが目標なので」

すりすりと頬を擦り付けてくるところを見ると自分がやりたかっただけなんじゃないかと思うが、何も言えずトウヤは苦笑した。

絶妙な飴と鞭の使い方だった。

「なら、俺も骨抜きにしてやる」

とか言えたら格好も付くんだろっけねど、しっかりとした答えを返していないトウヤにはそれを言う資格は持っていないかった。

故に、精一杯の誠意を込めてこう言うしかなかった。

「ちゃんと、答えを出すよ」

「色好い返事を、期待して待ってますよ」

結局、今日はどこまでもフェリに勝てずじまいだった。

「さて、ご苦労だったね二人とも。おかげでこちらも大した被害無く終えることが出来たよ」

「いや。大した事はしてねーって。一番の大物はそっちに取られたしな」

疲れ切った様子のヴァンゼにニヤリと笑ってやると苦笑が返ってきた。

「いや、あんな事を言って済まなかった。確かに幼生体と雄生体の差は大きかったようだ」

そう言いながらも自分たちの戦果に満足して頷くヴァンゼにあれは一期でまだ柔らかい方なのだと言ってやるべきかどうか、トウヤは少し頭を悩ませた。

「いえ、あれはまだ一期で脱皮して間もなく、二期以降に比べるとあまり硬くないですよ」

しかし、そういうところに疎いレイフォンがあっさりとそれを言っってしまった。

思わず顔を青ざめたヴァンゼを気の毒に思いながらも隠しても意味が無いか、と割り切った。

「ま、そういうことなんで油断は禁物ってことですね」

「精進あるのみ、ですね」

トウヤの言葉に続けるようにしてフェリの容赦無い言葉が疲れ切ったヴァンゼに止めを刺した。

深く、重いため息を付いたヴァンゼは思い込んだ表情で席を立つと、カリアンに一声掛けて部屋を出て行った。

「……さすがに、言いすぎだと思っただが」

「本当の事です」

「ま、仕方ないな」

武芸者モードのレイフォンとトウヤには冷たく突き放され、

「当然の事を言っただけです」

トウヤと二人つきりで無いフェリも当然いつもどおりに切つて捨てた。

ひとつも心配されない友人を哀れに思いながらも、カリアンは苦笑するだけで何も言わなかった。

「さて、今日ももう遅い。ここらで解散する事にしよう。二人には追々報酬を渡すから、後日取りに来てくれ」

「ありがとうございます」

仕送りの無い二人は、いくらAクラスに奨励金が上がったとはいえ、週四で機関部清掃をしているのでこういった臨時報酬は嬉しかった。

ふと、フェリが唐突に口を開いた。

「ああ、私トウヤのいる小隊に入隊する事にしましたから」

「……………なんだって？」

そのあまりにも唐突なフェリの言葉にカリアンだけでなく、トウヤたちも驚きで目を見張った。

殊更戦闘には拒絶の意思を見せてきたフェリが今日戦場に顔を出した事さえ驚きなのに、自分から小隊に入隊しようというのだ。驚かないはずがない。

「その代わり、トウヤの居ない所に入れようとしたら即手を引きますし、一般教養科からも席は移しません。武芸大会への特別な措置

ということなら、構わないでしょう?。」

「それは……しかし……」

「いや、フェリは基礎体力とかが足りていないからだめだ。二束の草鞋を履くのは危ない」

「小隊の訓練のときすればいいじゃないですか。具体的には私とトウヤのマンツーマンで」

「おいおい……」

否定する言葉がとっさに出てこなかったカリアンの代わりにトウヤが正論で諦めさせようとしたが、フェリの意志は固いらしい。むしろ自分の要望を通そうとするあたり、やはりフェリはなかなか強かった。

「……………」

「私の意見も取り入れると言ったのは貴方ですよ?。」

「……………分かった。そういう風に取り計らおう。その代わり、毎日訓練のある日には顔を出すこと。これが条件だ」

やはり、というかカリアンが折れる形であっさりとは話は纏まった。

やれやれ、とため息を吐くカリアンだったが、その表情はどこか嬉しそうに緩んでいた。

ロス兄妹のどこか微笑ましいやりとりに、レイフォンとトウヤの

頬も自然と緩んだ。

「ゴホン。失礼したね。まあここで解散だ。私はやることがあるが、フェリは……」「トウヤに送ってもらいます」……そうか。すまないが頼めるかな？ トウヤ」

「まかせとけ」

「ありがとう」

フェリとは帰る方向もそんなに変わらないのでレイフォンが一人ぼっちで帰らなければいけない、ということもない。断る理由もないし、むしろこちらから送っていいこうと思っていたトウヤは即答した。

それに柔らかない笑みを見せたカリアンはフェリに数枚の書類を渡すと笑顔でトウヤたちを送り出した。

## 第十五話『希望』（後書き）

タグを少々変えました。最強主人公でしたが、ふとレギオスではその条件に当てはまらないことに気づきました。なんたって天下無敵の女王様がいらっしやいますしw

後、読み返したりしていたところ、自分の嗜好が変わったこともありハーレム展開はやめにすることにします。フェリー筋でいこうと思います。溺愛、甘々などが好きな作者がヒロインを一人に絞ってしまふとどうなるか……そっち系が好きでない方には苦痛に感じるかもしれません。

ツイッター登録をしたと活動報告で報告させていたと、早速フォローをしていただきました。ありがとうございます。アップ時には押すようにしますので、知りたい人はどうぞー。IDはtakanarouです。

## 第十六話『手紙』

どうしよう。

一枚の封筒を胸に抱きすくめておろおろするメイシエンの胸中には、この一文が延々とリピートされていた。

クラリーベル・ロンスマイア。

明らかに女性の差出人のこの手紙がメイシエンがミイファイたちと共同で使っている部屋に届いたときは見覚えのない名前に首を傾げたが、宛名を見た瞬間にメイシエンは固まってしまった。

トウヤ・カネモリ。

唯一肉親以外で自分がまともに話せて、怖くない異性。なんだか側に居ると心が温かくなる不思議な人。もしかしたら、という思いはメイシエンもじわじわと日々の中で実感してきているが、やっぱり臆病な自分ではなかなか前に進めなかった。

意気地ない自分に落ち込んでいると、くしゃりと手の中の封筒が少し潰れてしまった。

慌てて確認してみると、少し皺が寄ったぐらいで特におかしなところはなかった。

「そ、そうだ。返しに行かなくちゃ」

そんな当たり前のことにすら気づかないくらい混乱していたのだ

るうか。メイシエンはそのことに気づくと、直ちに部屋を飛び出した。

「あつ……」

いた。自分でも驚くほどの度胸を見せて、武道館の受付の人に十七小隊の訓練場所を聞いて、ドアにはめられたガラス越しに部屋の中を見ると、確かにトウヤの姿はそこにあつた。

しかし、よくよく見るとそばにはあの綺麗な女子生徒がいて、トウヤは付きっ切りで面倒を見ているようだった。柔軟体操をしている二人の姿にもやもやとしたものを感じながら、メイシエンは入るかどうしようか迷っていた。

「よっ、なぐにしてんの？」

「ひっ……」

ぼん、と肩に手を置かれ、メイシエンは文字通り飛び上がって驚いた。

ばっ、と急いで距離をとったメイシエンを、長身の男性はぼかんとした表情で見つめていた。その視線に恥ずかしくなってしまったメイシエンは、何も言えなくなって頭を下げると一目散に走り去つ

た。

「はあ……」

なんで自分にはこんなに度胸がないんだろう。

返す筈だった手紙を手で触りながらメイシエンは深いため息をついた。

「どうしよう……」

あの男の人はトウヤの所属していた小隊の人だったはず。なら自分が来ていたことはトウヤにも伝わっていることだろう。

ますます手紙を返せなくなってしまったこの状況に、メイシエンは泣きたくなってしまった。

ふと、人の話し声が聞こえてきたので、俯いていた顔を上げて後ろを振り返った。

メイシエンが座っているベンチの後ろにある茂みの向こうはちょっとした傾斜になっていて、その先に遊歩道がある。学校帰りの学生がよく通ることもあって、普段ならぜんぜん気にならないのだが、

声のうち片方がやけに聞き覚えがある声だったので、思わず振り返ってしまった。

「体があちこち痛いです」

「運動不足だな。ま、これから少しずつ慣らしていけばいいさ」

「そうですね。頼もしいパートナーも居ることですし、ね」

トウヤの隣を歩く女子生徒……確かロス先輩だったかは、生徒会長の妹ということと、その整った容姿で一時一年生の男子を沸かせたりしたが、まったく表情を動かさないことから女子生徒からは『人形』などと陰口をたたかれることも少なくなかった。

一時は夢中になっていた男子生徒も、笑わないフェリからは興味をなくしたようで、普通に女子の陰口に乘ったりしている。

しかし、今はどうだろうか。トウヤと一緒にいる彼女の表情は柔らかく、見るものに感動を与えさせるほど美しかった。いつもは硬く閉ざされている小さな唇は、トウヤの前だと特別だともいうかのように軽快に動いている。

風がこちらに來ているのか、二人の会話はよく聞こえた。その仲のいい様子から、まるで二人は恋人のようだった。

ずきん、と胸が痛む。今、自分の顔はひどいことになっていそうだ。自分にこんな醜い感情が溢れ返っていることがショックだった。

ふと、何に気づいたのかフェリが会話を急に途切れさせた。

「フェリ?」

「まだ歩きにくいんです。いいでしょう?」

「ああ、フェリもがんばってたしな。腕くらい、いつでも貸してやるよ」

「ありがとうございます」

フェリはそうやって、トウヤに体重を思い切りかけるようにして肩に頭を乗せていたがふとメイシエンの方を振り返った。彼女は盗み見することしかできない自分を嘲笑するでもなく、トウヤの隣にいることを得意がるでもなく、ただ興味なさそうに見つめると、トウヤとの会話に戻った。

気がつけば、自分の隣には念威端子があった。そういえば、彼女は念威操者だと聞いたことがあるような気がする。

ならば、彼女はメイシエンの存在とその思いに気づいていながら、メイシエンのことを敵にもならないその辺の有象無象と切って捨てたのだ。

メイシエンの胸の中に悔しさがにじみ出てくる。今すぐトウヤのそばに駆け寄って奪い取りたい気持ちが溢れて来るが、今の自分にはその資格はなかった。

分かっている。分かっているのだ。自分が少し勇気を出せばいいことだということくらい。だけど、やっぱり決心がつかなかった。

気がつけば、がむしゃらに足を動かしてその場所から逃げ出していた。

「はあ、はあ、はあ」

どうやって帰ってきたかも覚えていない。ただ、今まで生きてきた中でもっとも体を酷使したというのは分かる。

足はがくがくで、胸が張り裂けるようにいたい。耳元で心臓が脈動しているかのようにさえ感じられる。

立っている事すらできずに、自分のベットに倒れこんだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……」

なかなか激しい息が止まらない。なんとか周りが見えるくらいに回復してきたころ、ふと目の前にあの封筒があることに気がついた。

ベットに倒れこんだ時に胸ポケットから飛び出したのか。そんなことはどうでもいい。重要なのは、今まで手に握り締めたりしていたせいで、糊が剥がれかけていることだった。

端をつまんでちょっと引っ張ればはがれそうなくらいになっていた。

震える手で封筒の端をつまんだ。

もし、これを見れば

トウヤのことが少しでも分かるかもしれない。

それは道徳的に見て許されない行為。しかし、フェリに差を付けられて気分的に滅入っているメイシエンには悪魔の誘惑のように甘美なもので、結果、メイシエンは耐え切れずに摘む手に力を込めた。

次の日、罪悪感から正直気が重かったが手紙を返しに行くことにした。

流石に教室では渡せなかったので武道館の前で待つことにして、足早に向かっていた。

幸い、授業が終わってすぐに出たのでまだ余りあたりに人影は無い。封もし直したし、十七小隊用のポストにでも入れておけばいいのだろうか？ いやいや、そんな不誠実なことは出来ない。ちゃんと自ら手渡さないといけない。

と、その時前方から一人の男性が鼻歌を歌いながら軽快な鼻歌を歌いながら歩いて来た。

(あ……)

あれは確かトウヤと同じ小隊のシャーニッドといった先輩だったはず。対抗試合で何度か見かけたことがある。それもこの間逃げ出してしまった人だ。

しかし、声を掛けるほど互いに知り合っているというわけでもないので、メイシエンはこれ以上見ているのは失礼だということに気づきそつと目を逸らした。逃げ出した負い目もあった。

しかし、意外なことに向こうから声を掛けてきた。

「ん？ こんなところで何してんの？」

「えつ……あの、その」

確かに普通科の制服を着て武道館の前に居れば怪しむかもしれない。そんなことにも頭が回らなかったメイシエンは都合のいい言い訳を用意していなかった。

「えつと、ご、ごめんなさいっ」

結果、一目散に逃げることしか選択できなかった。

「……ん？」

ここで逃げなければ彼女の運命も、また違ったものになったのだろうか。それは分からない。

「フェーリちゃん」

「……なんでしょうか」

一緒に行こうと思っていたが、掃除当番だから先に行って準備体操でもしておいて。とやんわりと断られたフェーリがやや不機嫌なまま武道館に入ってきた。

それを見るやいなや、いつにない上機嫌で近寄ってきたシャーニツドを目線で威嚇する。

少し軽薄な上級生のシャーニツドをフェーリは嫌いではなかったが、少しスキンシップが激しいのが問題だった。もしトウヤに見られてもしたらどうするつもりなのか。いや、どうしてくれようか。

シャーニツドもフェーリが若干不機嫌なのを悟ったのかウツ、とよるめくとどうしたものか、と顎に手をやって考え始めたが、すぐにニヤリ、と嫌な笑みを浮かべた。

嫌な予感しかしないフェーリはシャーニツドを無視して更衣室に鞆を放り込むと、いつものように武芸科の制服（フェーリ特注のフリル付き）に着替え、スパッツを穿く。トウヤになら見せてやっても構わないがここは他の男の目もある。

ゴムを口にくわえ、少し高い位置で髪を一本に縛る。トウヤが好きな髪形もリーリンに協力を得て調査済み。ロングと高い位置で縛るポニーテールだ。

タオルと飲み物を用意すると、すぐに準備体操に取り掛かろうとしたが、シャーニツドがニヤニヤしながら持っている手紙がちらち

らと視界を掠める。

シャーニツドの笑みから、その手紙が誰宛でどのような人物からの贈り物なのかは理解しているフェリだったが、余り興味はない。トウヤがかなり自分になびいていることを自覚しているフェリはちよつとやさつこのことでは揺るがない。

しかし、興味なさげにしているフェリに痺れを切らしたのかシャーニツドが揺さぶりをかけて来た。

「フェリちゃん。この手紙、誰宛分かる？」

「トウヤでしょう」

「じゃあ……」

「それも女性のもの苗字も違うので親族ではなさそう。といったところですか？」

「んなっ……」

見事に言い当てられたシャーニツドがあわてて辺りを見渡すもいつもの桜の花弁は見当たらない。

「あなたの表情だけで分かりますよ。ですが、まあ私には興味のないことです」

ライバルがいようと関係ない。といった堂々としたフェリの様子にシャーニツドは口笛を吹くが、ならばと別の方向からのアプローチを仕掛けた。

「だけだよ、これを見ればグレンダンのトウヤのことも分かるかもしれないぜ？」

「（ぴくっ）」

「（にやっ）」

その反応はフェリにとって負けを認めたと同然だった。シャーニツドが会心の笑みを見せるのも無理はない。

「ほれほれ、いいのか？ 知りたいことがここに書いてあるかも知れねーんだぞぶはあっ！」

ぼんつとシャーニツドの顔面で念威爆雷が炸裂。衝撃で手から離れた手紙は爆風でフェリの足元へ。

「まあ、千歩譲ってこの手紙に興味があるのは認めましょう。しかし、人の手紙を見るなんてことはマナー違反ですよ」

じっ、と数秒手紙を見つめ、未練を断ち切ったフェリはベンチに手紙を置いた。

「あー、酷い眼にあった」

「自業自得です」

フェリの力加減がうまいのか、多少煤で汚れてはいるが特に怪我を負った様子のないシャーニツドは肩をすくめた。

「……トウヤ達が来たようです」

「……なあフェリちゃん、もしかして四六時中トウヤに念威端子をくっつけてるんじゃないっぽっ」

## 第十六話『手紙』（後書き）

無くそうかとも思っただんですが、一応手紙イベント入れてみました。どうだったでしょうか？

後、皆さんに質問なんですが人物紹介とかあったほうがいいですか？一応それっぽいのはあるのでご要望があるようでしたらすぐにも上げますので一言もうしつけください。

P S

この小説の題名を希望しています。じっくりこなくてネーミングセンスが絶望的な私が必死こいて考え、一応変えたのですが、さらに変になったような気がして……

参考程度か、もしくはそのまま使わせていただくか分からないですが、この小説のイメージに合ったものがあれば、どうか知恵を貸して欲しいです。お願いします。

IF十六話 『別れの手紙』 (前書き)

メイシエンIFルートです。このままだと彼女があまりにも救われないので書いてみました。本編とは関係ありませんのでフェリ派だという人は読み飛ばしていただいたほうが宜しいかと。

## IF十六話 『別れの手紙』

IFメイシエンルート

おそろおそろ封筒の中身を取り出して、中身を確認したメイシエンは、中身の重大さと自分のしたこと罪悪感から、泣き崩れた。

親愛なるトウヤへ

お久しぶりです。お元気でしたか？ 私はトウヤがなくなって寂しい毎日を送っています。手紙を出そうとは思っていましたが、やはり直接お顔を拝見しながら話したかったので、断念していました。

さて、今回その決意も折って手紙を出したのには訳があります。そして、残念ながら、凶報です。

先日、トウヤのお爺様のキリュウ様がお亡くなりになりました。元天剣授受者とはいえども、お年には敵わなかったようで、御年128でこの世を去られました。

キリュウ様を慕っていたトウヤにとっては辛い事でしょう。じつはこのことで何度か手紙を出そうとしたんですが、トウヤには元気な姿以外は見せたくないから、と言われて出せずじまいでした。

お爺様から預かったものもありますし、近いうちに渡しに行きます。不謹慎だとは思いますが、会えると思うと、胸が躍ります。

また会う日を、楽しみにしています。

リーベル・ロンスマイアより

クラ

「そうか……爺さん、逝ったか」

メイシエンに夜に呼び出され、公園で手渡された手紙を読んだトウヤの胸中は、やっぱりというのが正しかった。

自分が旅立つ時にはすでに体は限界を超えていたようだったので、正直そこまでショックではない。

とはいえ、敬愛し、尊敬していた厳格な祖父が死んだと聞かされては、落胆は隠し得なかった。

「ありがとう、メイシエン。助かったよ」

「あ、あの、そのことなんだけど……」

「ん？」

「ごめんなさい。手紙、読んじゃったの……」

この手紙を届けてくれたメイシエンはしゅんと落ち込んだ様子で謝ってきたが、トウヤに責める気持ちはない。むしろ届かなかったかもしれない手紙をわざわざ届けてくれたので感謝こそすれ、責めるような気持ちはなかった。

だけど、それじゃあメイシエンは納得してくれないだろう。トウヤが心から許すと言っても、どこかで自分を責めるに違いない。

「そうか……なら、メイシエンお勧めの店で何か奢ってくれ。それから、手作りのお菓子でもいい」

「えっ……う、うん。わかった」

「楽しみにしてる」

ほっとした様子のメイシエンに笑いかけると、満月の夜空を見上げた。

綺麗な新円を描く月は頭上から優しくトウヤたちを照らした。

少しささくれ立った心に優しく染みる月光を体に感じながらトウヤはベンチに寝転がった。

「ね、ねえ、トウヤのお爺さんって、どんな人だったの？」

「ん？ そうだな……一言で言えば武人、かな。礼儀作法とかに厳しくて、いつも俺は怒られてたよ。あと、武芸が達人でな。俺なんかじゃ歯が立たなかった」

「え？ 128歳のおじいさんに？」

「ああ。何をどうやってもこっちの攻撃は当たらなかったよ。女王陛下を唯一諫められる豪傑として、ウチの都市じゃかなり有名だった。まあ、年には勝てなかったみたいだけどな」

女王陛下の老成体をも一撃で粉々にするパンチをただの錬金鋼で出来た棒一本で逸らす事が出来るのは世界がいくら広くてもあの化け物じみた祖父ただ一人であろう。

武芸者ではないメイシエンにはその凄さは伝わらないかとも思ったが、なんとなく凄い人だということは伝わったようだ。

「ま、いろいろとすごい人だったよ。礼儀作法には厳しい割りに、あんまり武芸の誇りとか理念は気にしない人で、よくティグ爺と喧嘩してた覚えがあるし」

武芸の誇りなんぞ犬に食わせると武芸者の前で豪語する祖父と、古きを良しとするティグリスは相性が悪いようで、どうしてか日常ではそこそこに仲が良かった。

「へえ〜。いい御爺さんだったんだね」

「ああ。いろいろ叱られたし喧嘩もしたけど、それでも爺さんの事は誰よりも尊敬してる」

悪いことをすれば飯が食えなかったし、レイフォンが閻試合に出るほどに悩んでいたことに気づけなかった悔しさで八つ当たりしたときには道場を半壊させる大喧嘩もした。

そういえば、祖父とはこうやって良く月を見上げた記憶がある。二人で見上げていると、他の孤児も集まってきて軽い月見が始まるぐらいだった。

「懐かしいな……」

しかし、それもこれも遠い過去となってしまうた。祖父がいなければ一緒に月見はできないし、レイフォンを庇ったトウヤは都市中の嫌われ者となった。当然、孤児達もその中に入る。

レイフォンほどではないが、確かに手のひらを返すかのように態度を一転されればシヨックも受けた。しかし、トウヤにはそのことに絶望している暇なんてなかった。レイフォンは今までの自分のアイデンティティを否定され、壊れかけていたのだから。

レイフォンは悪くない。これはレイフォンやリーリンも乗り越えたことで、トウヤ自身の問題だった。

だけど、これはさすがに堪えた。

「はは、馬鹿だな、俺……」

前に進んでいなかったのはレイフォンではなくトウヤの方だった。嫌な部分から目をそらし、心を止めていた自分がフェリにあんなことを言ったのが今更になって恥ずかしい。

どっと疲れたような気分になり、手の甲を額に押し付けた。

なんだか全てがどうでもよくなったかのような脱力感に、大きな

ため息が出た。

「トウヤ……泣いてるの？」

「……泣いてないさ」

「でも、泣きたそうな顔だよ？」

そっ、と優しく髪を撫でられる。

それが疲れた心にひどく優しくかった。

「泣いても、いいと思うよ」

「泣いてないって」

「何が、悲しいの？ 何が苦しいの？ 言ってみて。少しは楽になれると思うから」

メイシエンはトウヤの言葉には耳を貸さず、トウヤの頭をゆっくりと持ち上げた。

「辛かったら、苦しかったら、出しちゃえばいいよ。いくら強くたって、トウヤも同じ人間なんだから。私でよければ、こうして受け止めてあげるから」

ぎゅっ、とメイシエンの豊満な胸に顔を押し付けられる。その柔らかさと暖かさに、トウヤは何故だか涙が出そうになった。

「トウヤ、頑張ったよ。レイとんとリーちゃんをいっぱい支えてあ

げてたんでしょ？ でもね、あの二人はもう大丈夫。ミィや、ナツキ、アントーク先輩やクリプトン先輩。たくさんの人が一緒にいる。仲間になってくれる。

ね？ だから、もう休んでいいと思うよ？

お疲れ様、トウヤ

この日の夜、トウヤは久しぶりに涙を流した。

気づけば、朝だった。

ふと自分がさっきまで違う場所にいたかのような気がして首をかしげる。

お疲れ様、トウヤ

「あ……」

思い出した。

「あゝ、なるほど」

自分はそのまま泣き疲れて寝てしまったらしい。一体全体どこの子供か、と言いたい所だった。

「あ、起きた？ トウヤ」

「……レイフォンか」

くすくすと笑いながら台所から顔を出したレイフォンを見て、自分を運んでくれたのが誰だか悟った。

猛烈な恥ずかしさに壁に頭を打ち付けたいところだが、拳で額を殴ることに留めておく。

「ロス……フェリ先輩から念威で連絡が来たときは何事かと思ったよ」

「フェリから!？」

と、いうことは当然あの場面を見られていたわけで……

「う、わあ……」

もしかしなくても、告白された女の前で他の女に泣きついた最低男じゃないか？ 俺。

実際はいつものように念威で覗き見していただけたのだが、そんなことはトウヤに知る由もない。

正式に付き合っているわけじゃないから謝るのはなんか違うような気がするし、かといってそ知らぬ顔ができるほどトウヤは厚顔無恥ではない。

どうすれば……と真剣にトウヤが悩んでいると、レイフォンが助け舟を出した。

「『放課後デート一週間で手を打ちます』だ、そつだよ？」

「……そつか」

トウヤのことなどフェリにはお見通しだったようだ。当然、費用は全てトウヤ持ちだろうが、それでもトウヤはフェリの心遣いに感謝した。あの自分がいつも買う服と一桁二桁違う値段の洋服類には恐怖を覚えないでもなかったが。

「朝ごはんできてるよ？ あと、メイシエンがお弁当は必要ありません。だってさ」

何故だろう。トウヤにはいつになく上機嫌な幼馴染がリーリンとお揃いの尻尾を付けているような気がしてたまらなかった。

「おっはよー！ トウヤん！ レイとん！」

朝っぱらから微妙に恥ずかしいあだ名を叫ばないで欲しい。毎朝のようにそう思いながらも、言って聞くようなやつではないことはこれまでの付き合いで分かっているので、あまり気にしないことにしている。

後からやってきた二人とも挨拶を交わして、さあ学校へ行こう。という感じだったのだが……

「……」

ミィフィに押されるようにしてトウヤの横に並んだメイシエンと何を話せばいいのか分からない。さらに、トウヤとメイシエンの少し後ろから感じる無言の視線が痛かった。

「……」

わくわく、と音がしてきそつなくらい期待の籠った三つの視線に、トウヤは自分の精神の安定が音を立てて削られていくのを感じた。

隣のメイシエンも同じ心境のようで、真っ赤な顔をしてちらちらとこちらを盗み見てくるものだから、トウヤとしては笑い返すしかない。

しかも笑い返すたびにメイシエンが嬉しそうに笑って、自分の頬を押さえて恥ずかしがるのだ。トウヤの心は加速度的に平穩から遠ざかっていた。

そこに、さらにトウヤの心の平穩を脅かす人物が現れた。

まずは無難な挨拶を後ろの野次馬と交し合った金髪の悪魔は、見えない尻尾を生やしながら、ニコニコと満面の笑みでトウヤを見ている。その他三人も、リーリンのミニマム版の尻尾を生やしていた。

それによって、トウヤの朝のあれは幻覚ではなかった事がここで証明された。

結局、それに耐え切れなくなったメイシエンがなみだ目で見上げてくるのに折れたトウヤがメイシエンを抱き上げて逃走するまで六人は一言も発することがなかった。

手元に引き付けた愛棒を体ごと振り回す。仮想の敵を吹き飛ばし、距離をとると後は相手の武器を打ち払い、無防備になった体に棒を当てていくだけで済む。そうやって、一つずつ仮想敵のレベルを上げながら、必死にトウヤは戦っていた。

主にフェリの視線から。

「……………」

なぜだろう。朝にもこんなことがあったような気がする。

それに、鍛錬に入るとすぐに集中できるはずなのに今日はどうにも調子がおかしい。邪念……もとい、フェリの視線を無視できないのであった。

ゆっくりと教えたとおりに柔軟体操をするフェリの視線は、一瞬たりともトウヤから離れない。

責めるでもなく、呆れるでもなく、ただ何処か拗ねたようにトウヤの背中を見続けていた。

それに耐え切れなくなったトウヤが、鍛錬の手を止めて何をフェリがして欲しがっているのかを真剣に考え出した。

謝罪は           おそろく違つ。

贈り物？           デートでいくらでも奢らされるだろう。

構って欲しいだけだったり           有り得ないと言い切れないあたり、フェリらしいがひとまず却下。

やはり、どう考えても昨晚のメイシエンとのあれしかなかった。

デートで手を打つと言ってくれたとはいえ、トウヤがふらふらとしていれば告白の返事を待っている立場の彼女からすれば気が気でないのだろう。

早く答えたい。答えようと思うたびに同時に二人の顔を思い出すようになった。少し前までは片方が圧倒的に大きかったというのに。

それに、あの手紙を見てから思い出した。決して忘れていたわけではない。妹分の顔までちらつく様になった。

どこまで優柔不断なんだ。と自分で自分を叱りたくなって来た。た。

「はあ………」

最近、同じことを考えて、まったく先に進んでいない。どちらかを選ぶ、ということはどちらかを切り捨てる、ということだ。いや、確かに優秀な武芸者は子種を残すため、一夫多妻制は半ば義務のようなものだが、それにしあって正妻、側室の一応の優劣はつく。

と、いつのまにか一夫多妻制をまず念頭に置いて考え始めている自分を滅多打ちにして、そんな逃げの思考を切り捨てる。

彼女たちがもしそれを望むのだったら、やはりトウヤも男だ。そういうのに憧れないはずもない。しかし、現実はいーリンが好んで読んでいるどこの都市にも一人はいるような作家の作った恋愛小説のように都合よくはできていない。

トウヤだって彼女たちが他の男と……なんて考えると身の毛がよだつ思いをする。醜い独占欲で意味もなく胸を焦がしたトウヤは、だんだん思考が逸れているのを感じ、いったん深く目を閉じた。

常に己に正直であれ

今は亡き祖父に常に言われ続けてきたこの言葉。トウヤはいつもこれを念頭に置いて行動してきたが、今回の件は祖父の教えだ、と言って思考を放棄できるような安い問題ではない。

そこからが前に進まなかった。

堂々巡りをいつまでも続けていても意味はない。ひとまずこのことを考えるのは止めて、ただひたすら棒を振るうことにした。

再び目を開けたトウヤの目には、すでに雑念はなかった。

世界が茜色に染まり、見えるものすべてが真っ赤に染まる。

フェリと訓練帰りの道を歩きながら、トウヤはこつしたゆっくりとした時間を過ごすのが好きだった。

「……トウヤ」

「ん？」

ふと、なにか思いつめたようなフェリの声に振り向くと、フェリ

が真剣な目で覗き込んできていた。

その真剣な様子にとウヤも無意識に居住まいを正す。

「やっぱり……いえ、なんでもありません」

「……………?」

何かを言いかけて、はっとしたかのように首を振ったフェリはきゅっ、とトウヤの腕を抱きしめてきた。

「ど、どうかしたか?」

意外とスキンシップを好むフェリと最近共に居るせいでこういうものには慣れてきたが、それでもまだ女性に慣れているとは言えず、動揺してしまうのがなんだか少し悔しかった。

「いえ……やはりトウヤも胸の大きい女性が好きなのか、と思いまして」

「は?」

言う気がないのでだろうと思っていたところに、まさかまさかのびつくり発言。トウヤは思わず一瞬目を丸くしてフェリを凝視してしまったが、すぐにその理由に思い至る。

レイフォンから昨日フェリが見ていたことは聞いた。そうならば当然、トウヤがメイシエンに慰められていたところも見られているだろう。

手紙を呼んで少し感傷的になっていたり、メイシエンのあまりに

温かい言葉に耐え切れなくなった、というのも事実だが、フェリからすれば面白くないのは当然だろう。

「そして、何よりトウヤがあの子といちゃついてからこれまでよりもさらに良い顔をするようになったことが一番納得がいきません」

「いちゃ……っ!？」

ついてなんかない。などと言える立場ではなく。

「まったく、何もできない小動物だと思って放っておけば……これこそまさに窮鼠猫を噛む、というやつですか」

ぶつぶつと文句は言っているにもトウヤの腕を放す気配はない。それどころかこの間も通った公園の途中にあるベンチに連れ込まれた。

ぼんぼん、と叩かれたベンチの淵に腰を下ろすところん、とフェリがトウヤの腿を枕にして寝っ転がってきた。

曰ごろから体を鍛えているため、トウヤの体は武芸者ならば誰もが羨む様な素晴らしい程の出来になっている。持久力なども考えているため、普段はやわらかく、瞬時に力を発揮できるようにはしてあるが、それでもフェリたちのような女性の柔らかい肢体とは比べるまでもない。

「……硬いぞ？」

「別に構いません。と、いつかそこまで寝心地が悪いというわけでもありませんから」

トウヤの膝枕の何が気に入っているのか。そう言いながらもフェリは気持ちよさそうに目を閉じた。

はしたない。だとか風邪を引く、だとかいろいろ言いたいことはあったけれど、結局フェリの気持ち良さそうな顔を見ているとそんなことを言う気にもならなくなってきた、仕方なく上着を脱いでフェリの肩にかけた。

そして、膝を貸す代わりに好きなだけフェリの自慢の髪を弄繰り回す。夕陽を照らして輝く銀髪は、トウヤ以外が触れようならば即念威爆雷が炸裂する貴重なものだ。

しかし、そうとわかっていても手を出すものは減らない。いや、吸い寄せられるのだろう。フェリからの話（愚痴）を聞く限り、そんな感じだった。

不機嫌そうにトウヤに髪を梳かせながら不満をこぼすフェリを宥めながらも、トウヤは存分にその絹のような手触りを楽しむ。

フェリが痛くないように気をつけて、形の良い頭ごと撫でたり、首筋をつたう様にしてなぞらせる。

気持ち良さそうにしたり、くすぐったそうに体をもぞもぞさせるフェリの反応を楽しみながら、トウヤは日が落ちるまで十分にフェリと公園で時間を過ごした。



IF十六話 『別れの手紙』(後書き)

……あれ？ メイシエン（ハーレム）ルートの未練を断ち切ろうとしたはずなのに何故フェリが？ こ、これが勝手にキャラが動いたという奴かつ

「冗談はさておき、最近、感想が来ないです……やはりフェリとトウヤのいちゃいちゃを書いているだけでは見せ場が足りないということですね。なるべく見せ場を作るようにしなくては……」

後、活動報告で毎日没になった小説を投稿しています。今は一万字弱のねぎまの没を上げたあと、この滅びた大地、芽生える希望の前身となった作品を上げています。興味がわいた方はどうぞ。

## 第十七話 『日常に潜む影』

軽く掃除を終わらせた後の鍛錬も終わり、軽く汗を流して本日は解散となった。

今日はいつも通りフェリ、トウヤ、レイフォン、リーリンの四人で帰路を歩いていった。

「じゃ、今日はこれで」

「また明日ね、レイフォン」

ちゅつと自然にキスをしているバカップルは見ないようにして、トウヤとフェリも分かれようとしたが、ふとフェリが忘れ物をしたのを思い出した。とはいえここで渡すのも気まずい。別れの言葉を告げようとするトウヤを強引に近くの公園まで連れ出した。

「どうかしたか？ フェリ」

「その、今日渡そうと思っていて忘れてたんですが……」

これは本当だ。トウヤたちが入ってきてすぐにニーナがやってきて鍛錬が始まったため渡せずじまいだったのだ。……こちらを含み笑いで見てくるシャーニッドには少なからずいらつとさせられたが。

「手紙？ 誰から…… ああ、クララか」

「親しいのですか？」

「ああ、俺ら三人の妹みたいな感じ。どうしたんだろ……いやまさか、な」

どこか心当たりがある様子のトウヤがそつと手紙を破り開けた。

親愛なるトウヤへ

お久しぶりです。お元気でしたか？ 私はトウヤ、レイフォン、リーリンがいなくて寂しい毎日を送っています。手紙を出そうとは思っていましたが、やはり直接お顔を拝見しながら話したかったので、断念していました。

さて、今回その決意も折って手紙を出したのには訳があります。実は、キリユウ様がいなくなりました。言付けには『孫に会ってく』と書かれてあったのでそちらに向かっていると思います。

グレンダンの宝が突然いなくなったことで王宮は騒然となりましたが、最終的には丸く収まりました。

トウヤも勉学に励んでください。私は、あなたのいない間に天剣にまで上りつめて見せますから。そして、そのときはあなたと心行くまで死合いたいです。

またいつか会う日を、心から楽しみにしています。

クラリー

ベル・ロンスマイアより

終盤の三文字を見なかったことにして、クラリーベルからの手紙をもう一度読み返す。

「相変わらずだな、あの爺さん」

自分がいた頃となんら代わりの無い祖父の行動に思わず笑いが出られる。

「お爺さん、ですか？」

「ん？ ああ、俺の祖父でな。破天荒な性格の128歳だよ」

ほら、と差し出してみると興味があつたのかすぐに読み始めた。

読み終わったあとの頬が引きつっていたのは祖父の行動力にか、それとも最後に添えられた物騒な文字に対してか。とりあえず返し

て貰った手紙を元に戻すとポケットの中にしまいこんだ。

「あの、グレンダンの宝、ってどういうことですか？」

「ん……なんて言えばいいんだろうなあ。グレンダンが武芸で有名なのは知っているよな？」

当然知っている。この世で一番強いと噂されているグレンダンの名は様々な都市で語り継がれている。主な理由は『戦争』時にたった一人で敵の都市を滅ぼしてしまうことだが、それ以上に汚染獣の襲撃が多いことでも有名だ。

「そこで一番強いのは女王様だけど……その人の我侷を唯一諫められたのが爺さんでな」

「……要するに一番強いということですか？」

リーリンから聞いたことがある。グレンダンでも十二本の指に入るレイフォンやそれに並ぶトウヤでも勝てない相手がいる、と。

「いや、相性とかの問題もあるしな。まあ生身であるパンチを流せるのは爺さんぐらいしかいないだろうけどな」

あの老生体をも一撃で粉碎するパンチを一度どころか、あの人がすつきりするまで受け流した時はすごかった。

人間じゃねえ、というのがその場にいた全員の感想だった。

「楽しそうですね」

「ん？」

「お爺さんのことを話すとき、トウヤの目が輝いてました」

フェリに柔らかくふふっ、と笑われて恥ずかしくなった。そんなに子供っぽかったか？

「好きなんですね、お爺さんのこと」

「まあ、な」

唯一の肉親であり、同時に尊敬する師匠でもある。

だがそれ以上に……

「壁、だな」

「え？」

「あの人は、俺の前にでっかく立ちふさがってる、押しても引いてもうんともすんとも言わない馬鹿でっかい壁だよ。いつか俺が乗り越える、な」

そう、幼い頃から言われ続けてきた。超えて見せろ、と。実を言くと、ソウシン流には極めるという概念はない。どこまでも、どこまでも用意されている長い道をただ駆け抜けていく、それがソウシン流の理念だった。

「……ふふ」

「ん？ どした？」

「いえ、今すつごくトウヤが男の顔をしてましたから、見惚れてました」

「んなつ」

かっこよかったですよ、と少し赤くなつた顔で艶やかに言われ、トウヤの胸が大きく高鳴つた。

「ですけど……」

「ん？」

すつ、とフェリの白魚のように白いたおやかな指がトウヤの頬に添えられた。こちらを見上げてくるフェリの目に吸い込まれそうになる。

いつからだろうか、フェリの瞳がこれほどまでに綺麗だと思つようになつたのは。まっすぐに自分だけを見て、間にある見えない壁を溶かしつくす熱い熱を持った瞳に、トウヤはとらわれていた。

「その夢を語るのは私の前だけにしてくださいね。そうじゃないと……」

妬げちゃいますから。と言われ、トウヤはとても形容しがたい気持ちになつた。嫉妬してくれているという満ち足りた感じ、今すつとフェリを抱きしめたいという狂おしいまでの激しい想い。

「こちゃ混ぜになつた制御できない気持ちをもてあまし、トウヤは

一瞬動きを止めたが、すぐに理性をその情動が飲み込んだ。

「フェリ……っ」

が、しかしまたしても後一步というところであるりと逃げられてしまう。

「ふふふ、今ここでトウヤに身を任せてめちゃくちやにかき抱かれるのもいいですが……」

自分で想像したのか、その言葉を裏付けるかのようにフェリの体は期待に震え、熱っぽい視線をよこしてくる。

「もう少しですからね、トウヤを骨抜きにするのは。そうしてからも遅くはありません」

ぺろり、とフェリが唇を舐めて大きな期待が籠った目を向けてくる。

肉食獣が獲物を前にしているかのような目に、トウヤは大きく息を吐き、手のひらを上にして両手を挙げることにしかできなかった。

そうして、一夜明けカリアンに呼ばれたトウヤは、レイフォンと一緒にフェリの料理教室を開いていた。

「っと、なんでこれを入れようとしてるんだ？」

「隠し味に入れると聞いたことがあったんですが……」

「だめだ。却下」

カレーに何故か炭酸飲料水を入れようとするフェリを止めたり、

「あの、フェリ先輩？」

「なんですか？」

「包丁ではなく、こちらの皮むき器でやったほうが良いと思いますよ。」

「……そうですね」

皮を剥こうとして実を半分以上削るフェリにレイフォンが皮むき器を渡したり、

「あー、さすがにそれは俺がやるよ」

「……はい」

キャベツの千切りを震える手でしようとするのを事前に止めたり、

「ちょっと待て、何でスープに砂糖を入れる!？」

「塩を入れすぎたので……ダメでした？」

「いや、あー、うん。良くは無いと思っぞ?。」

可愛らしく小首をかしげるフェリに強く言えないトウヤがいたりして、

「サラダの盛り付けは私がやります」

「じゃ、俺はスープをやるかな」

「じゃあ僕はカレーだね」

二時間ほどかけて、ようやく夕飯が完成した。

カリアンとフェリは高級マンションの最上階に住居を構えている。最上階はドアがひとつしかなく、カリアンら以外に部屋を借りている住人はいないはずだった。

「……うん?。」

ふとドアの前に立つと鼻をくすぐる香辛料の匂い。なんとも懐かしくなるこれは、昔家に居る頃は良く食べたカレーの匂いだった。

「おかしいな……」

妹のフェリは壊滅的に料理ができなかったはず。なにせジャガイモは洗剤で洗うと信じて疑わないのだ。そんなフェリがカレー?

首をかしげながらドアを開け、廊下を数歩歩いて居間のドアを開

けた。

「よっ、良いタイミングだなカリアン」

「今ちようどできたところですよ」

すると、エプロン姿の友人が出迎えてくれた。その二人は両手に二つずつ皿を持っている。

ほこほこと暖かな湯気を上げて香ばしい香りを発するのはカリアンが先ほど思ったとおり、カレーだった。

「ほら、そんなところで突っ立ってないで座ったらどうですか？」

「あ、ああ……」

机を拭いていたフェリに促され、半ば形骸化していた食卓に着くと、目の前にカレーやサラダ、付け合せのジャガイモのスープが運ばれてくる。

「おお……」

フェリほどではないが、自身も料理なんてものができないカリアンにとっては六年ぶりの手料理だった。思わず口から感嘆の声が出る。

「これはトウヤとレイフォンが？」

「いや、俺たちはフェリの手伝いだよ。危なそうなところをちょっとだけ」

「まあ、さすがにジャガイモを洗剤で洗おうとするのは止めましたけどね」

「……………」

少し頬を赤くしてそっぽを向いたフェリを二人が微笑ましそうに見守る中、カリアンは驚愕で目を見開いていた。

まず、見た目が食べ物だ。紫色でどろどろとしていなかったり、もちろんあのチャーハンみたいにもぞもぞと何かが気味悪く蠢いたりしていない。

香りも五メートル先のゴキブリを殺傷するようなものではなく、食欲をわかせる香ばしい匂い。

穴が開くほどカレーを見つめた後、異常が無いことを確認してようやく肩の力を抜いた。

「失礼な反応ですね。そんなに私の作ったカレーがおかしいですか？」

「あ、いや……………」

責めるようなフェリの視線に、幼少の頃、幾度となく味見をさせられて生死の境をさまよったカリアンとすれば口を濁すしかなかった。

代わりに、親すら匙を投げたフェリのまともな料理を作るために尽力してくれたであろう二人に深く頭を下げた。

フェリはそれに不満そうな目をするも、自分が料理下手だということには自覚しているらしく、特に何もいわなかった。

「さて、それじゃあ食べようか」

「そうですね」

夕食を堪能し、片付けぐらいは、と申し出たカリアンに後片付けを任せて寛いでいると、皿を洗い終えたカリアンが手を拭きながら戻ってきた。

自分で煎れたらしい紅茶を三人の前に置くと、テーブルにおいてあった封筒から一枚の写真を取り出した。

「さて、今日君たちを呼び出したのは他でもない。前回の事から汚染獣に対する警戒を強化しようと思ってるね。その成果の一つが、これだよ」

ひらり、とトウヤとレイフォンの前に出された写真はノイズがひどく、鮮明に見える写真ではなかった。

それはカリアンも分かっているらしく、特に注目してほしい箇所を指差しながら解説した。

「これは錬金科に作ってもらった遠隔操作型の監視カメラから送ら

れてきた映像だ。ここを見てほしい。一応山なのだが、気づいた事があれば言ってほしい」

詳しい事はそれ以上口に出さずにカリアンは紅茶を一口口に含んだ。おそらく下手に先入観を与えたくないのだろう。

それぐらいは理解している二人は何も言わずに写真を見た。

遠くから目を細めてみたり、近くでじっと凝視したりするレイフオんと、冷静に写真を眺めるトウヤ。

ふと、まったく同じタイミングで二人の眉がぴくりと動いた。

好奇心からか、ちらちらと見たそうにしているフェリに写真を渡すと、トウヤは小さくため息をついた。

その隣で真剣な目をしたレイフオンが口を開き、カリアンの想像通りの答えを口にした。

「おそらく、カリアンさんが思っている通りだと思います」

「……そうか。それで、どのくらいの強さなんだい？」

「それは……」

「おおよそ、雄性体三期以上五期以下つてところか」

「「え？」」

驚いきの声を上げる兄妹に説明するためにトウヤは写真に手を伸

ばし、山と汚染獣のちょうど間を指差した。

「ここ。基本的に汚染獣は老性体に近づくにつれ、足を捨てていく。一期や二期なら、こうやってぶら下がるようにするならそれとはつきりと分かるぐらいの足の長さがある。それに対して、これはほとんどへばりついているような状態だ。

……まあ、足を折りたたんでいる可能性も否定できないが、物事は厳しめに見たほうがいいだろう。俺かレイフォン、もしくは両方が行くべきだと思う」

「トウヤっ!？」

自ら死地に飛び込もうと錯覚させる発言をするトウヤに、それまで黙っていたフェリが驚きの声を上げる。それはカリアンも同じで目を見開いてトウヤの事を凝視していた。

「何もあなただけが行く必要なんてないんですよ？ 移動用の乗り物ぐらいあるでしょうし、小隊員と一緒に行ってもいいじゃないですか!」

「あ、いや……」

「兄さんからも言ってあげて下さい」

トウヤの困ったような視線と、フェリの怒りのこもった視線に同時に見つめられ、カリアンは小さくため息をつくと言った。

「……いや、トウヤがそう言うんだ。何かわけがあるのだろう？  
なら、僕らは口を出すことはできない」

「っ……！！！！ 兄さん！！」

「落ち着くんだ、フェリ。仮にも戦闘のエキスパートであるトウヤが言うんだ。素人の僕らが口を出す必要はない」

「それはっ………そうでしょうけれども」

不安と怒りが緋い交ぜになった視線をぶつけられ、トウヤは軽く肩をすくめた。

「正直、増援はいらないんだ」

「そうですね。トウヤの言葉どおりです。雄生体五期の相手ともなれば正直ヴァンゼさんクラスでも足手纏いです。やるなら罔とかぐらいですが………厳しいでしょう」

すまなそうなトウヤと、武芸に関しては妥協しないレイフォンの言葉を聞いて、フェリは渋々肩の力を抜き、ソファにもたれかかった。

「はあ………そういうことなら、納得してあげます。だけど、無茶だけはしないでくださいね」

心配そうに見つめるフェリに二人は苦笑いをするしかなかった。

汚染獣戦では無茶しないと言うのはありえない。攻撃をかすりさえすれば致命傷な汚染獣戦は、常に命を懸けて望まなければいけない。

それでも、不安そうなフェリに二人は頷いたのであった。



第十七話 『日常に潜む影』 (後書き)

イヤー、リアルが忙しく一週間投稿が恒例になっちゃいそうです。遅筆ですいません。

メイシエンルートには皆さんスルーでしたね……これはフェリともつと絡ませろという天啓っ！？ いやすみません。これ以上増やしてどうするって感じですよね。

感想、ご指摘等待着っています。

## 第十八話 『固まる心』

ぴっ、ぴっ、とPCから機械音が発せられる。

そのPCから伸びる線を辿れば、吸盤のようなもので体中を覆いつくされたトウヤとレイフオンの姿があった。

「あゝ……これって、なにやってるんですか？」

「ん？ これかい？ これは今二人に流して貰っている剝を測定してるんだよ」

ほら、と手元のノートパソコンをくるっ、と返して見せてくれたそこには武芸一辺倒の二人にはちんぷんかんぷんなグラフやデータが所狭しと並んでいた。

「「うーん……」」

同じ角度で頭を掲げる二人の様子に笑みをこぼすのは、ニーナの幼馴染であり、十七小隊の専属技師であるハーレイだった。

と、そのとき目の前のノートパソコンからぴっぴつと電子音がして、作業が終わったことを知らせた。

「うわあ、収束率がすごい。それに量も。これなら幼生体の殻を鋼糸で切り裂くのも領ける。」

これなら白金鍊金鋼の方が良かったかな？  
フラチナダイト

「……いえ、刀にするなら黒鋼鍊金鋼クロムダイトのほうが良いのでこれでいい

です」

タタタタ、と息もつかずにPCになにやらデータを打ち込んでいるハーレイにレイフォンが答えるとオツケー、任せてっ。と気の良い声が返ってきた。

「トウヤは？」

「エメラルドダイヤト碧石錬金鋼製でお願いします」

「トウヤは収束率重視かあ。うん、わかった。明日までには二人専用の錬金鋼を用意しとくからね。」

あ、そうそう。二人の言っていた錬金鋼が破裂するって奴だけど、解決するかどうかは分からないけどとりあえず試作品も一緒に持ってくるからっ」

バタバタと忙しくなく後片付けを済ませたハーレイはそう言い残すと、慌しく武道館を出て行った。

それをぼんやりと見送った二人の前に、だん、と音を立てて仁王立ちする一つの影が。

「さあ、練習開始だ！」

「はあ……はあ……はあ……」

「うん、今日はこれまで。お疲れ」

いつものようにニーナやシャーニッドにサイハーデン流の基礎訓練を行うレイフォンと、こちらは全然その域に達してないので基礎体力作りに専念しているフェリを見るトウヤの二組に分かれて練習をしていた。

とはいってもフェリは本当に普通の女の子程度の体力しか持っていないのでかなり程度を抑えている。

が、それでも本人にとってはやはり厳しいものがあるのだろう。今も息絶え絶えに壁にもたれかかっていた。

タオルを手渡したトウヤから力なく受け取るとふらふらとベンチのほうへと向かっていった。

ツルッ

「うわぁっ」

ズデン

ツルッ

「のわぁっ」

ズデン

向こうを見ればどうも今は硬球の上を歩く訓練をしているようだ。すたすたと歩くレイフォン違い、まだ繊細な剄の扱いに慣れていない二人は面白いように転げまわっている。

フェリの方は終わったし、混ざってくるかな。と足を向けようとした時、じとつ、としたフェリの視線を感じた。

手招きをするフェリの無言の圧力に逆らえず、トウヤは恐る恐るそちらへ向かった。

「あんな拷問をしておいてアフターケアもなく放ったらかしですか。いい度胸ですね」

怒ってた。すつごく怒ってた。うん、これは自分が悪い。

フェリのためを思って限界ぎりぎりを見極めて組んだ練習メニューなのできついのは当たり前だが拷問とまで言われるのは予想外だった。

「いや拷問って……」

「良いからこちらに来なさい」

「……はい」

すとな、とフェリの隣に腰を下ろすとフェリが力なくもたれかかってきた。

いつの間に制汗スプレーなどつけたのだろうか、さわやかな柑橘系の香りとフェリ自身の甘い匂いが混ざった匂いが混ざってトウヤ

の鼻をくすぐった。

ぐったりと自分にもたれかかる弱弱しい姿を見せるフェリを見て  
いると、どこか背筋がぞくぞくしたものを感ずる。

「どSですね」

「んなつ」

「こんな美少女にスパルタを強制するなんて、鬼畜ですね」

一瞬、自分の危ない思考が読まれたのかと思ひ冷や汗を掻いたが、  
いつもの冗談だと分かりほっと一息ついた。

「それとも……」

「ん？」

「本当に悦に入っていました？」

「………そんなことねーよ」

そうですか、と艶やかに笑ったフェリは体を乗り出してトウヤと  
向かい合わせになるようにその膝に座った。

突然のことに慌てふためいているトウヤに向かって首に手を回し、  
その熱くなつた体をこすり付けるとともにトウヤの耳元で小さくさ  
さやいた。

「あなたになら、何をされても構いませんよ？」

唐突にそう切り出したフェリは、顔を真っ赤にして魂を抜かれたかのように自身をぼーっと見つめるトウヤを見て、妖艶に笑った。そして、ペろり、と舌で唇をなめるとその体制のままゆっくりと顔を近づけて

「こらっ、その二人！ 何してる！ 終わったんなら早くコッチに来いっ！..!」

「っ！ は、はい。今行きますっ！..!」

ちっ、というフェリの舌打ちを耳元で聞きながらトウヤはがちがちに固まっていた体からゆっくりと力を抜いた。

しかし、こうして邪魔が入ってみればあの時間が邪魔されたことは少し残念に

「残念でした？」

「ッ！ いや、そんなことは……」

ありますよね？ といった笑みで見上げてくるフェリにトウヤは返す言葉を持たなかった。

「ごめん……」

「気にしないで、っていうか言ったでしょ？こんなことは僕達にとつては日常茶飯事だったって」

「確かにそうだけど、本来こんなことは小隊員のすることじゃない」

「いやでも……」

「はい、ストップだ二人とも。もうここまで来たんだから言い争いをしても始まらないだろ、ナツキ」

「それはそうだけど……」

今、二人は都市警本部の対策室にいた。どうも以前グレンダンは高名な武芸者も都市警に協力しているという話をしたのを上司に話したらしい。

まあ、そうすると小隊員で実力は確実な二人にこういった話がまわってくるのは当然とも言えた。

「ま、ナツキたちにはいつも良くしてもらってるからな。これくらいお安い御用だ。丁度バイトも休みだったしな」

「そうそう。本当に気にしてないから」

「それなら……いいんだが」

そこで、偶然かはたまたタイミングを狙っていたか、丁度良いタイミングでナルキの上司が入ってきた。

小柄だががっしりとした体つきで、武者者ではないようだが自分で体を少し鍛えてるようだった。

「ああ、君達が……養殖科五年のフォーメッド・ガレンだ。すまないが今日はよろしく頼む」

少し無愛想だが根は悪くなさそうだ、というのがまっすぐな目を見た二人の感想だった。

その大工か鍛冶屋かと思うような太い腕を差し出され、力強い握手をもらった。よほど期待されているようだった。

「二人は機関部清掃のバイトをやっているんだっただか？」

「ええ、週五日で」

「そうか……貴重な休みにすまん。今日の件が終われば成功失敗にかかわらず都市警からも報酬を出す」

「ありがとうございます」

勧められてソファーに座ると、早速で悪いが……と封筒を手渡された。

開いて中を確認してみると今回の事件の資料のようだった。隣のレイフオンのものを見てみると、自分のものとは少し違うものらしかった。

「すまんがアルセイフ君のもののほうが急を要するので先に説明させて貰う。君は悪いが資料に目を通していてくれるか？」

「はい」

フォーメッドがレイフォンに現状を説明しているうちに、トウヤは取り出した薄い資料に目を通す。

違法酒販売のことがようだが、どうも調査報告を纏めただけのもののようにいくつかの情報が箇条書きされていた。

・別名スピードとも言われる剽脈加速薬の違法販売をしていた放浪バスを近隣都市で確認。

・発覚したときに取り押さえようとしたが、護衛の武者のレベルが高く、その学園都市では捕縛不可。

・ヨルテム公認の放浪バスを精巧に模倣した個人運用型で、運転手も向こう側であると予想される。

その他にも色々書かれているが、重要なのはこの三つぐらいだろう。

どうも今日到着したある学園都市からの情報交換用の放浪バスの運転手からもたらされた情報のようで、すぐ近くに停泊していたらしい。来るなら今日の深夜。都市全体が寝静まった頃に来るだろうと予測されているらしい。

「よし、それじゃあアルセイフ君はゲルニと現場に向かってくれ

か？」

「わかりました。終わり次第連絡します」

ちらつ、とこちらを見てきた二人に頷き返すと二人は少し足早に出て行った。

「よし、では説明に入るが、資料には目を通したか？」

「はい」

「なら細かいことは言わんでも大丈夫だな。ホシは現在ツエル二南方50キロメートルほどに停泊しているようだ。その位置から考えて、こここの停泊所に乗りに乗るだろうと思う」

壁に貼られたツエル二全体図の南端を明示したフォーメッドに頷き、先を促した。

「24:00作戦スタートだ。そこには念には念を入れて都市警の武芸科100名を配置しておいた。何か希望はあるか？」

「希望というか……100名も要りません」

「なに？」

「20名ほどで周りを囲んでくれれば後は俺が片をつけるので大丈夫ですよ」

「俺が、っていくら小隊員でもそりゃ無理だ。向こうでは30名で向かって手も足も出なかつたと聞いている。死傷者も出たそうだ」

言外に調子に乗ってるんじゃないだろうな、という疑惑を目に浮かべたフォーメッドをただ黙って見返す。

「……はあ、埒が明かないな。しょうがない、50人だ。これ以上は下げられん。俺達は都市の安全を担っているんだ」

フォーメッドの強い意志の籠った目にはっ、とさせられた。今の言葉は、何も相手を舐めて言ったわけではない。トウヤならそれで本当に十分な数だったからなのだが、フォーメッドたちは絶対に失敗できないという覚悟を持って事件に全力で取り組んでいることに気づかせれた。

「出すぎたことを、言いました。すみません」

机に手を突いて深くトウヤが頭を下げると、フォーメッドは少し驚いた顔をした後、ニヤツ、と男臭い笑みを見せた。

「どうやらただ調子に乗っていただけじゃなかったようだ。本当にその自信が、確信があったのか」

満足そうな表情になったフォーメッドは胸ポケットからタバコを取り出した。

「それと、お願いがあります」

「ん？」

「配置は出来るだけ現場が見えないところか、もしくは緘口令を強いてくれると嬉しいんですが」

「……何故だ？」

「あまり大きく騒がれるのは嫌というか……」

「ふ、何か事情がありそうだな。分かった。伝えてはおくが、人の口に戸は立てられないと言っからな」

「分かっています」

23:00。今、ツエルニは温暖期を過ぎ、寒冷期に向かっていく途中なのでこの時刻になると流星に冷える。

作戦開始は24:00だが、一時間速く来たトウヤは停泊所を見張るのに一番良いポイントはどこか探っていた。

ちょうどいい四階建ての建物があったのでその屋上へ上る。正方形の建物で、落下防止用のフェンスも立っていないし、腰上辺りまでの壁もある。距離も100メートル弱とトウヤなら数秒もかからない距離だ。

ベストな位置を確保でき、ほっと一息ついたトウヤの耳に、この階段を上ってくる音が聞こえた。

その足音はまっすぐにここ屋上を目指している。

フォーメツドか？ いや、場所は教えていない。入るところを見られて一般人が興味本位で追いかけてきたか？

どうやらそれが一番信憑性が高そうだった。しょうがないのでやり過ぎそうとドアの頭上にある更に高くなっているところに上がると、じつと上ってくるのを待った。

きい、と小さく音を立ててドアが開くと、まずは綺麗な黒髪が眼に入った。

(ん?)

「あ、あれ？ トウヤいないなあ……」

「メイ？」

「ひゃあっ!!」

とことこと中央まで進み、きよろきよろとあたりを見渡すメイシエンに声を掛けると、よほど驚いたのか、ずでっ、と転んでしまった。

それでも持っていた包みを必死で離そうとしないあたり、よほど大事なものが入っているのか。

「だ、だれ……?」

「俺だよ……っ」と

ひよい、と飛び降りてメイシエンの前に飛び降りると、目に大きく涙を溜めていたメイシエンはほっと一息ついて照れたような笑みを見せてくれた。

「どうしたんだ？　こんなところで」

「えっと、ナツキがトウヤ今日は夜中まで仕事してるって教えてくれたから、その、差し入れを……」

「おおつ。サンキューな。助かった」

丁度腹が減っていたところだったのでこれは渡りに船だった。それに、こんなところまでわざわざ持ってきてくれたメイシエンの想いに寒さに冷やさされた心がじわっと暖まる。

照れながら簡単なものだけど……と手渡された弁当はかなりの出来だった。

おにぎり、から揚げ、玉子焼き。定番のものばかりだが、いつもと違って出来立ての弁当は更においしそうだった。食欲を誘う香りがトウヤの鼻を刺激する。

メイシエンの優しい視線に見守られながらの食事はどこかこそばゆかった。

弁当の正直な感想を言えば嬉しそうにし、これからのことを心配する彼女に大丈夫、と言い切つてやるとほっとしたように笑う。そんな彼女の仕草一つ一つがトウヤの胸を打った。

駄目だ。このままじゃいけない。

ふとトウヤはこう思っていた。

こんなはつきりしないままじゃ駄目だ。

しかし、だからといって断ち切るのか？　これだけの想いを抱いてくれている彼女を。自分の都合で？

メイシエンが自分の目の前で泣いている姿を幻想し、ぞくつと背筋が凍った。

怖かった。今まで感じたことの無い類の恐怖にトウヤは固まった。

「トウヤ……？」

「っ……」

心配そうに、不安そうに覗き込んでくるメイシエンに、胸の奥が押しつぶされそうになった。

「何でも、ない」

「そう？　顔が青いよ……？」

なんでもないんだ、と言って美味しかった弁当のお礼を言って立ち上がる。

これから自分がどうするのか。どうしたいのか。その答えは徐々にトウヤの中で固まりつつあった……



第十八話『固まる心』（後書き）

遅くなって申し訳御座いません。

また、リアルが急がしく、二月下旬まで更新が難しそうです。  
す  
みません。

## 第十九話 『成長』

音を立てないように、静かに放浪バスが入ってきた。訓練された動きのものが数人バスの窓の隙間から周囲をうかがっている。

しばらくしてから、さらに数名が素早くバスから出て荷物をバスの下に持っていった。不自然に車高が高いと思ったが、どうやら荷物を隠すためだったようだ。わずか数分で荷物の上にカバーを設置し、普通の放浪バスとなんら代わりの無い姿になった。

かなりやりなれている様子で、十中八九こいつらが例の違法取引をしている集団だろう。

「さて、いくか」

すとん、となるべく音を立てないようにビルの陰に着地する。

影から様子を伺い、わざとあわてた様子で一般人程度のスピードで走り寄った。

「すみません！ 外来の方ですか！？」

遠くから少し大きめの声で話しかけると、最後にバスに乗り込もうとしていた痩身の男がゆっくりと振り返った。その立ち振る舞いに不自然な様子はなく、かなりこつこつとした場数を踏んでいるようだ。

「ああ、そうだ。各都市の特産物を積んでいる行商だ。濟まないが朝まで待ってくれないか？ ごらんの通り皆寝静まっている。起すのは忍びない」

すつと半歩ずれた先に見えるのは毛布を引つかぶって眠りに突いている十人ちよつとの男達。しかし、皆錬金鋼をすぐ手の届く位置に置いており、体もリラックスしていて本当に寝ているように見えるが、剽が緊張状態にある。

(ひいふうみいよ……十六、か。運転席にもう一人かな)

「そうですね……では錬金鋼を預けて貰えますか？ 一応の安全のため」

「ああ、分かった」

男は手早く寝ているものの傍に置いてある錬金鋼と自分の剣帯から抜き取ったものを一つの袋に纏めて手渡してきた。

「ありがとうございます。これは生徒会の方へ提出しておくので帰り際に受け取ってください。失礼ですが団体名をお聞かせ願いますか？」

「穴熊だ」

「アナグマ、ですね。わかりました。それではまた明日担当の者が来るはずですのでこちらの用紙に記入事項を纏めて置いてください」

一般的な都市停泊申請書を渡すとペコリ、と一礼をして踵を返す。同時に、気取られないように指の間に針のように細い剽弾を形成し始める。

じつ、とこちらを見つめる視線を感じていたが、五十メートルほ

どするとその視線がすつと外れるのを感じた。

(いまだっ！)

くるっ、と素早く振り返ると同時に、準備していた剄弾を放つ。その数は四。バスの主要な前輪と後輪のタイヤが弾け飛んだ。

外力系衝剄 九乃

「やりやがった！！」

「出るぞ！！」

タイヤが破裂すると同時に俊敏な動きで出てきたのは数えたとおりに十七人。

それぞれがやはり錬金鋼を復元状態で持っている。

しかし、正直とぼけられるかとも思っていたトウヤにとってはこんなにあっさり釣れたのは予想外だった。

が、それも好都合。放つと同時に復元しておいた碧石錬金鋼製の棒をどっしりと構える。

とたん、訝しげな空気が相手側に流れる。学生武者がこの人数相手に一人で相手しようとしていることを不思議に思ったんだろう。

しかし、そんなことに構ってやる義理は無い。

「はっ！」

足を踏み入れる瞬間、内力系活剋が下半身に満ちる。

走るのに力を入れるところに流れるようにして無駄なく剋を流し込んでいくことによって爆発的な加速力を手に入れた。

「喝っ！！！！！」

気迫の掛け声と共にぶわっ、とトウヤの体から鬨気があふれ出る。

すると、一瞬半数以上のものがトウヤとは全く見当違いな所に目を走らせた。

内力系活剋の変化 疾影。

強烈な気配によって錯覚を起こさせるそれに彼らがそれに気づき、慌てて視線を戻すがトウヤはすでに殺剋で気配を消して移動している。

音もなく左方に現れたトウヤはそのまま一番近くにいたスキンヘッドの男に襲い掛かった。無論、奇襲で声を上げるような真似はない。

ソウシン流棒術 『流水棍』

トウヤの接近に気づくことなく意識を刈り取られた男が崩れ落ちるよりも先にトウヤは左右にいた男の首筋に強烈な一撃をお見舞いすると、すぐさま離脱した。

どわどわどわどわ

彼らが気づいたときにはもう遅い。慌てて目を音の発信源に向けてみるとそこには崩れ落ちた三人の姿が。当然トウヤは殺剄で姿を消している。完全に夜の闇にまぎれている。

姿の見えぬ敵。一瞬で倒された仲間。歴戦の武芸者だとしても少なからず動揺する。そして、動揺は伝染する。

にわかに浮き足立った敵にほくそえんだトウヤが第二波をかけようとした瞬間、トウヤと対応した瘦身の男がそれらを一喝し、纏め上げた。

「てめえら何ぼさつとしてやがる！ 円陣組め、二重になって上への対処も考えろ！」

その堂々とした声に、敵は一気に冷静さを取り戻した。

(ちっ)

失敗した。リーダーを先に潰しておくべきだった。

しかし、こうなっては仕方が無い。周囲を駆け回っていたトウヤは諦めてその円に突貫した。

疾影でかく乱し、脇に剄を練りこんだ鍊金鋼を抱え込み、体勢は低く、影のように躍りかかった。

「はっはあ」

「なっ……」

襲い掛かった男の構えていた三節昆を弾こうとした瞬間、その関節が伸びて鋼糸で愛棒がからめとられてしまった。

「困めっ」

衝剄で斬り飛ばしたが、遅かった。先ほどと同じく二重の円で囲まれてしまい、一気に形勢は逆転した。

勇み襲い掛かってこようとする敵を棒を乱回転させ、閃断を無数に飛ばす外力系衝剄 『閃断・嵐』で牽制するが、離れたところからの弓や銃の牽制に中断させられた。

「ちっ」

集団戦がこんなに厄介だとは思っていなかった。一番有効だと思われる鋼糸は封印されたままだし、当然剄を練る暇など与えてくれない。

頭を狙い横なぎにしてくるのを屈み、その後ろから突き出された抉る様な鋭い突きはトウヤの頬を掠めて行った。

後ろからの矢を棒で叩き落とし、空気を引きちぎりながら迫る斧の一撃を肩で逸らす。

（ ん？ ）

ふと、全方向から来る執拗な攻撃を必死にさばっていると、不思議な感覚にとらわれた。

今やっているのはソウシン流の基礎の基礎『流』ながし 相手の力を受け止めず、逸らすことで回避するのだとばかり思っていたが、何か違う。

流れを読め。柔軟になれ。川に流れる水のように

祖父から耳にたこが出来るまで聞かされたこの言葉をもう一度反芻してみる。

流れを読む。

ふとさつきから気になっている感じに従うようにして、鋼糸を操る延長として自分の手足のように刃を伸ばしてみる。すると、感覚が広がった。

今までは風の動きや気配で読んでいた動きが分かる。だが、これだけじゃないはずだ。さらに集中。戦いの流れを読むとはどういうことだ？

「な、なんだ？」

敵の戸惑ったような声が聞こえるが気にならない。広がった感覚をさらに鋭敏にさせた。

ふと、殺気を感じた瞬間自然と体が動いた。左手を引つ込め、右足を上げ、体をよじる。すると、一瞬前まで手足があったところを勢いよく敵の武器が空ぶった。

手に持っていた棒を突き出すと振り下ろしている途中の剣先にぶつかり、そのまま滑らせるように振り下ろすと後ろから足を刈ろう

としていた槍とぶつかった。

刃で覆った手をすつと振ると矢がそれに誘導されるようにして一人の足に突き刺さった。

棒を後ろ手で突き出せば相手がぶつかりに来て、一步体を引けば相手の武器が目の前で交差する。

「ひ、退けっ」

リーダー格の男の一声によつてばっ、とトウヤに群がっていた男達が離れる。

が、トウヤはそれに目も向けずに呆然と自分の手を見つめていた。

勝手に体が動いた。まるで今まで何度も繰り返した型を反復するかのように自然と。

トウヤが空気を読む、ということを実際の意味で始めて理解した瞬間だった。

「急に動きが変わりやがった。明らかに集団戦に不慣れだったってのに」

「まずいですよ。これ以上は人が集まってくる」

「ああ……いや、まてよ？」

ふと、リーダー格の男が何かに気づいたかのように眉をひそめた。

「どうして応援が来ない？ 最初の坊主の動きからしてあれは予定調和のことだった。ならもう来てもいいはずだが」

「俺一人で十分だからさ」

眉をひそめる瘦身の男に口元を吊り上げて見せると、あからさまな舌打ちを返された。

おそらくは人質をとってトウヤの動きを制限しようという腹積もりだったに違いない。まあ、それをも警戒しての単騎出動だったのだが。

「ま、それはどうかな」

「ん？ ……って、おいおい」

男の言葉に不審なものを覚えて辺りを見回してみると、そこには放浪バスの屋上からこちらにガトリングの銃口を構えている最初に落としたはずの一人がいた。

「あいつはうちで一番打たれ強くてな」

「……そーかいっ！！！」

男の手の動きにあわせて、バス上の狙撃手はダラダラララララと惜しみもなく質量兵器をトウヤ個人に向けてぶっ放してきた。

製造が難しく、貴重な質量兵器までも持っているとは相当羽振りが良かったようだ。こんなやつらに金を落としてきた馬鹿どもに怨嗟の声を上げながらトウヤは必死に転がった。

銃口を読んでジグザグになって接近しようとするが横からの弓や銃の牽制でそうもいかない。さらに、数人がバスに向かい、トウヤの破壊したタイヤを別のものと取り替えようとしていた。

(やべっ)

相手はこのまま逃げる気だ。あれだけ大見得張っというて逃げられましたがじゃ格好がつかない。何とかしたいがどうにもならない。そんな状況をひっくり返したのは一枚の桜の花弁だった。

ぼん

「ぎゃっ」

爆発音と共に止んだガトリング。何事かと全員が注目する中、ひらり、ひらりと空から桜の花びらが舞い降りてくる。

その光景にしばし呆然としていたが、猛スピードでこちらに向かっていくトウヤにいち早く気づいたリーダー格の男がバスの上に飛び乗ろうとしたが、空中でまたしても桜の花びらが爆発し、地面に叩き落された。

「ぐがっ……な、なんだとっ!？」

念威爆雷はそこまでの威力が無いにせよ、牽制にはもってこいだった。

「じゃーな」

「ぐはっ……」

すかさずうつ伏せで倒れ付した男の後頭部を踏み抜いて意識を奪い取ると、数十の念威端子に囲まれた男達に襲い掛かった。

意識を失った男達を手際よい手付きで縛り上げていく都市警の人たちを、段差に座ってぼんやりと眺めていると、軽い足音が近づいてきた。

「馬鹿ですね」

「ぐえっ」

ぺちり、と頭を叩かれたかと思うとぐいっつと首を細腕で絞められた。

そのまま引つ張られ、強引にフェリの膝に頭を乗せられた。

ここまで急いで来たのか、少し息が切れ、しっとり汗をかいていた。

「動かないください」

言われなくてもフェリのすべすべしていて柔らかい太ももの感触を感じ、トウヤは固まっていた。

フェリは怒っているとも悲しんでいるともとれる表情でトウヤの頬にできた裂傷を優しく一撫ですると、傍に置いていた救急箱を開いた。

「……助けてくれて、ありがとな」

「……………」

ぶいっとそっぽを向かれたがトウヤの傷を手当てする手付きはどこまでも優しい。

ちょっと不器用なフェリは何度かトウヤの傷口に爪を引っ掛けたりしたが、最後に絆創膏を張り終わるとほっと一息ついた。

フェリはそのまましばらくトウヤの髪をいじっていたが、おもむろにトウヤの目をぐっと覗き込んだ。

「トウヤ……………」

あの目だ。トウヤの頭の中をぐちゃぐちゃにかき乱す灼熱を孕んだ瞳。

「無茶しないでください、と言っても無意味なんでしょうね」

「……………それは」

「まあそれについては諦めています。男とはそういう生き物なのでしょう?」

誰の入れ知恵だろうか? まあリーリンだろうけども。

そんな馬鹿なことを考えていると、フェリがトウヤの頬に手を添えてきた。

「だから、私もついていきます」

「……ん? え、は?」

どうやって? と聞こうとするとぶわっと視界を覆いつくすほどの念威端子がフェリとトウヤを囲むようにして現れた。操作を練習したのだろうか、くるくると周囲を巡るその動きは滑らかでよどみが無い。

「どこまでも、あなたが行くところにこの力で行きます。…まさか、嫌とは言いませんよね?」

目は真剣なまま、口元は優しく笑みの形を形どる。何を言っても聞きそうにないその表情に観念し、目を閉じることで答えた。

「ですから、協力料をもらっていきますね」

「んっ……!?!?」

唇に感じた柔らかい感触に目を開くと、そこには頬を染めたフェリのアップの顔が。

フェリは閉じていた目を薄く開くと、トウヤが驚きに目を見張っていることを確認し、目だけで笑うと、唇はくっつけたままついでむ様に動かしてきた。

自分の唇とフェリの唇がこすれる感触に背筋をぞくぞくとしたものが駆け上がる。

数十秒か、数分か。一心不乱にトウヤの唇を貪るフェリはようやく動きを止めた。

最後にフェリは小さく舌を出してトウヤの唇の間をなぞるように一舐めすると少しだけ顔を離した。

鼻先がこすれ、相手の吐息が感じられる距離でフェリがトウヤの目を見つめてくる。

「私を置いて危ないことをしないこと。いいですね？」

「……ああ」

一瞬、ここで言ってしまうかどうか迷った。しかし、これだけフェリにリードされた後ではトウヤの中にある小さなプライドが許さなかった。

代わりに、こちらからフェリの頬を一撫でし、胸に燻っているこの暴れだしそうな感情を込めてフェリをまっすぐに見返した。

それに少し驚いた様子のフェリだったが、ふるり、と体を小さく震わせると妖艶に微笑んだ。

それに笑い返し、居心地の良いフェリの太ももから頭を離す。

すると同時にカーテンの役割も果たしていた念威端子がフェリの傍に置かれている重晶鍊金鋼バーライトダイトに収まっていた。

「さ、帰るか」

「そうですね」

トウヤの差し出した腕にするりとしがみついたフェリはそのままぎゅっ、と胸に掻き抱くと、トウヤの肩に頭を預けた。

街灯に照らされながら帰る二人の間には言葉はなかったが、どこかほっとさせる暖かい空気が流れていた。

## 第十九話『成長』（後書き）

よ、ようやく書き上がりました……え、ええつとひいふうみいよ十日ぶりの更新となってしまうました。リアルが忙しく、時間が取れないので楽しみにしてください。いる方々にはご迷惑をおかけします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6883i/>

---

滅びた大地、芽生える希望(旧題：学園最強ファンタジー)

2011年2月19日13時11分発行